
沖縄県戦争遺跡詳細分布調査(Ⅱ)

— 中部編 —

2002年(平成14年)3月
沖縄県立埋蔵文化財センター



楚辺海岸沿いのトーチカ



栄橋



与那城監視哨



大城の銃眼（内部）



嘉数高台のトーチカ



浦添城跡南側斜面の壕

序

本報告書は文化庁から国庫補助を受け実施した、沖縄県戦争遺跡詳細分布調査のうち、2000年度～2001年度に実施した沖縄本島中部地区における調査成果をまとめたものであります。

本県は去る沖縄戦において、多くの住民を巻き込んだ激しい地上戦が展開され、多数の尊い命や財産が失われました。さらに、沖縄の歴史や文化を理解する上で、貴重な首里城跡をはじめとする建造物など多くの有形文化財が破壊されました。

沖縄諸島及び宮古・八重山諸島の島々には沖縄戦によって残された、多くの構造物や遺構などの跡地（戦争遺跡）が残されています。これらの戦争遺跡については、これまで全県的な確認調査は行われておりません、また文化財として保存されたものも、ごく僅かに過ぎません。このようなことから、本調査が実施されることになりました。

1998年度に開始された本調査において、昨年度初めての報告書『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査－南部編－』が刊行されました。本報告書はこれに続く「本島中部」を調査対象地区とするものであります。

全県的な戦争遺跡分布調査の成果は、戦争遺跡を文化財として保存検討するための資料として、諸開発事業との調整や歴史学習・平和教育としての活用につなげていくための基礎資料として役立つものと考えております。

本報告書が沖縄戦に関する重要資料として、文化財保護思想の普及啓発や地域文化財への関心、並びに沖縄県の歴史に対する理解と認識を深めるために、多方面にご活用戴ければ幸いに存じます。

末尾になりましたが分布調査ならびに報告書をまとめるにあたり、多大なるご指導ご協力を賜りました文化庁をはじめ、関係市町村教育委員会などの各位に対し深く感謝申し上げます。

平成14年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 知念 勇

例 言

1 本報告書は、平成12年度～平成13年度に実施した戦争遺跡詳細分布調査（中部地区）の成果を取録したものである。

2 本調査は、文化庁からの補助を受け、沖縄県教育委員会が主体となって行った。

3 執筆者は次のとおりである。また、編集作業は県立埋蔵文化財センター職員、委嘱調査員及び資料整理作業員の協力を得て地主園が中心に行った。

川元 哲哉	第1章、第IV章6節 a、b、7節 b、d、第V章、附編II
地主園 亮	第IV章1節、2節 b、4節、5節、8節、10節 b、13節
吉川 由紀	第III章、第IV章2節 a、6節 c、9節 b、10節 a
島袋 貴	第I章、第IV、章11節、12節
村上 有慶	第IV章7節 a、c
恩河 尚	第IV章3節
吉浜 忍	附編 I
池田 榮史	第IV章9節 a

4 本報告書に使用した地形図は、国土地理院（平成6年12月1日）発行の25,000分の1を複製、転用した。

5 附図として遺跡分布図及び遺跡一覧表を掲載した。

6 本調査において、中部地区各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者等の協力のもと、円滑な調査を実施することができた。記して感謝申し上げます。

7 本調査で得られた実測図、写真などの資料はすべて沖縄県立埋蔵文化財センターに保管してある。

8 本報告書第IV章の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。

種別：住民避難、陣地、政治・行政、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、秘匿壕、監視哨、銃座、掩体壕、指揮所、不明、その他

形態：自然壕、人工壕、建造物、構築物、不明

※本報告書では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った構造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。

目 次

巻首図版	1
序	1
例 言	1
第1章 調査の概要	1
第1節 調査に至る経緯	1
第2節 調査体制	1
第3節 調査経過	2
第II章 地理的・歴史的環境	4
第1節 地理的環境	4
第2節 歴史的環境	5
第3節 沖縄戦前後の市町村編成	7
第III章 沖縄戦の概要	10
第1節 本島中部における軍配備と住民の様子	10
第2節 米軍の本島上陸と首里までの戦闘	11
第3節 戦場の住民たち	12
第IV章 各市町村における戦争遺跡	15
第1節 浦添市	17
a. 浦添城跡南側斜面壕群	18
b. 前田高地壕群	20
第2節 宜野湾市	23
a. 嘉数高台のトーチカ・陣地壕	24
b. 我如古の陣地壕群	26
第3節 沖縄市	29
a. 倉敷ダムの陣地壕群	30
b. 美里の幸安塚・忠魂碑	32
c. 桜花の掩体壕群	34
降伏調印記念碑	35
第4節 具志川市	37
a. 具志川の海軍砲台跡	38
b. 大田の指揮所跡	40
c. 具志川城域の壕	42
d. 旧天願橋	43
第5節 石川市	45
a. ヌチンヌジガマ	46

b. 楚南の陣地壕	48
第6節 西原町	49
a. 棚原陣地壕群	50
b. 小波津の陣地壕	52
c. 西原村役場壕	54
第7節 北谷町	55
a. ウカマジーの海軍砲台跡	56
b. 吉原機関銃陣地壕	58
c. 白比川沿いの特攻艇秘匿壕群	60
d. 嘉手納監視哨跡	61
第8節 嘉手納町	63
a. 久得の陣地壕	64
b. ウシヌルガマ	66
c. 栄橋	68
第9節 勝連町	69
a. 津堅島クボウグスク周辺の陣地壕群	70
b. 平安名の住民避難壕	72
第10節 与那城町	73
a. 与那城監視哨跡	74
b. 伊計島大砲陣地跡	76
第11節 中城村	79
a. 161.8高地陣地	80
第12節 北中城村	83
a. 大城の銃眼	84
第13節 読谷村	87
a. チビチリガマ	88
b. シムクガマ	90
c. 座喜味の掩体壕群	92
d. 都屋・楚辺海岸沿いのトーチカ	94
e. 比謝川沿いの特攻艇秘匿壕群	96
第V章 調査の成果	98
第1節 遺跡の分布状況と調査の問題点	98
第2節 地理、種別ごとにみる戦争遺跡の特徴	98
第3節 おわりに	99
附 編	103
I. 記念碑	104
II. 米軍基地立ち入り調査の手続き	106
索引	108

第I章 調査の概要

第1節 調査に至る経緯

1995年3月文化庁によって「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準」が改正され、その中の「史跡」の項目に「戦跡その他戦争に関する遺跡」が加えられた。この改正に伴い、年代の制約枠として、第二次世界大戦終結頃まで含まれることになり、太平洋戦争における戦争遺跡も史跡として指定することが可能になった。広島原爆ドームが国史跡として指定され、1996年にユネスコ世界遺産に登録されたように、戦争遺跡を文化財として次世代に伝えることの必要性が全国的にも認知されたのである。

沖縄県内では、太平洋戦争（特に沖縄戦）によって、多くの一般住民を巻き込んだ熾烈な戦闘が展開された。そのため多くの人命と共に、貴重な文化遺産が破壊されたという歴史を今もなお多数の県民が共有している。

しかし、これら戦争遺跡に対する関心の高まりにもかかわらず、戦争遺跡をどのように文化財として調査・研究するのかという検討は必ずしも充分ではなかった。

このような現状認識をふまえ、1998年度より戦争遺跡詳細分布調査が開始される。本調査初の報告書として、昨年度刊行された『沖縄県戦争遺跡詳細分布調査—南部編—』は、南部地区全域を調査対象とした成果報告である。

本報告書はそれに続く中部地区を調査対象とするものであり、本島中部地区の戦争遺跡の現状を把握することに努めた。

各地区ごとの戦争遺跡詳細分布調査報告書は、(1)文化財指定及びその保存に向けての資料(2)諸開発事業から保護するための資料(3)歴史学習・平和教育等への戦争遺跡の活用 に供する基礎資料、を報告するという目的で作成されるものである。

第2節 調査体制

現地調査(平成12年度)から資料整理及び報告書の刊行(平成13年度)まで、下記の体制で実施した。また、各市町村教育委員会、地域史協議会機関及び関係者からの協力を随時得ることができた。

調査主体	
沖縄県教育委員会	
教育長	翁長良盛 (平成12年度)
"	津嘉山朝祥 (平成13年度)
埋蔵文化財センター 所長	知念 男 (平成12年度～平成13年度)
"	副所長兼庶務課長 知念 廣義 "
調査事務	
埋蔵文化財センター 庶務課主事	上原 浩 (平成12年度～平成13年度)
"	城間 千賀 "

委嘱調査員

(財) 沖繩県文化振興会
公文書管理部史料編集室 主幹 吉浜 忍 (平成12年度～平成13年度)
(現県立南部農林高等学校教諭)
(財) 沖繩県文化振興会
公文書管理部資料編集室嘱託員 地主園 亮 (平成12年度)
(現埋蔵文化財センター調査課主事)
沖縄職業能力開発大学校 助教授 村上 有慶 (平成12年度～平成13年度)
琉球大学法文学部 教授 池田 榮史 (平成13年度)
沖縄市経済文化部文化振興課 副主幹 恩河 尚 (平成12年度～平成13年度)

調査総括

埋蔵文化財センター調査課
調査課長 島袋 洋 (平成12年度～平成13年度)
調査員 長嶺 均 (主任 平成12年度)
川元 哲哉 (主事 平成12年度～平成13年度)
" 地主園 亮 (主事 平成13年度)
" 調査補助員 矢沢 秀雄 (平成12年度)
" 吉川 山紀 (平成13年度)

調査作業員

島袋貴、伊礼利香、山内すず子、久保田有美、玉城志奈子

調査協力者

仲地和雄、伊禮栄二、玉城盛輝、根神よし子、波平正康、曾根誠一、比嘉正夫、大湾利隆、宮里真厚、真栄平房毅、比嘉篤、大城徹也、知念聖亀、崎山トミ子、砂川正邦、古塚敦子、島袋春美、又吉純子、西銘章、天久朝海、島仲美香、佐和田美和子、金城恵子、比嘉孝子(順不同)

第3節. 調査経過

今回の分布調査は、1998年度から開始された本事業のうち、中部地区13市町村を調査対象にしたものである。2000年度に遺跡の分布状況やその範囲確認を行うため、表面踏査を主体に実測調査、聞き取り調査などを行い、2001年度にその資料整理及び補足調査を実施した。年度ごとの概要は以下のとおりである。

－2000年度(平成12年度)－

戦争遺跡詳細分布調査実施要項に基づき、調査員会議を設置した。前年度まで県教育庁文化課において行われた調査事業であるが、2000年4月の県立埋蔵文化財センターの開所に伴い、調査事務局が移動することになった。

第1回調査員会議において、各市町村における戦争遺跡数の把握状況にばらつきがあることを確認。各市町村の文化財担当者に主な戦争遺跡のリストアップを依頼し、現地調査前の戦争遺跡一覧をデータベース化した。

7月～翌年3月にかけて随時実施した現地調査の際、表面踏査を主体に実測、聞き取りを実施し、中部地区において約170ヵ所の戦争遺跡を確認した。

－2001年度(平成13年度)－

2000年度の調査成果の資料整理を行った。特に、聞き取り調査を実施した戦争遺跡については、その内容を各市町村教育委員会文化財担当課及び地域史協議会関係機関に確認を依頼し、戦争遺跡の情報の補填を行った。特に必要な戦争遺跡についての遺構図測量を随時行った。

嘉手納空軍基地内は、本来2000年度に現地調査を実施する予定であったが、立入申請等の理由により、2001年8月に実施した。その際、3ヵ所の戦争遺跡と沖縄戦に係る記念碑を確認した。

また、4回に及ぶ調査員会議において、戦争遺跡の遺構の保存状況、希少価値、役割・歴史的背景などを議論し、報告書の内容及び編集に反映させた。

第II章 地理的・歴史的環境

第1節 地理的環境

本報告書における調査対象地域である中部地区とは、沖繩本島の中程に位置し、北は金武町及び西原町の恩納村に、南は那覇市及び島尻部に接する。東は中城湾より遙か太平洋をのぞみ、西は東中国海に接する。いわゆる中頭部と呼ばれる5市8町村から構成される地域である。

中部地区の市町村総面積は約279.33km²で沖繩県全体の約12.3%を占め、人口は56万3966人で沖繩県全体の約42.3%を占めている。これは他の各地域と比較しても、最も人口が密集している地域である。なお、各市町村の面積・人口は表1-1の通りである。

中部地区の地形は、天願—知花—嘉手納—残波岬を結ぶ線の南北で異なる。中生界の粘板岩・千枚岩を主とする名護嶺と中生界をなしし第3系砂岩・頁岩を主とする嘉陽層などからなる段丘が、北部地域から石川市付近まで連なる。天願—知花—嘉手納—残波岬以南は第3紀層の島尻層群とそれを不整合に覆う第4紀層の琉球石灰岩から構成される。島尻層群のうち、シルト質粘土地域には、波状台地が形成されている。また、中部地区は中央部に第3紀層が見られ、3段の珊瑚礁が大部分を占めている。河川が少ないが、地下水系が発達しやすく、基盤の第3紀層と珊瑚礁の間から湧き出る泉が飲料水・灌漑用水として利用されてきた。地下水系の発達は、鍾乳洞などの地形を多く形成した。これらは、「テイヤ」「アブ」「ガマ」などと呼ばれている。中部地区では、浦添市のチファチャーマ、嘉手納町のミズガマ、宜野湾市・具志川市・与那城町のマヤーマなどがある。これらの自然洞窟の多くが、沖繩戦時に住民避難などの目的で利用されている。

また、沖繩県では世界全体で見て高温多雨の地域（年平均気温22℃、年平均降水量は2000mmを超える）に属し、そのために厚層風化（物理的な風化ではなく、化学的に風化することで、場所によっては数10～100メートルまでその風化を受ける）が著しい地域に含まれている。丘陵地帯には泥岩や砂岩の風化土壌が分布しており、それぞれ「ジャーガル」「ウヅマ」と呼ばれている。これらの土壌は保水性がよく、比較的肥沃であることから、傾斜の緩やかな丘陵斜面は畑に、谷底地帯はかつて水田に利用されることが多かった。また、琉球石灰岩を除けば、砂岩や「ウヅマ」で構成される丘陵に塚を築る例がよく見られたことも挙げておきたい。また、このような塚は風化が著しいものも見られ、崩落等の危険性も高くなっており、記録・確認作業は急務であろう。

(参考文献)

- 比嘉徳「中頭群誌」中頭県教育委員会 1913年（1973年明治文庫より複製）
- 青野源三郎 尾崎正平「日本誌第21巻」二宮書店 1975年
- 沖繩県教育委員会「沖繩県洞穴実態調査報告」沖繩県教育委員会 1979年
- 海邦出版社「沖繩県 地図と地理」那覇海邦出版 1981年
- 木崎甲子郎「琉球島の地質誌」沖繩タイムス社 1985年
- 河名俊男「琉球列島の地形」新泉図書出版 1988年
- 浦添市史編纂委員会「浦添市史 第1巻 通史編 浦添のあゆみ」浦添市教育委員会 1989年
- 沖繩県町村議会議員会「行政財政資料」沖繩県町村議会議員会 2001年

第2節 歴史的環境

琉球諸島は、数万年前から人類が居住していた地域であることが、現在の考古学や形質人類学など様々な学問分野によって証明されてきている。琉球諸島（奄美諸島を含む）の歴史は、「先史時代」「古琉球」「近世琉球」「近代沖繩」「戦後沖繩」に区別されている。沖繩県は、北海道と共に段階的に日本社会に編成された歴史的性格を帯びる地域である。この節では、沖繩県の歴史的特徴について可能な限り中部地区に引きつながら、各区分の内容を述べることとする。

古琉球以前の琉球

「先史時代」は、狩猟採集の原始的生活形態から、東アジア交易体制に組み込まれる。数万年前から12世紀前後までを指す。沖繩市読原洞窟遺跡（約16000年前）や与那城町戴地洞穴遺跡（約6700年前）、読谷村波平洞穴遺跡（シムカガとも呼ばれる）など、中部地区にもこの時代の遺跡が多く見られる。また、このような自然洞穴は、前述のように沖繩戦時に住民避難所として利用されている。

この時代に長い時間をかけ、奄美地域・沖繩地域・先島地域の3文化圏に編成され、最終的にこれを統一する琉球文化圏が形成される。そして、琉球諸島が政治的にも統一される古琉球へと移る。

古琉球

「古琉球」は、12世紀前後から1609年の島津進入までのおよそ500年にわたるといわれる。

農業を中心とした生産力・経済力の高まりによる社会的発達から「グスク」が出現し、武力抗争を繰り返して地域間の政治的統合が進み、14世紀頃に三山が崩落する（三山の領域は明確ではない）。それぞれ1370～80年代に初めて明に入貢して以来、盛んに入貢し、その繁栄を競ったことはよく知られている。この時代に主要なグスクの一つが浦添城跡である。他には陸奥味城跡、勝運城跡、中城城跡など、世界遺産に登録されたものもある。これらのグスクは、琉球王国統一過程における、それぞれの地域の有力後援の居城でもあり、文字でほとんど表現されない「琉球」を示す貴重な遺跡といえるだろう。三山時代を経て、1429年に尚巴志がこれを統一（異なる見解もある）、歴史上本邦に初めての統一政権が登場する。

さらに15世紀初期から16世紀の中頃にかけては「大交易時代」と呼ばれ、中国を中心に東南アジア、朝鮮、日本などの諸国と交易を行った（進貢貿易と呼ばれる）。交易を通して、王国の経済繁栄は確立し、様々な海外文化を摂取して文化創造に生かされた。また、琉球王国を環中国海の国際社会（「冊封体制」）を中心とした国際秩序）に認知させた。遠くポルトガルの記録にも、琉球人が「レキオ」として登場するのは周知の通りである。

この「大交易時代」の終焉とともに琉球王国内を含めた琉球周縁の国際状況も悪化の一途をたどることになる。明の弱体化・豊後秀吉の朝鮮出兵、ポルトガルの東南アジアへの進出、島津の琉球への領土的野心など、これらの結果として、島津侵入を受けることになる。

近世琉球

「近世琉球」は、1609年の島津侵入（このときに奄美諸島は島津に割譲され、現在は鹿児島県域となっている）から1879年の琉球処分までの270年間に亘り、日本における近世期にはほぼ相当する。この時代の琉球王国は、「幕藩体制下の異国」として存在した。その国家は存続しながらも、日本の近世社会の一翼を担うものに変容し続ける過程の時代であるといえる。現在「琉球文化」と呼ばれるものはこの時期に形成されたものが多く、前切や古舞など、現在の市町村や現在に近い区画を形成したものに時期である。

また、弱体化の勢から幕藩に連なる首里王府の近世的政治路線への変換が図られる。それは、社会的總生産の増進を目指すとともに、古琉球時代に形成された諸神祖を、近世に適合する「合理的」なものに再編成・確立する作業であった。つまり、古琉球の否定、近世琉球確立を目指す首里王府の模索であり、それ

に対する琉球社会との相克であったといつてよい。さらには、「江戸上り」や進貢(冊封)貿易に象徴される対外関係の再構築・強化も目指された。

また、通商貿易の衰退により、王国需要の大半を国内生産に求めなくてはならなくなり、殊更に王国内の産業振興に力を入れた点が挙げられる。その代表がサトウキビや陶業(壺屋焼)、漆園などである。さらに薩摩の影響下で、日本本土へサトウキビを中心に販売し、逆に日本本土からは、本綿糸・綿・米・茶・タバコなどが流通する。日本国内市場の両端として機能し始めることになる。

文化面に限ると言えば、琉球をモチーフとしつつも、近世論理との相克のなかで、現在の「琉球文化」と呼ばれるものを体系付けた時代であるといえるだろう。その衰退も指摘されているが、それとともに記録・分析・保存の努力も為し続けられていることも忘れてはならない。

中部地区には、国頭・中頭方西街道及び東海道の整備された。浦添・宜野湾・北谷・読谷の西海岸の各開切番所と西原・中城・具志川・勝連・与那城・越来・美里の東海岸各開切番所を首里を起点に結びつけ、琉球王国の開切支配の体現した物の一つであった。戦前までは、その景観と共に、かなり残存していたが、沖縄戦による破壊や急速な開発により、大部分は姿を消している。

近代沖縄

「近代沖縄」は、1879年の琉球処分により、約450年に及んだ琉球王府の滅亡と共に始まる。このことは、同族でありながらも「異国」であった琉球が、完全に「日本国」へ統一されることと同時に、明治日本の初期において国力を背景とした領土の最終確定であったことを意味する。

明治政府は、清との国境問題や沖縄県内の不穏な状況のため、琉球処分から、首里城に駐屯した熊毛元鎮台の鎮台の武力を背景に政策を進めたが、日清戦争後、軍事的地位の低下や「頭取」の沈滞化により、1896年に撤退した。県内には、主に徴兵の取組、検査事務を行う連隊司令部のみが置かれた。1931年「県民国防思想ノ養成」(県民経済上ノ便益ノ為)に日本軍の分遣隊・憲兵隊講義の「意見書」を沖縄県議会が採択したが、実現せず、経済も改善されなかった。

1879年以来、明治政府は「旧慣温存政策」として、近世期の土地制度・租税制度・統治機構などをそのまま踏襲して統治した。さらに、旧王府の支配階級への家禄を保証した。このような地方政策が、全て日本本土と同一になるのは1921年である。この背景には、沖縄社会の混乱を避けるために、沖縄と沖縄への民度(文化程度)が底のものとする差別意識があった。この意識が、県民の劣等感の意識(近代化)から来る県内部の同化論に結びついた。このため、沖縄の風習・言語を日本風に改めるという風俗改良の流れは、近代期において一貫して継続された。なかでも、戦時体制下での改姓改名運動や標準語勸行運動はこの流れを強化し、新聞が「方言の殲滅」を報じた程、徹底されたものであった。

また、大量の輸送手段の必要性から軽便鉄道の敷設が行われた。中部地域では、1922~42年にかけて嘉手納線が運行された。与那原線中の古波蔵駅で分岐し、牧港・大山・北谷・嘉手納などの15駅で構成され、那覇一頭尾を結ぶ交通路の一部として重要な位置を占めた。さらに1916年与那原・小那覇・泡瀬間に軌道馬車が敷設された。これらの交通機関は、新しい文化を提供すると共に、糖業の発展と強く結びついた。1888年サトウキビの作付制限が撤廃されると、沖縄県内全域での生産が盛んになり、大正・昭和の戦前期を通じ、他県への移住額の7割程度を占める基幹産業へと成長した。けれども、1920~21年の砂糖価格の大暴落で、県経済は壊滅的な打撃を受ける。これから慢性的に続く不況は「ソテツ地獄」と呼ばれた。このような窮状を脱するため、海外移民は急増した。本県は国内でも有数の「移民県」と言われ、近代における日本人の海外移民の約1割を占める。

(参考文献)

- 沖縄県教育委員会「沖縄県史 第1巻 通史」沖縄県教育委員会 1976年
- 宜野湾市教育委員会社会教育課「宜野湾市の道跡」宜野湾市教育委員会社会教育課 1982年
- 沖縄県教育委員会文化課「沖縄県歴史の道調査報告書一 国頭・中頭方西街道(Ⅰ) 弁ヶ岳参道一」沖縄県教育委員会 1985年
- 沖縄県教育委員会文化課「沖縄県歴史の道調査報告書一 国頭・中頭方西街道(Ⅱ) 一」沖縄県教育委員会 1986年

- 高良倉吉「琉球王国の構造」吉川弘文館 1987年
- 沖縄県教育委員会文化課「沖縄県歴史の道調査報告書(V) 一 中頭方東海道一」沖縄県教育委員会 1988年
- 与那城村教育委員会「与那城村の道跡一詳細分布調査報告書一」与那城村教育委員会 1988年
- 北谷町教育委員会「北谷町の道跡一詳細分布調査報告書一」北谷町教育委員会 1994年
- 財団法人沖縄県文化振興会公文書管理室史料編纂室「戦後 沖縄の歴史と文化」沖縄県教育委員会 2000年
- 沖縄県立歴史文化財センター「沖縄県戦争道跡詳細分布調査(Ⅰ) 一南那覇編一」沖縄県立歴史文化財センター 2001年

第3節. 沖縄戦前後の市町村編成

中部地区においては、嘉手納空軍基地・嘉手納弾薬庫地区を筆頭に多くの米軍基地・施設が存在し、全体の約25%が米軍基地により占められている。また、嘉手納町のみに限れば、町域の82.9%を米軍基地が占めているという状況である。アメリカは、沖縄戦の最中から戦後の東アジア戦略構想に基づき、多くの基地を建設していった。これらの基地は、地域住民に知られることなく接収された土地に建設されたものが多く、各市町村の重要な位置を現在に至るまで専有している。このために、住民が戦前の集落からの移動を余儀なくされたり、字や市町村が再編を迫られた例が多数ある。本節では、中部地区における戦前期の市町村・字編成から、このような影響による変遷を、現行川市・現嘉手納町・現北中城村の分立と中部地区の一部の字の状況から概観したい。

戦前、中部地区の市町村は、読谷山村、美里村、具志川村、勝連村、与那城村、越来村、北谷村、宜野湾村、中城村、浦添村、西原村の11カ村からなり、行政上の字はおよそ159カ字であった。これらの村・字は、近世後期における開切・村が基本的に踏襲されたものであった。中部地区は、近世末期より近代を遡って、その行政区がほとんど変化してない。このことは他の地域と比較すると、極めて特徴的である(現在は5市3町3村、行政字はおよそ210)。

第2次世界大戦中、米軍は沖縄本島以前から軍政の樹立を企図していた。上陸後、1945年4月5日には読谷村字比呂に海軍軍政府を置き、住民の収容・保護に務めた。8月23日頃には沖縄県庁を設け、9月20日には12市(住民収容地区である、石川、辺土呂、山井等、漢那、宜野座、古知屋、久志、瀬高、前原、胡老、知念、平安南)の市長の選挙を行った。居住地の開放は、10月知念地区と中城村安仁集落の開放を皮切りに開始された。その後も徐々に進められ、1946年4月頃までにはほぼ現在居住地となっている地域は開放された。それと共に、12市による自治体組織は実状にそぐわなくなり、戦前の各市町村が由来に近い形で戻った。しかし、1945年7月、美里村から6カ字が分立してできた川市は、以後も美里村と合併することはなかった。そのため、美里村は現在でも、石川市とコサ市と合併してできた沖縄市とに分かれている。また、旧居住地区が米軍施設として接収され、居住を認められない字も多く、住民は、他地域へ居住地を移動せざるをえなかった。このような字は、中部地区の全域にわたって見られ、現在に至るまで土地が返還されていない例もある。

収容所への人口の集中に伴い分離独立した石川市とは異なり、婦孺先での米軍施設の存在により、分離独立した市町村もある。

戦前、中城村は南北に細長い地域を形成していた。しかし、村民が収容所から帰郷してくると、中城村を南北へ分断するように字久島周辺が米軍施設として接収されていた。そのため、村の南北での統一行政が困難になったという理由から、字久島、字堂又以南を中城村、それ以北を北中城村という形で1946年5月20日、分村を行った。

戦前、北谷村の字嘉手納は、軽便鉄道の終点に当たり、沖縄製糖工場などがあり、中頭郡における一大中心地として繁栄し、それ以外の地域は純



第三章 沖縄戦の概要

第1節. 本島中部における軍配備と住民の様子

沖縄本島には、第32軍創設以前から陸軍の要塞が建設されていた。1941年10月に完成した中城湾要塞である。中城湾要塞重砲兵連隊は、日本本土と南方を往來する艦船の停泊地を、守備することを主任務とした。これ以外に、奄美、西表島の船停泊にも要塞が建設され砲兵部隊が配置された。ただし、これらの部隊は沖縄全域の防備問題とは別の存在であった。

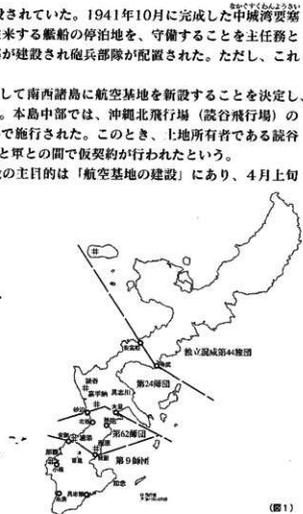
1942年末ころから、陸軍は航空部隊の補給中継地として西の諸島に航空基地を新設することを決定し、1943年6月には、陸軍航空本部が用地の接収を始めた。本島中部では、沖縄北飛行場（読谷飛行場）の建設が決定され、民間の土建業者が軍と請負契約を結んで施行された。このとき、土地所有者である読谷村民に対しては土地代について何ら説明もなく、村長と軍との間で仮契約が行われたという。

1944年3月22日、第32軍が創設された。当初、創設の主旨は「航空基地の建設」にあり、4月上旬から6月上旬にかけて多数の航空地区部隊が沖縄へ送り込まれた。しかし配置された部隊は元來、飛行部隊に対する補給や休養、飛行場の整備などにあたることが主任務であったため機材が乏しく、地域住民の協力なしに建設を進めることは不可能であった。本島中部において日本軍は、沖縄北飛行場のほかに、沖縄中（嘉手納）飛行場、沖縄南（仲西）飛行場、沖縄東（西原）飛行場の建設を行い、各飛行場において平均3000名の住民を雇用しようとしていたが、実際には、沖縄北飛行場において動員数が1日7000人に達することもあり、住民は滑走路の砂利を運ぶなどの作業に動員された。また、飛行場建設に必要な道具や、荷馬車の供出にも協力を要請され、農民はむかに戦時体制へ組み込まれていた。

5月から7月にかけて、第32軍の部隊増強が図られ、本島中部には独立混成第44旅団（緑部隊）と第9師團（武部隊）の一部が配置された。8月に入ると、(図1)のように独立混成第44旅団は安富村と金武を結ぶ線以北に移動し、新たに、第24師團（山部隊）が読谷・嘉手納・具志川を中心に配置された。8月中旬、第62師團（石部隊）が沖縄入りし、北は砂辺と大里を結ぶ線、南は安富と我謝を結ぶ線までの地域に配置され、浦添を中心に陣地構築に取りかかった。

多数の兵士が急遽沖縄に配備されたことにより、軍の施設は不足した。学校や村屋・事務所（現在の公民館）などが兵舎などに利用され、それらの施設に入りきれなくなると、部落の大きな家が徴発され、軍隊と住民が混在するようになっていった。また、軍への食糧などの供出も、住民に義務づけられた。

10月10日、西の諸島は米軍機によって空襲された（十・十空襲）。攻撃は5次にわたり行われた。本島中部に最も多く米軍機が飛来したのは第1次攻撃（120機）と第2次攻撃（110機）時であった。第1次攻撃は主として飛行場が攻撃され、機体内の飛行機を銃撃し滑走路を破壊した。沖縄北飛行場が空襲された



(図1)



(図2)

のは午前6時50分、中飛行場はそのすぐ後だった。兵舎は炎上し、滑走路には無数の弾殻が残された。第2次攻撃では、飛行場に加えて港湾施設が攻撃を受けた。集落への爆撃は、那覇市と比較すると大規模なものでなかったが、嘉手納警察署管内において、死傷者33名、全半壊家屋142棟を数えた。

12月になると、第9師團が台湾の防備強化のため移駐した。この移駐に伴って、島内の部隊配備が変更された。本島中部に配置されていた第24師団は、本島南部の西側に移動し、第62師団は北側の配備境界線を北谷・熱田のラインまで下げ、そのより南の那覇・首里・知念半島に及び一帯を守備範囲とした。第24師團が移動した後、本島中部には北部に配置されていた独立混成第44旅団が移駐してきた。

1945年2月には再び配備変更が行われ、(図2)のように第62師団は浦添、宜野湾、那覇周辺へと移動し、かつて独立混成第44旅団が知念半島へ移駐した。北・中西飛行場は、年明けから断続的に行われた空襲によって使用不能となり、3月30日、南飛行場とともに破壊命令が出され、事実上放棄する形となった。

第2節. 米軍の本島上陸と首里までの戦闘

1945年4月1日午前8時過ぎ、本島中部西海岸に約1500隻の米艦船が集結した。日本軍は、大がかりな空襲作戦を展開せず、18万人を超える米兵がほぼ「無血」に近い状態で読谷・北谷海岸に上陸した。米軍はその日のうちに北・中西飛行場を制圧すると、3日には東海岸に達し、沖縄本島を南北に分断した。日本軍は、4月3日夜幕僚会議を開き、7日夜をもって持久作戦から攻勢へ作戦方針を転換することを決定した。しかし、米軍の兵力増強に接し作戦は延期されることになった。

米軍上陸地周辺における日本軍の配備状況は、北・中西飛行場の整備にあたっては部隊を中心とする特設第1連隊と第62師團独立歩兵第12大隊（賀谷支隊）、海軍第11砲台だった。特設第1連隊は久得に連隊本部を設け、制空陣地などを利用しながら戦線の維持をはかろうとしたが、米軍の圧倒的な物量の前に退却を余儀なくされ、石川岳を目指して北上することになった。その後は山頭支隊長の指揮下に入り遊撃戦を展開することになる。一方、賀谷支隊は、桃原、山内、島袋近辺で米軍と戦闘状態に入ったが、こちらも敗退を重ね、北上原の161.8高地を経て4月5日までは西原村に幸地へ退避してきた。歩兵第63旅団長は、賀谷支隊の戦闘を支援するため砲兵連隊の射撃開始を司令部に要請したが、司令部は陣地が米軍に見つかることを恐れ、それを容易に許可しなかった。また、許可された後も、使用できる弾薬が制限されたので、十分な射撃はできなかった。

海上では、4月5日から米軍が中城湾へ侵入し、勝連半島や知念岬を砲撃した。6日には津屋崎へ一時的な上陸作戦が展開された。同日、軍司令部は延期していた総攻撃を8日に実施することを決め、本島南部の小嶽・具志川に配置していた第24師團歩兵第22連隊と89連隊に、中部戦線への移動準備を命じた。しかしこのときも、米軍の激しい艦砲撃によって攻撃中止を余儀なくされた。

4月8日、米軍は西海岸の宇地泊から東海岸の津原を東西に結ぶ線にまで南下させた。そして、嘉数・西原・我如古・南上原・和宇慶を結ぶ一帯に配備されていた第62師團と、激しい戦闘状態に入る。9日以降、日本軍は周辺に配置していた部隊を嘉数陣地に集結させ、戦力の増強をはかった。司令部は、那覇付近に駐屯していた第62師團独立歩兵第23大隊を嘉数周辺に移動させ、19日には嘉数を守備する主力部隊であった独立歩兵第13大隊が前山付近に後退した。一方の米軍は、嘉数高地に対し圧倒的な物量と火力による攻撃に加え、夜明け前の奇襲なども行った。こうした米軍の攻撃を前に、日本軍は夜間の斬り込みや、爆雷を抱えて戦車へ体当たりするなどの肉弾攻撃で対抗した。

4月19日早朝、米軍は嘉数を中心とした中部戦線全体に猛砲撃を加えた。日本軍は、嘉数で22両の米軍戦車を破壊するなどの戦果をあげたが、被害も大きかった。米軍は、城面・伊祖の西海岸側へ侵襲し、嘉数高地南西側に回り込んだため、日本軍は背後から攻撃を受ける形となった。

司令部は22日、本島南部に配備していた第24師團と独立混成第44旅団の首里戦線への投入を決定するとともに、23日、前線部隊の整理を命じた。この夜、独立歩兵第23大隊をはじめとする第62師團の各部隊が、一部を残して安波茶・仲岡・前田地区に後退したことにより、米軍は、嘉数高地・西原・福原付近に進出してきた。

本島南部から移動した部隊は、首里を中心に東方（運玉嶽、小波津、森長、幸地）に第24師團、西方

あおく (天久、那覇海岸線)に独立混成第44旅団が、それぞれ配備についた。

第2師団は、首里北方において南下する米軍と対峙したが、嘉数付近の間に戦力の約半数を失っており苦戦を強いられた。しかし前田高地における戦闘では、嘉数高地の戦いと同様に南側に回り込んだ米軍に背後から攻撃を受けながらも、米軍の集中砲火を受けた間は壕内に待機し、米兵が頂上に現れると壕から出て反撃するという戦法がとられ、容易に戦線は突破されなかった。

26日、米軍は城間の陣地の一部を占領し、南(仲西)飛行場へも侵攻しはじめた。また、小波津地区にも戦車を伴う攻撃を仕掛けていた。前田高地を残して、東西の戦線は確実に南下していた。

4月29日、軍司令部は停戦会議を開いた。米軍上陸は1ヵ月、陸空軍において特攻作戦を展開していた日本軍であったが、米軍の侵攻を止めることが出来ず、戦線は徐々に首里へ近づいていた。会議では、参謀間に意見の対立はあったが、5月4日に総攻撃を実施することを決定した。これに伴い、第2師団が前田・仲間高地を保持、第24師団が普天間東西の線に進出、独立混成第15連隊が知念地区から首里西方(天久、真嘉比、松川)へ移動し、第24師団と連携して大山方面へ突進する、などの攻撃計画が立てられた。また、小波津に配置されていた海軍部隊も、この総攻撃に参加させることを決定した。

5月4日午前、総攻撃において、第24師団が北方への突進に成功したとの連絡が入ったが、午後になって各隊の攻撃が進まず防線一方となった。戦闘が行われた安波茶、前田、幸地、翁長、小波津一带は、狭小な土地の中に高気圧の激しい地形が続いており、日本軍の部隊が低地にあるときは台の上の米軍から見下される形になり、昼間は部隊間の連絡が全く取れない状態に陥った。命令系統は遮断され、最終的に全員が斬り込み隊となって全滅するなど、総攻撃は失敗に終わった。5日夜、軍司令部は総攻撃中を各方面に知らせたが、すでに兵力は約半分にまで減少していた。6日、前田高地は完全に米軍に制圧された。

5月6日、軍司令部は持久作戦の方針転換し、現時点で保持している運玉森・桃原・幸地方面の高地・前田南方部落・経塚・沢城北方高地・内間北側・安瀬川河口を第一線とし、部隊の再配備を行った。首里を中心に、北東から東側に第24師団、北西側に第2師団、首里西方に独立混成第44旅団がそれぞれ配備された。

米軍は徐々に南下し、10日未明、まず西側の米軍部隊が那覇市内へ侵入し、11日には天久台(シュガローフ)の戦闘が始まった。同じころ、沢城高地においても激戦が繰り返され、14日には沢城南側の大名高地まで米軍が進軍してきた。運玉森方面へも活発な攻撃行動が開始され、米軍はいよいよ首里に迫ってきたのである。

第3節. 戦場の住民たち

中部地域は、米軍が沖縄本島に上陸した最初の地域であると同時に、首里の司令部をめぐって南下する米軍と日本軍とが激しい接近戦を繰り返して、文字通り激戦地となった場所でもある。非戦闘員(一般住民)に対し、県は1944年7月以降、本土、台湾、山原への疎開業務をすすめていたが、目標とする人数には達せず、長期間多数の住民が地上に巻き込まれることになった。米軍が本島に上陸した時点で、沖縄本島には50万から60万人の住民がいたとみられている。

戦場における住民の生死を具体的に推察する資料として、糸満市摩文仁平和祈念公園の「平和の礎」刻銘者データがある。市町村ごとの死亡者数は、純粹に「沖縄戦による犠牲者」を算出したものではない。刻銘者、その点は勘案する必要があるが、ひとつの目安として重要であろう。本島中部の住民の死亡率を「平和の礎」刻銘数から算出すると、地域によってその差が歴然としていることに気づく。

4月1日、本島における米軍上陸の最初の地点である読谷・嘉手納・北谷や、上陸後4日間で占領された具志川・石川の死亡率はそれぞれ20%台である。この地域で保護された住民は、米軍の本島上陸日、もしくは上陸後数日間のうちに「経塚の日」を迎える。海上を埋め尽くす米艦船を見て「沖縄で最初に殺されるのは私たちだ」と感じた住民は少なくなっていたであろう。実際、上陸前の米軍による熾烈な砲撃の犠牲になった若や、迫りくる米軍を前に集団死を遂げた住民もいた。避難民を取り巻く社会体制や、偏った情報が錯綜することなどによって、死を選ばざるを得ない状態に追い詰められていったのである。

しかし4人に3人は米軍に保護され、他地域で戦闘が行われているなか、すでに収容所において戦後生活をスタートさせていたのである。米軍が上陸から嘉数高地の戦闘に入るまでに保護された住民は、43,378人を数える。

同じ中部地域でも首里に近い、中城村・北中城村・宜野湾市・浦添市では死亡率が40%を越え、西原町は63%に達している。これらの地域には、日本軍陣地が集中して構築されており、多数の兵が駐屯していた。住民は「兵隊がいるから安心」という思いから、米軍上陸後、数日の時間が経過しても集落にとどまる者が多かった。その後、米軍が南下してくると、軍からの命令が出たとしても、住民は避難を開始する。北部への避難経路を絶たれた住民は、南部方面へ避難するしかなかった。しかし、住民が南への移動を始めたころ、本島中部から首里周辺にかけての地域では組織的な戦闘作戦を実施しようとした時期でもあり、米軍の攻撃が集中したこの地域では多くの住民が犠牲になった。同時にこの頃は、日本兵が陣地壕に潜んでおり、殺気立った日本兵から避難民はスパイ視されることもあった。また、やっと思いついた避難場所から追い出された住民もいた。

第32軍が首里の司令部を放棄し摩文仁へ移ると、住民は兵隊と同様に、さらに南へと避難した。南部の地理に不案内な中部の住民は、安全な場所を求めて砲撃の飛び交う戦場をさまよふことになり、軍民混在と化した6月以降の南部掃討戦で、多くの一般住民が死亡することになる。中城村・北中城村・宜野湾市・浦添市・西原町を中心とする地域の住民は、日本軍とともに行動するのが安全と考え、友軍の行く方向へも移動し、結果的に南部までの長距離の移動を余儀なくされた。その結果、戦場付近の間隔が長くなるざるを得ない状況に追い込まれ、多くの住民が犠牲になったのではないかと考えられる。

	2001年6月23日現在 「平和の礎」刻銘者数	1940年10月1日現在 国勢調査人口	犠牲者率(%)
石川市	1,320	23,861	28.10
沖縄県	5,387		
具志川市	3,248	16,228	20.01
与那城町	1,773	10,737	16.51
読谷町	1,043	7,663	13.61
読谷村	3,832	15,883	24.12
嘉手納町	1,433		
北谷町	2,295	15,131	24.63
北中城村	2,080		
中城村	5,179	16,731	43.38
宜野湾市	5,415	12,825	42.22
西原町	6,266	9,852	63.60
浦添市	5,752	11,084	51.89
全体	45,023	139,995	32.16

注1: 犠牲者数「平和の礎」刻銘者数×人口×100
注2: 石川市は美里村から分県。美里村はこぼれ計算と合算し、沖縄県となった。
注3: 本島中部の刻銘者数と犠牲者数を合わせて算出した。
注4: 嘉手納町は読谷町から、北中城村は中城村から、戦後それぞれ分離。

(参考文献)

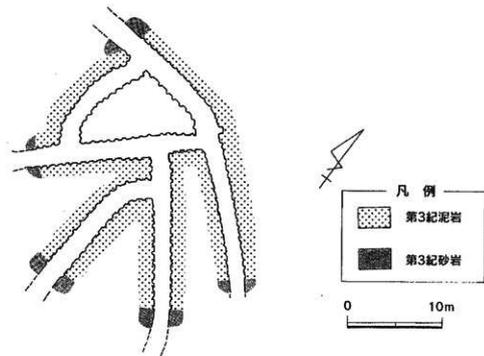
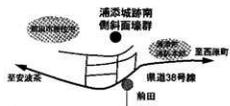
- 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年
- 琉球政府『沖縄県史 第9巻 各論編8 沖縄戦記録1』琉球政府 1971年
- 沖縄県教育委員会『沖縄県史 第10巻 各論編9 沖縄戦記録2』沖縄県教育委員会 1974年
- 宜野湾市史編纂委員会『宜野湾市史 第三巻 資料編2 市民の戦時体験記録』宜野湾市 1982年
- 浦添市史編纂委員会『浦添市史 第五巻 資料編4 戦争体験記録』浦添市教育委員会 1984年
- 北谷町史編纂事務局『北谷町民の戦時体験記録集(第一集)』北谷町役場 1985年
- 上原正徳訳『沖縄戦アメリカ軍戦時記録』三一書房 1986年
- 沖縄県史編纂委員会『西原町史 第三巻 資料編2 西原の戦時記録』西原町役場 1987年
- 中城村史編纂委員会『中城村史 第四巻 中城村役場 1990年
- 北谷町史編纂委員会『北谷町史 第五巻 資料編4 北谷の戦時体験記録(上)』(下)北谷町役場 1992年
- 楚辺誌編纂委員会『楚辺誌 楚辺公民館 1992年
- 北谷町役場企画課町史編纂室『戦時体験記録(北谷町)』北谷町役場 1995年
- 法政大学沖縄文化研究所小湾字誌調査委員会『小湾字誌』北谷市小湾字誌編纂委員会 1995年
- 沖縄県企画ネットワーク『新少く・ある・考える沖縄』沖縄時勢出版社 1997年
- 沖縄県企画部平和文化振興課『沖縄県史 資料編6 美里からの戦き世証言』沖縄県役所 1998年
- 喜名公民館委員会『沖縄県中頭郡読谷村資料集 喜名誌』喜名公民館 1998年
- 沖縄県文化振興会文化情報部史料編纂室『沖縄戦研究』沖縄県教育委員会 1999年
- 嘉手納町史編纂事務局『嘉手納町史 資料編5 戦時資料(上)』嘉手納町教育委員会 2000年

第IV章 各市町村における戦争遺跡

第 1 節. 浦添市

a. うらそえじょうせきみなみがわしや めんごうぐん浦添城跡南側斜面壕群

所在地：浦添市字前田1943-6
 立地（標高）：山腹（約110m）
 形態：人工壕
 種別：陣地
 現状：出入り口付近は土砂が堆積しているが、内部は比較的良好
 保存状況：山腹中に放置されている
 築造者：第62師団独立混成第63旅団
 築造年月日：1944年8月19日以降
 戦時中の使用状況：中部戦線の防衛陣地の1つ
 主な遺構：陣地壕、棚状掘りこみ、坑木跡等



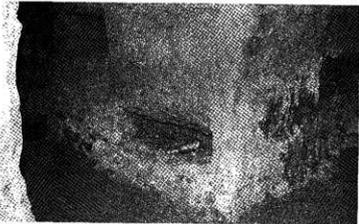
概要

浦添城跡南側斜面壕群は、前田市菅住宅東側の浦添城跡南側斜面山腹に所在する。浦添城跡南側斜面には多数の陣地壕が構築されていたと思われるが、現在確認できているのは3カ所のみである。

各壕は、カンバン壕、兵員壕、糧食壕と呼ばれている。兵員壕と糧食壕は比較的隣接しており、これらの壕から西側へ進んだところにカンバン壕がある。カンバン壕は、浸水が激しくあまり奥まで入ることができない。他の壕はカンバン壕より比較的規模が大きく残りが良く、坑木跡、棚なども残っている。

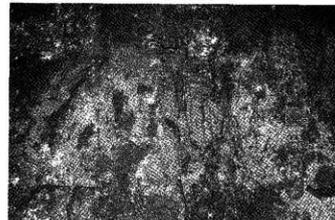
当壕群周辺には、第62師団の独立混成第63旅団が配置されていた。当壕群周辺が最前線となるのは、4月20日前後である。23日夜、第24師団が中部の戦線に参加するために配置替えとなった。これに伴い、第62師団も部隊の再配備を行い、当壕群へは独立歩兵第11大隊と独立歩兵第12大隊が配備された。

4月26日、米軍が城跡の東側から城跡南側へ回り込みはじめた。同日、歩兵第32連隊の1個大隊が当城跡の陣地へ配備された。これにより、当地での指揮権が第62師団と第24師団の2つ存在することとなった。また、28日には歩兵第89連隊第2大隊が歩兵第32連隊に編入され、戦闘に加わった。4月30日、第32軍は、米軍に対する攻勢に出ようと全軍を命令を出すか成功せず、5月5日、当地の部隊は逆に壕内に閉じ込められることとなる。翌日、浦添城跡は完全に米軍に占領された。5月6日、第32軍司令部は運玉森—統原—幸地南方500m高地—前田南方1000m部落（勝山）—経塚—沢砥北方50m高地—内関北関—安謝川河口を第



第1図 カンバン壕平面遺構略図

一線として各部隊を再編成して配置した。



参考文献

- 防衛庁防衛研究所図書館蔵「第六十二師団歴史」歩兵第六十三旅団司令部 1943～1945年
- 防衛庁防衛研究所図書館蔵「第六十二師団史実資料」第三十二軍残務整理部 1947年
- 防衛庁防衛研修所戦史室「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 沖縄山3457部隊戦友会「沖縄戦記 われらどさんこ兵士 かく闘えり」沖縄山3457部隊戦友会 1986年

b. 前田高地塚群

所在地：浦添市字仲間2-417、2-418

立地（標高）：山腹（約120m）

形態：人工塚

種別：陣地

現状：碎石により、塚口付近が崩り取られている。塚内は落盤が激しい

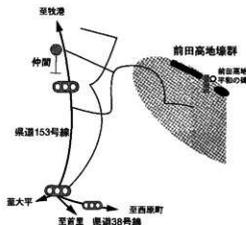
保存状況：山腹中に放置されている

築造者：第62師団独立混成第63旅団

築造年月日：1944年8月19日以降

戦時中の使用状況：中部戦線の防衛ラインの一角

主な遺構：陣地塚



概要

前田高地塚群は、浦添城跡北側の浦添城跡下壘岡墓地と隣接する断崖中に所在する。現在塚は、3ヵ所残っているが、内部は落盤や土砂の堆積などが激しい。また、塚の入り口付近は、碎石により崩り取られているようである。

第32軍は、丘などを利用し、敵正面側とその反対側に複数の塚口を設け、内部で互いの塚口を繋ぐ形で陣地構築を行っていた。また、塚内も複数の坑道を走らせ、塚口が1つ破壊されても問題がないように、塚口も複数設けていた。また、内部は迷路のように坑道を走らせていた。塚の1つは、浦添城跡の南側斜面に所在した塚となっていたことが兵隊の手記により確認できる。このことから、当塚群は、第32軍の陣地構築の典型的な方法を確認できるものであるといえる。

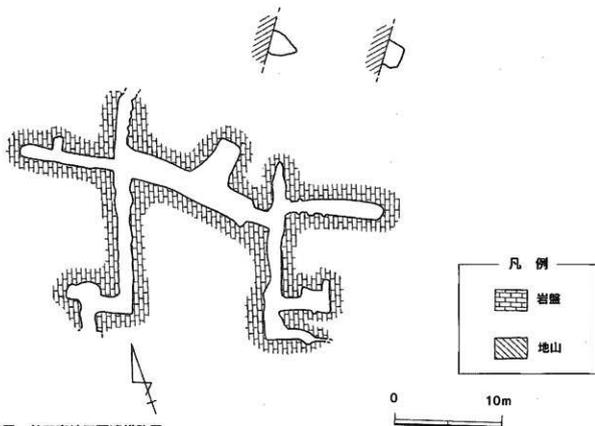
当塚群周辺には、第62師団の独立混成第63旅団が配置されていた。当塚群周辺が最前線となるのは、4月20日前後である。4月22日、第32軍司令部は、本島南部に配置されていた第24師団の北上を決定する。それに伴い、第62師団の部隊配備が再編成され、23日夜に嘉数、西原、龍原、157高地の部隊が前田、仲間に終結し部隊の再配備が行われた。これにより、浦添城跡周辺へは独立歩兵第11大隊と独立歩兵第12大隊が配備された。しかし、独立歩兵第11大隊の戦力は2分の1となっており、独立歩兵第12大隊も800名の損害を受けた状況であった。4月26日、米軍が浦添城跡の東側から城跡の南側へ回りこんできた。同日、浦添城跡の陣地へ第24師団から歩兵第32連隊が配置されてきた。これにより、浦添城跡周辺



塚の残る丘



坑木跡の残る塚内



第2図 前田高地平面遺構略図

の戦図において、第62師団と第24師団の2つの指揮権のもとで戦図が行われることとなる。

4月27日、日本軍は浦添城跡の頂上及び南側は確保できていたようだが、北側斜面は米軍に制圧されたと思われる。



塚内の落盤跡

(参考文献)

防衛庁防衛研究所図書館蔵『第六十二師団歴史』歩兵第六十三旅団司令部 1943～1945年

防衛庁防衛研究所図書館蔵『第六十二師団史実資料』第三十二軍残務整理部 1947年

防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年

沖縄山3457部隊戦友会『沖縄戦記 われらごんご兵士かく圓えり』沖縄山3457部隊戦友会 1986年

第2節. 宜野湾市

か かずたか だい じんち ごう

a. 嘉数高台のトーチカ・陣地壕

所在地：宜野湾市字嘉数1-5（嘉数高台公園内）

立地（標高）：山腹（約90m）

形態：構築物人工壕

種別：トーチカ陣地

現状：トーチカ・弾痕跡がある。平和学習に利用されている。陣地壕・不明

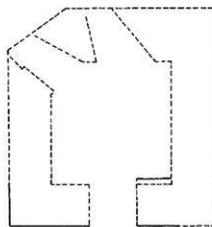
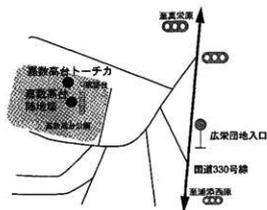
保存状況：トーチカ・標識が設置されている陣地壕・入り口が封鎖されている

築造者：第62師団独立歩兵第13大隊

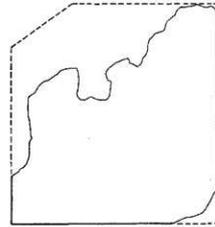
築造年月日：1944年8月～1945年3月

戦時中の使用状況：嘉数高地をめぐる戦闘で使用された

主な遺構：トーチカ・陣地壕各1基



内部平面



天井部積線



第3図 トーチカ平面遺構略図

概要

宜野湾市の普天間飛行場と嘉数部落の間に標高90mの嘉数高台がある。ここは、米軍と日本軍が高地占領をかけて激戦を繰り広げた場所である。現在は嘉数高台公園として整備され、嘉数の塔、京都の塔、青丘の塔などの慰霊塔が建つ。展望台からは普天間基地を一望することができ、多くの人々がこの地を訪れて平和学習を行っている。この公園の一角に、沖縄戦時で使用されたトーチカと陣地壕がある。また、高台に登るスロープの途中には、近隣の民家にあった弾痕の残る壁がされている。



トーチカ正面

トーチカは、嘉数高地の北側斜面にある。内部の床面積は約4㎡、高さ約130cm、北方を向いて銃眼が2つ開いている。トーチカを形成しているコンクリートは厚さ約75cmを測る。爆撃のすさまじさを思わせる弾痕が残り、鉄筋がむき出しになっている部分もある。

陣地壕は、嘉数高地の南側斜面に存在する。展望台へ向かう階段の中腹にある踊り場から、左側の土手を15mほど進むとその入り口がある。壕入り口はコンクリート製の柵で封鎖されており、壕内へ入ることはできないが、内部を覗くと、壕は緩やかな下り坂になっている様子である。



トーチカ内部

嘉数高台をめぐる日米の攻防戦は1945年4月9日から始まった。この地で戦闘配備については独立歩兵第13大隊と第23大隊を中心とする部隊であった。15日間、一進一

退の激戦が行われ、日本軍が米軍戦車30両のうち22両を破壊する戦果をあげた日もあった。しかし、海岸線から南下した米軍が嘉数高地の南西側に回り込み、日本軍は背後から攻撃される状況に陥った。4月23日に司令部は戦線の整理を命じ、配属されていた部隊が前田・仲間付近へ撤退したことによって、嘉数高地は米軍に占領された。

トーチカや陣地壕が、誰の手によって築造されたのか詳細は不明であるが、1944年8月21日、嘉数・西原付近の防衛担当として第62師団独立歩兵第22大隊が配置されている。また、12月8日からは独立歩兵第13大隊が配備され、部落内の大きな民家に前借駐屯し、その数は60戸、1200人にのぼったといわれている。部隊は嘉数区長を通じて、たえず動員命令を出し、区長は残り少なくなった区民を輪番制で動員し、陣地構築に協力したという。



トーチカ背面



陣地壕入り口

<参考文献>

- 防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年
- 防衛庁防衛研究所国語館所蔵『独立歩兵第22大隊大隊歴史』1943年6月30日～1945年3月1日
- 沖縄県宜野湾市教育委員会文化課『さのわん市の戦跡』沖縄県宜野湾市教育委員会文化課 1998年
- 宜野湾市史編集委員会『宜野湾市史 第三巻 資料編二 市民の戦争体験記録』宜野湾市 1982年

b. 我如古の陣地壕群

所在地：宜野湾市字我如古4-657、4-658他
 立地（標高）：河岸（約80m）
 形態：人工壕
 種別：陣地
 現状：壕内奥部が落盤している。一部水没している場所がある
 保存状況：河岸に放置されており、2001年に砲弾の処理が行われた
 築造者：独立追撃第9中隊他
 築造年月日：1945年1月15日以降
 戦時中の使用状況：中部戦線の一陣地
 主な遺構：陣地壕、連射砲等



概要

我如古の陣地壕は、宜野湾市我如古の国道330号線沿いの墓地群のある丘中に所在する。現在、比良川沿いの河岸に所在する5基の壕を確認できている。壕の形態は、複数の出入り口を内部で繋ぐ形で構築されていたと思われる。出入り口付近の残りは良好であるが、奥は落盤で塞がれていたり、水がたまっており立ち入ることができない。

当壕は、独立追撃第9中隊が構築していた。独立追撃第9中隊の一部が、1945年1月13日に命令を受けて、15日までに小隊から多数、我如古地区へ移駐し陣地構築を始めるように指示を受けている。独立追撃第9中隊は、複数の壕口を連結し、丘の頂上付近に観測所を設け、河川沿いの出入り口付近に追撃砲を据えようと考えていたようである。しかし、陣地が未完成であったのか、破壊されたのかは不明であるが、観測所と砲を据えようとしていた位置は確認できなかった。

種別	個数
75mm砲弾	3
47mm砲弾	58
37mm砲弾	61
手榴弾	2
20mm以下小銃弾	16
種別不明の信管	6
発煙筒	2
計	148

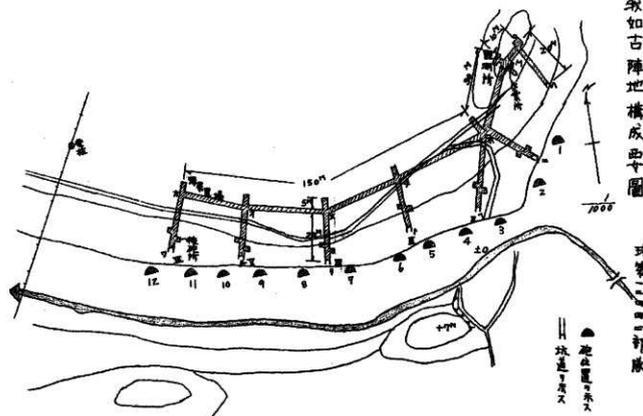
表：我如古の陣地壕群より発見された種別別砲弾数
 22大隊が我如古周辺に配備されていたためこの部隊のものとも考えられるが、山頂の砲弾があるため歩兵大隊のものと考えた方が良さそう。我如古には、独立歩兵第12大隊と独立



陣地壕入り口



壕口付近に残されていた砲弾



第4図 我如古陣地構成要図 防衛庁防衛研究所図書館蔵「独立追撃第九中隊陣中日誌」1945年より

歩兵第14大隊が配備され、米第96師団第382連隊と戦闘を行っている。このことから、当陣地を使用していたのは、独立歩兵第12大隊もしくは独立歩兵第14大隊と考えられる。

当陣地は、米軍に“墓のある丘”と呼ばれていたようである。米軍との戦闘は、丘の北側で始まり、4月19日、西側斜面が米軍に占領される。同日、丘が米軍に完全に占領されるが、翌20日、日本軍は奪還攻撃を行う。しかし、この攻撃は失敗に終わり、西原方面への戦闘へ移行することとなる。



壕入り口付近に残されていた文字



壕口に出口と繋がれている

(参考文献)

- 防衛庁防衛研究所図書館蔵「独立追撃第九中隊陣中日誌」独立追撃第九中隊 1944年
- 防衛庁防衛研究所図書館蔵「独立連射砲第二十二大隊陣中日誌」独立連射砲第二十二大隊本部 1944年
- 防衛庁防衛研究所図書館蔵「独立歩兵第十四大隊歴史」独立歩兵第十四大隊 1943～1945年
- 防衛庁防衛研修所図書蔵「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 外間正四郎著「沖縄 日本最後の決戦」光人社 1997年

第3節. 沖繩市

a. 倉敷ダムの陣地壕群

所在地：沖縄市倉敷（嘉手納弾薬庫内、ダム貯水池縁部分）

立地（標高）：ダムの水底（約50m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：ダムの完成に伴い大半が水没

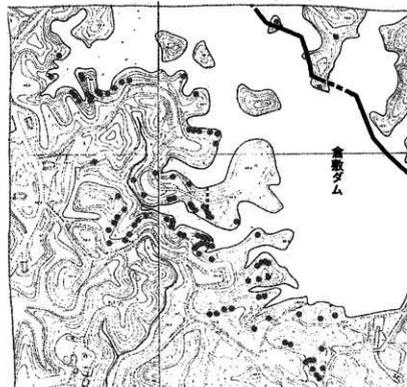
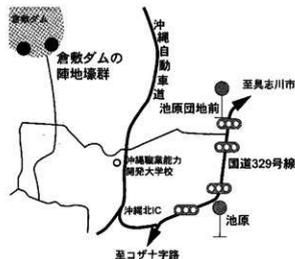
保存状況：ダム中に放置してある

築造者：第24師団

築造年月日：1944年8月～12月

戦時中の使用状況：米軍上陸後は、米軍と特設第1連隊との戦闘に使用されたと思われる

主な遺構：陣地壕



第5図 陣地壕及び塹壘分布図 沖縄市総務部総務課市史編集担当 提供
（この分布図は倉敷ダムの南側のみである）

概要

嘉手納弾薬庫内、沖縄市と石川市にまたがる倉敷ダムを中心とする一帯に分布。かつての倉敷集落や公方倉敷の拝所周辺から西側に集中している。

第24師団（山部隊）が1944年8月に沖縄へ転入してから、台湾へ転進していった第9師団（武部隊）の穴埋めのため、同年12月に南部へ移動する直前まで構築していた陣地である。

北（読谷）・中（嘉手納）両飛行場を中心とする西海岸正面の防衛のために構築されたようである。基地内のため実態の確認は困難であるが、倉敷周辺だけで数百カ所の陣地壕群が確認されている。一帯の谷間や山の斜面をたくみに利用して塹壘、クランク型、L字型など数型式が見られる。中には壁の高さが2～3mを測る事務所のような施設や2カ所ある人口が中々つながり1つになって奥行き13mを測る壕も確認された。陣地壕間は幅1.5mほどの小径でつながり、数カ所の交通壕も走っている。

陣地の構築には、周辺住民を動員してあつた。特に十・十空襲後は昼夜を問わず突貫工事が続けられた。しかし、日本軍の作戦変更に伴って放棄された。米軍上陸時は、第19航空地区指令部（青柳中佐）が特設第1連隊として改編され、配置されていた。当壕群においての米軍との戦闘は、特設第1



水没前の陣地壕入り口付近1



水没前の陣地壕入り口付近2

連隊が行っている。

現在はその大半がダムの底に沈み、ほとんど確認できない状況にある。



水没前の陣地壕入り口付近3



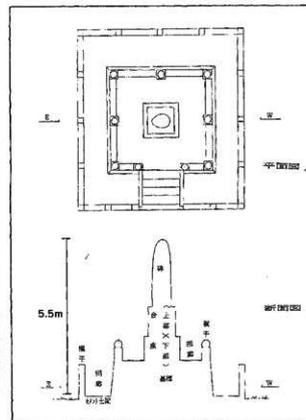
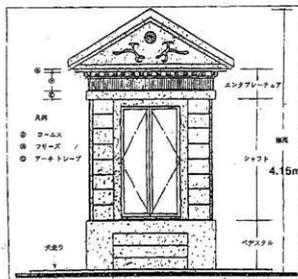
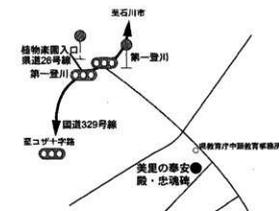
水没前の陣地壕入り口付近4

（参考文献）
防衛庁防衛研究所図書館蔵「歩兵第八十九連隊第二中隊陣中日誌」歩兵第八十九連隊第二中隊 1944年
飯田邦光「沖縄戦記 中・北部戦線生き残り兵士の記録」三一書房 1982年

b. 美里の奉安殿・忠魂碑

所在地：沖縄市字美里528番地
 立地（標高）：平地（約60m）
 形態：建造物
 種別：その他、記念碑
 現状：比較的良好
 保存状況：文化財として沖縄市が指定している

築造者：奉安殿は、美里尋常小学校、忠魂碑は、美里村在郷軍人会
 築造年月日：忠魂碑は1937年、奉安殿は1940年
 戦時中の使用状況：不明
 主な遺構：奉安殿、忠魂碑ともにほぼ完全な形で残っている



第6図 奉安殿及び忠魂碑略図 沖縄市文化財指定資料より

という。奉安殿と忠魂碑は現在、市指定の文化財（史跡）となっている。

概要

知花の国道329号線近く、かりゆし園（老人福祉センター）や美里児童園、中頭教育事務所、コロニーワークショップ沖縄（印刷所）等、諸施設が集中する地域の一角（旧、美里国民学校跡）にほぼ隣接して奉安殿と忠魂碑が建つ。奉安殿は、鉄筋コンクリート製で表面を洗い出しにより仕上げられている。また、屋根は、切妻屋根の妻入りとなっている。

美里尋常小学校へ昭和天皇・皇后の御真影が下されたのは、1928年である。その後、1940年に奉安殿が建造された。壁面等に弾痕が残るものの美里のようにほぼ完全な形でまもっているのは県内ではほとんどない。

戦前期、祝祭日等の諸儀式には、「国歌奉唱」・「精進奉読」とともに「御真影開扉」、「拝賀」（御真影への最敬礼）が「式次第」にうたわれ義務づけられていたようである。

忠魂碑の建立は1937年11月である。忠魂碑が学校敷地内にあるのは、校庭の一角が旧美里村の在郷軍人会の集会場に充てられていたからだという。ちなみに、「忠魂碑」の揮毫は、当時、帝因在郷軍人会々長であった井上幾太郎による。

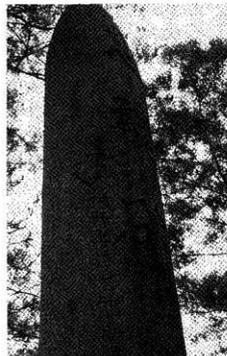
終戦直後、一帯は米第12海兵連隊の基地（キャンプ・ヘーグ）となったが、米軍が奉安殿と忠魂碑を撤去することはなかった。また、基地の返還後も一部、撤去する動きはあったものの積極的なものではなく、後世への歴史遺産の継承等が意見としてあがり、残された



美里の奉安殿



奉安殿に残る弾痕



美里の忠魂碑



忠魂碑に残されている印

（参考文献）

沖縄市企画部平和文化振興課「戦跡と基地—沖縄市の戦後ウォッチング」沖縄市役所 1996年
 沖縄市企画部平和文化振興課「沖縄市史 資料集6 美里からの戦き世証」沖縄市役所 1998年

おうか えんたい ごうくん C. 桜花の掩体壕群

所在地：沖縄市字白川白川原（嘉手納空軍基地内）

立地（標高）：平地（約55m）

形態：構造物

種別：掩体壕

現状：破損等もそれほどなく良好

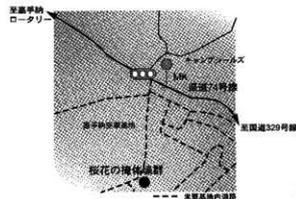
保存状況：説明版が設置されている

築造者：第44飛行場大隊

築造年月日：1944年5月～1945年3月

戦時中の使用状況：桜花の格納庫として利用

主な遺構：掩体壕本体が現存している



概要

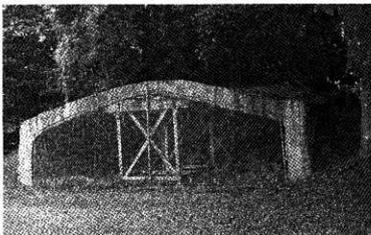
嘉手納空軍基地第3ゲートから入って500mほどいくと、道路沿い左手の小斜面に点在する。掩体壕は全部で8基を数え、ほぼ原型をなすものが3基、土砂に埋没しているものが3基、半壊1基、掩体壕と断定できないコンクリート製建造物1基となっている。中飛行場は、1944年4月から同年9月にかけて、第19航空地区司令部（宮瀬中佐）配下の第44飛行場大隊によって整備されている。当掩体壕群も、その付帯施設として建造されたと思われる。当掩体壕は、座喜味の掩体壕同様、初めに円子状に積んだ土の上にセメントで覆うように屋根部分を作り、セメントが固まった段階で中の上を除去したようである。



掩体壕は道路沿いに並んで残っている

ほぼ完全な形で残っているもので、幅約7.4m、高さ2.8m、奥行き14mを測る。規模が比較的狭小なので、桜花（人間操縦爆弾）の格納庫の可能性が高い。壕はすべて滑走路側（西北西）に出入口が向いている。

掩体壕の正面に建てられている米軍の説明板によれば、「昭和19年6月から翌20年3月の間に日本國のために建てられた約30のコンクリート避難所の一つ」とされている。また、米軍は本島上陸後に第7歩兵師団によって確認されるまで、当掩体壕の存在を知らなかったという。中飛行場（現嘉手納飛行場）には、桜花が10機格納されていたようであるが、米軍の上陸と同時に破壊命令があり、第44飛行場大隊警備中隊によってその内6機が爆破されている。



掩体壕には支柱や冊がされている

（参考）

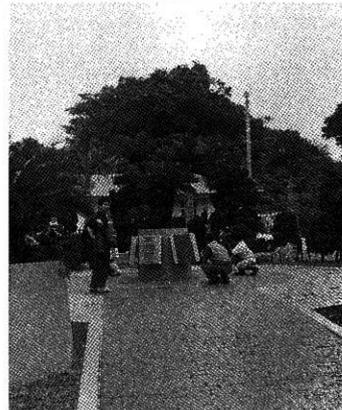
沖縄市史による倉敷郷友会への聞き取りより

降伏調印記念碑



概要

9月2日の日本の降伏を受け、南西諸島は同7日に降伏調印する。調印式は沖縄戦の攻略部隊（米第10軍）の司令部が置かれていた旧越来村の森根（現嘉手納空軍基地内）で行われ、現在、その地には米軍によってモニュメントが建てられている。沖縄市は、条例により9月7日を「平和の日」と定めている。



第4節. 具志川市

a. 具志川の海軍砲台跡

所在地：具志川市字具志川2320,2137
 立地（標高）：山腹（約65m）
 形態：人工壕
 種別：砲台
 現状：砲座を据えた部位はコーラルの採掘により残っていない。坑道も坑木などは抜き取られている
 保存状況：墓周辺に放置されている
 築造者：不明
 築造年月日：1945年1月頃
 戦時中の使用状況：砲台陣地
 主な遺構：陣地の坑道



概要

砲台跡は、金武湾を見下ろすことができる丘陵中に所在する。

みどり町方向から県道8号線を進み、具志川運動公園への道を右折する。その道から電波塔へ向けて路地を入り、行き止まりになったところの左手の丘の中に砲台跡が所在する。丘の中の古墓群への道を進み行き止まりになるところの右手に砲台跡がある。

砲台跡は、3つの古墓を連結して造られている。砲は筒状のコンクリート製の部屋に設置されていたが、現在はその大部分がコーラル採掘により削り取られ、遺路へとながら部分しか残っていない。

コンクリートの坑道を抜けた場所は天井が抜けている。この場所は、陣地構築に関連して空けられたと考えるとよい。そのため、墓として利用している時に何らかの理由で空けたものであると考えられる。また、古墓をつなぐ通路も戦後若干埋められた場所がある。

砲台と後方の弾薬庫とをつなぐ通路は坑木を立て、坑木間に板をさし込み落石を防いでいたが、現在は坑木も板も残っておらず、落盤している箇所もみられる。

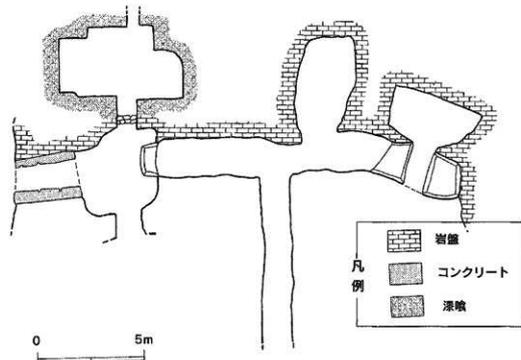
沖縄方面根拠地隊は洋上の敵を海岸に近づけないことを目的に、1944年末頃までに重運用の15.5cm砲を9門、沖縄本島中部地区に配備した。米軍の沖縄本島上陸後、米第10軍の護衛部（G-2）は、具志川市字具志川と字大田に15cmの海軍砲が残された陣地の報告を行っている。当遺跡は、その報告にある字具志川の陣地跡である。また、米軍は当遺跡が1945年1月頃から構築され始めたとしている。このことから1944年末に配備された砲の1門



砲台跡の残る丘



砲座への入り口（先はコーラル採掘により破壊されている）



第7図 海軍砲台跡平面遺構略図

が字具志川に配備されたと考えられる。

当砲台跡には、砲座跡は残っていないが、米軍作成の図面から砲の方向は金武湾に向かっていたことがわかる。このことから、当砲台跡は金武湾に進入してくる米軍艦に対する陣地であったといえる。

海軍は人員不足を補うために、陸軍兵を海軍で訓練し配置していた。具志川市周辺には第24師団歩兵第89連隊が配備されていた。また、第62師団も配備されていたようである。このことから当陣地を実質的に使用していたのは、歩兵第89連隊か第62師団であったと考えられる。

第9師団の台湾抽出以後の字具志川周辺の部隊配置に関して詳細はわかっていないが、3月末頃まで陸軍の兵が具志川に残っていることから、米軍上陸間際まで当陣地は使われていたと思われる。しかし、この陣地からは1発の砲弾も撃たれることはなかった。



砲台周辺の交通壕状況



コンクリートで整形された遺構

(参考文献)

- Intelligence Monograph, RESTRICTED RYUKYU CAMPAIGN G-2 TENTH ARMY, 31 OCT 1945 (財団法人沖縄文化振興会公文書管理部史料編集室蔵「日本軍の戦術に関する論文II」所収)
- 防衛庁防衛研修所戦史室「戦史叢書 沖縄方面海軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 歩兵第八十九連隊史編纂委員会「歩兵第八十九連隊史 成竹」井上正司 1978年
- 具志川市史編さん室「具志川市史だより 第2号」具志川市 1991年

おおたしきしよあと b. 大田の指揮所跡

所在地：具志川市字大田811
立地（標高）：山頂（約70m）
形態：構築物
種別：指揮所
現状：鉄筋等の抜き取りはあるが比較的良好。
壕は、土砂が流れ込んでいる
保存状況：山中に放置されている
築造者：不明
築造年月日：1945年1月頃
戦時中の使用状況：戦闘指揮所
主な遺構：コンクリート製トーチカおよび地下壕



概要

当遺跡は、県道8号線と県道10号線に挟まれ、両県道が合流する地点の丘の上にある。周囲は墓が多数所在し、金武湾、勝連半島、中城湾を見渡せる位置にある。

当遺跡は、全体をコンクリートで固められたトーチカ状構築物であり、大きく3つの部屋に分けられる。第1は出入口から入った部屋で金武湾と中城湾方向へ2つの銃眼が向いており比較的に広い空間である。第2は第1の部屋から勝連半島側にある部屋である。この部屋は金武湾、中城湾、勝連半島の三方に銃眼が向いている。第3の部屋は第1の部屋から地下へ掘られた壕である。この壕はコンクリートで固められておらず、簡単に掘られたものようである。そのため、壕内には土砂が堆積しており、立つことができない。

米軍は、1945年1月22日段階で当遺跡周辺にトーチカが存在することを把握していた。

字具志川と字大田には沿岸警備用の15cm海軍砲が設置されていた。米軍の沖繩本島上陸後、米第10軍課報部（G-2）は、当遺跡を字具志川および字大田にある砲台の観測および射撃指導の施設として位置付け報告を行っている。

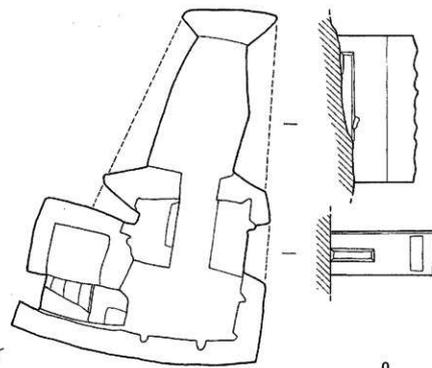
具志川市では、歩兵第89連隊が陣地構築を行い、対空・海監視のために伊計島と勝連半島にそれぞれ監視隊を派遣していた。



指揮所跡の残る丘



外から見たトーチカの銃眼

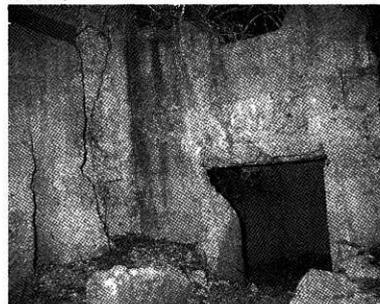


第8図 指揮所跡遺構略図

それぞれの監視隊の情報は無線と有線により、具志川市大田付近へ報告されていた。また、現段階において伊計島、津島、知念半島などに砲台が設置されていたことがわかっている。これらは金武湾および中城湾への米軍艦の進入を防ぐものであり、その拠点の1つが当遺跡を含む字具志川および字大田周辺の陣地であったと考えられる。



トーチカ入り口



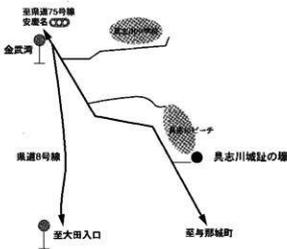
トーチカ内部

（参考文献）

Intelligence Monograph, RESTRICTED RYUKYU CAMPAIGN G-2 TENTH ARMY, 31 OCT 1945（財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室蔵「日本軍の戦術に関する論文II」所収）
防衛庁防衛研修所戦史室「戦史叢書 沖縄方面海軍作戦」朝雲新聞社 1968年
歩兵第八十九連隊史編纂委員会「歩兵第八十九連隊史 破竹」井上正司 1978年
設谷村役場総務部企画課「平和の炎 VOL.8 第8回設谷村平和創造展」設谷村役場 1995年

c. 眞志川城址の壕

所在地：具志川市字具志川3430、3426他
 立地（標高）：山腹（約20m）
 形態：人工壕
 種別：障地
 現状：崩落等がある
 保存状況：看板が設置されている
 築造者：第24師団歩兵第89連隊
 築造年月日：1944年7月以降
 戦時中の使用状況：警防団長を中心とした具志川住民の避難壕
 主な遺構：集団死の時焼けたと思われる壕内壁



概要

具志川市役所方面から県道8号線を与那城方面へ進み、県道37号線との分岐点で県道37号線へ入る。具志川ビーチを通り過ぎた左側に具志川城址がある。具志川城址の壕は、城址内の山腹に点在している。

現在確認できるのは5つの壕である。道側の最も右側の壕から仮に壕①、壕②、壕③、壕④、壕⑤とする。壕④は入り口は狭くなっているが、内部は奥行き2m、幅6mの部屋状になっている。また、壕①も壕④とほぼ同じような形である。壕②はほとんど奥行きがない。壕③は入り口がほとんど埋没しているため、内部の状況は不明である。壕⑤は5つの壕の中で最も面積が広く、奥行き3m、幅8m前後ある。壕内は、土砂が堆積しており、奥行きがほとんど歩けるほどの高さしかない。壕内は、落盤を起こしていたり、煤の付着した岩などが残っている。

具志川城址の壕は、第24師団歩兵第89連隊が構築したとされる。1944年12月の新防衛計画により、一部の部隊を残して歩兵第89連隊は南部へ移動した。

字具志川では、徳吉善盛警防団長を中心に竹やりや手榴弾で武装し、米軍に備えていたようである。米軍上陸後、警防団長以下23名の男女が具志川城址の壕へ集まった。4月4日、警防団員は、パトロール中の米兵が具志川城址の壕へ近づいたため、手榴弾を投げつけた。米兵が手榴弾と火炎放射器で対抗したため、中の住民は壕内で手榴弾を起爆させ13人が死亡した。残りの負傷した9名は戻ってきた米兵に手当てをしてもらったという。

(参考文献)

具志川市誌編纂委員会『具志川市誌』具志川市役所 1970年
 具志川市教育委員会『市民の戦争体験記』具志川市教育委員会 1986年
 琉球新報社『戦後50年』琉球新報 1995年2月12日
 沖縄タイムス社『集団自決のみ霊を鎮魂へ』沖縄タイムス 1995年2月20日



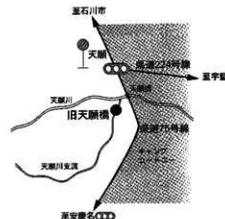
壕の残る丘



壕付近には看板が設置されている

d. 旧天願橋

所在地：具志川市字天願8と、字前原136-5、200の間の河川上
 立地（標高）：平地（約10m）
 形態：構築物
 種別：橋
 現状：破壊された当時のまま残っている
 保存状況：市が戦争遺跡として標柱を立てている。
 築造者：不明
 築造年月日：1934～1935年
 戦時中の使用状況：橋
 主な遺構：破壊された橋の跡



概要

旧天願橋は、具志川市天願茶木根原に所在する。県道75号線を沖縄市方面から石川市方面へ進むと、天願川に天願橋が架かっている。旧天願橋は、現在の天願橋の西側に橋脚が折れたままで残っており、天願川の支流に放置されている。

旧天願橋は、鉄筋コンクリート製で、中央を1本の橋脚で支えていた幅約5m、長さ約22mの橋であった。また、欄干が2つに分かれ、美しい面影を見せていることから「ターチ橋」とも呼ばれていた。現在は、中央の橋脚が折れ、橋全体がVの字型に落ち込んでいる。

旧天願橋が造られたのは、1934年～1935年ごろと推定されている。当時としては珍しいコンクリート製の橋であった。また、旧天願橋を含む天願川が那覇市輝草小売人組合が発起人となった「南沖縄八景」の応募投票で選ばれ絵葉書にもなっている。

しかし、沖縄本島に米軍が上陸してくる直前、日本軍によって旧天願橋の橋脚が爆破され、橋全体が現在のように中央部からVの字型に落ち込んでしまった。当時近くの壕に避難していた住民が、橋脚の下部に穴を空けて爆薬を詰める準備をしていたのを目撃している。橋脚が爆破された時期は、米軍上陸前の1945年3月29日から4月1日の間であるとみられている。

日本軍は、米軍上陸直前あたりからそれまで整備していた交通網などを米軍の進攻を遅らせるために破壊していた。このようなことから旧天願橋も米軍の進攻を遅らせるために行なったと思われる。

米軍は、爆破された旧天願橋の上にブルーザーで土を被せ、2日ほどで戦車が通れるようにしたようである。現在、具志川市が橋の近傍に旧天願橋が戦争遺跡であることを示す標柱を立てている。

(参考文献)

沖縄タイムス社『旧天願橋姿現す』沖縄タイムス 1996年10月29日朝刊
 沖縄タイムス社『歴史の舞台22』沖縄タイムス 2000年10月7日朝刊



標柱を立てられた旧天願橋



V字形に折れた橋

第5節. 石川市

a. ヌチシヌジガマ

所在地：石川市字嘉手菊419-1、419-2他
立地（標高）：山腹（約70m）

形態：自然洞穴
種別：住民避難

現状：土の流入などにより若干土が堆積している

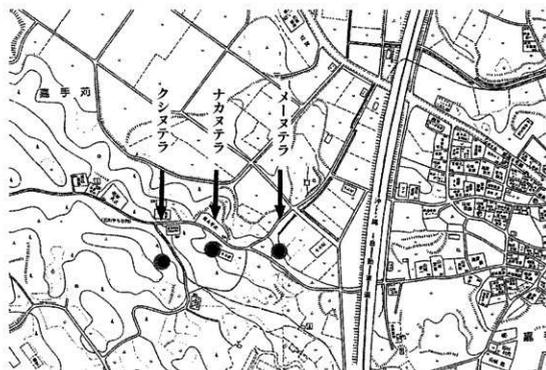
保存状況：階段等が設置され、平和学習に使用されている

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：嘉手菊周辺及び設谷からの避難民の避難壕

主な遺構：埋土により詳細不明



第9図 ヌチシヌジガマ壕口位置図

概要

ヌチシヌジガマは、石川市嘉手菊にある。国道329号線を兵志川市方面から北上し、石川市東東納の交差点で県道6号線に入る。県道6号線を恩納村方向へ進み、沖縄自動車道を越えた後、左折した正面の山中に所在する。

ヌチシヌジガマは琉球石灰岩の自然の割穴である。このガマには3つの壕口がある。各壕口は、メー（前）ヌテラ、ナカ（中）ヌテラ、クシ（後）ヌテラと呼ばれており、それぞれが中で1つにつながっている。メーヌテラからクシヌテラまでは約200mある。内部には流水がありメーヌテラの口から流れ出ている。

メーヌテラの入り口付近から階段が設置されている。階段の右側壁面からナカヌテラへ抜ける穴がある。ナカヌテラへ抜けず、そのまま進むとクシヌテラへと抜ける。クシヌテラの出入口付近は急斜面になっているため、板と鉄筋により階段が設置されている。

壕内には銜詰や銃の破片などの遺物も残っている。

沖縄戦において、このガマは住民の避難壕として使用された。1945年4月から6月まで嘉手菊、山城、伊波の住民や設谷からの避難民が計100名



壕口付近



壕内には階段が設置されている

以上（約300名という話もある）避難していた。

石川市においては、米軍の沖繩本島上陸に伴い収容所が設置された。また5月7日に戦後初の学校といわれる石川学園も設置され、住民の戦後生活が始まっていた。しかし、近傍にあるヌチシヌジガマでは、6月まで壕の中での戦中生活を送っていたのである。

ヌチシヌジガマの住民が壕を出るきっかけとなるのは、米軍の投降勧告であった。米軍の投降勧告に対して、嘉手菊の区長であった山城さんが「自分が殺されたら洞窟から出るな」と言い残して投降勧告に応じた。この区長が米軍に殺されなかったことからヌチシヌジガマの住民は、この壕を出ることになる。

戦後、この壕がヌチシヌジ（命をながらえた）ガマと呼ばれるようになったのは、この壕に避難していた住民が投降し、砲弾による死者を出さなかったことに由来する。



壕内部

（参考文献）

伊波信光「石川市史」石川市役所 1989年

沖縄タイムス社「鎮魂の夏戦争遺跡は今」沖縄タイムス 1997年6月20日

石川市歴史民俗資料館「沖縄県博物館協会秋季研修会 現地研修会」資料 1999年

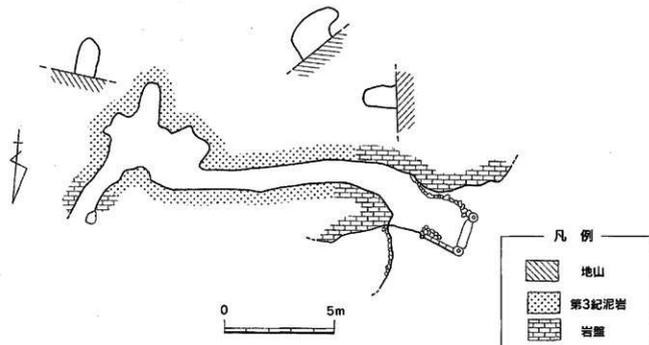
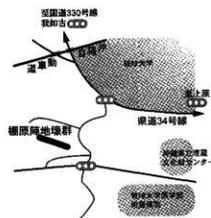
たなばるじんちごうぐん a. 棚原陣地壕群

所在地：西原町字棚原650-71、668、680他
立地（標高）：山腹（130～150m）

形態：人工壕
種別：陣地

現状：一部に落盤がみられるが、比較的良好
保存状況：私有地に係る一部の壕には金網
が施されている

築造者：第62師団工兵隊
築造年月日：1945年1月頃
戦時中の使用状況：陣地
主な遺構：陣地坑道



第10図 棚原陣地平面遺構略図

の後、棚原地区は4月22日より第24師団歩兵第22連隊の守備担任地区となる。しかし、歩兵第22連隊は兵力の不足から我浦、小波津、翁長北地区、幸地への守備担任地区の変更を提言し、守備担任地区が変更された。そのため、日本軍は事実上棚原地区を放棄することとなった。5月3日から6日にかけて歩兵第32連隊第1大隊が棚原周辺まで進出するが、米軍の攻勢に遭い失敗に終わる。

概要

棚原陣地壕群は、西原町字棚原の集落を南南東に見下ろす標高約130m～150m程の石灰岩丘陵上に所在する。この丘陵には棚原グスクと呼ばれるグスク時代の遺跡があり、丘陵の大半がグスクの範囲だと推定されている。断崖面が連なる丘陵の北東部を中心に陣地壕群があり、人が入ることが出来る規模の口が開いている壕としては、現在5基確認できる。「西原町史 第五巻 資料編四 西原の考古」の第7章「戦跡考古学」では、このうちの1基を「棚原観測所壕」と位置付けている。



壕口付近

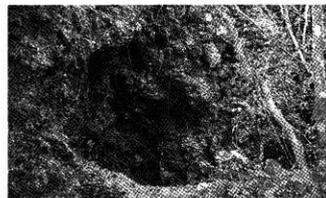
また、残りの4基については、墓地「棚原御所居苑」の管理地（私有地）に所在する。「棚原観測所壕」と同様に琉球石灰岩の下に発達している第3紀泥岩（クチャ）を掘削して構築された人工壕である。

字棚原を含む旧西原村には、1944年8月20日より、第62師団独立歩兵第11大隊が警戒担任地区として、中国江蘇省より着任している。西原国民学校を本部としたこの大隊の配属部隊が、棚原陣地壕群の構築に携わったと思われるが、前掲「西原町史」の聞き取り調査によると、第62師団工兵隊が築造したとのことであり、附近住民が徴用されることはなかった。



壕内には水没している場所がある

棚原陣地壕群周辺は、その標高から14.2高地と呼ばれており、1945年4月12日から4月22日にかけてほぼ断続的に自兵戦が展開された。その際、棚原陣地壕群を利用したと思われる部隊は、独立歩兵第12大隊である。そ



縦穴壕の壕口



落盤跡

(参考文献)

- Intelligence Monograph, RESTRICTED Ryukyu Campaign G-2 TENTH ARMY, 31 OCT 1945 (財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室蔵「日本軍の戦術に関する論文II」)
- 防衛庁防衛研究所戦史室「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲出版社 1968年
- 西原町史編纂委員会「西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録」西原町役場 1987年
- 西原町史編纂委員会「西原町史 第五巻 資料編四 西原の考古」西原町役場 1996年

(証言者)
比嘉真さん

b. 小波津の陣地壕

所在地：西原町字小波津926

立地（標高）：丘陵（約35m）

形態：人工壕

種別：陣地

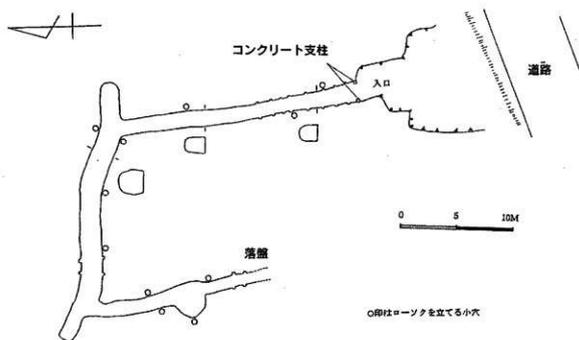
現状：土砂流入により若干土が堆積している
保存状況：出入り口の1カ所は落盤し塞がっている。西原町主催の平和学習に利用されている

築造者：附近住民を徴用して構築

築造年月日：1944年10月以降

戦時中の使用状況：野戦重砲陣地

主な遺構：陣地坑道



第11図 小波津の陣地壕平面遺構図 西原町教育委員会提供

概要

小波津の陣地壕は、西原町字小波津の国道155号線から分岐する町道37号線の道路脇に所在する。壕は南側に開口しU字型を呈しているが、西側に開口していると思われる入口は落盤のために塞がれている。

民間の墓を利用し、第3紀砂岩（ニービ）層を引り抜いて構築された壕である。入口正面は、墓室と墓庭をそのまま利用しているため、外観は左右に存する掘り込み墓と相似している。

坑道の入口附近の高さと幅は、地面幅約1.7m、高さ約1.2mで、大人がしゃがみながら擦れ違えることができる程度の規模である。また、この場所は坑道の壁面に落盤を防ぐための坑木をはめ込んだ跡が左右対称に8組確認できる。坑木跡は内部の坑道にも数組確認できるが、入口附近に顕著にみられる。

字小波津では1944年の十・十空襲以後、独立歩兵第11大隊の第3中隊と第1中隊が配備された。第11大隊の本部が西原国民学校にあったことから、学校に近い小波津集落の、特に瓦葺きで大きい家は、宿舍として兵士に利用されることになった。

この歩兵部隊を援護する目的で設置されたと思われる小波津の陣地壕は、野戦重砲陣地として構築されたものであるが、独立重砲兵第100大隊の1個



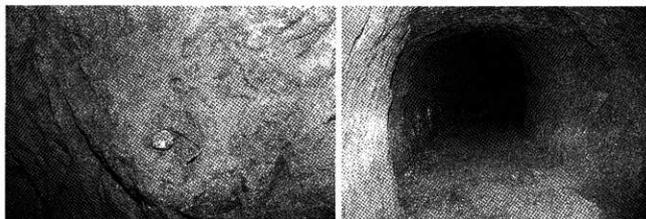
壕口付近



壕内には坑木跡が若干残る

小隊が使用していた。

壕内の遺物としては、軍靴の草底が約20足、壕入り口付近に並べてあるのを確認できる。これは、本土復帰前に行われた厚生省（当時）による遺物収集時に集められたものと思われる。



壕内に残る遺物と掘状遺構

壕内部

（参考文献）

Intelligence Monograph, RESTRICTED Ryuky Campaign G-2 TENTH ARMY, 31 OCT 1945（財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室蔵「日本軍の戦術に関する論文II」）
西原町史編集委員会「西原町史 第三巻 資料編 二 西原の戦時記録」西原町役場 1987年
西原町史編集委員会「西原町史 第五巻 資料編 四 西原の考古」西原町役場 1996年

C. 西原村役場壕

所在地：西原町字翁長320
 立地（標高）：平地（約20m）
 形態：人工壕
 種別：政治・行政
 現状：一部が閉り取られているがおおむね良
 好な状態で残っている
 保存状況：案内板が設置され、平和学習に
 利用されている
 築造者：字翁長の入夫数名
 築造年月日：1944年6月以降
 戦時中の使用状況：不明
 主な遺構：役場壕、ニービ土の支柱



概要

西原村役場壕は、戦前の西原村役場の西南西約100mの所に掘られている。戦前、沖繩県庁や各警察署・市町村は、戦時行政の執行や重要書類の保管のために壕の構築を行ったが、当壕もその1つである。1944年6月から、地元の入夫数名を雇って壕掘作業が行われ、役場事務は、米軍の本島上陸の直前まで行われていた。

当壕の地質は第3紀砂岩（ニービ）で、ホール型をしており、全体が約40m²ほどの面積である。ホールの中央部は、1m角の2本の柱を残して掘られ、落盤防止にあてられている。

戦時中、当壕がどのように使用されたかは不明である。戦後、役場壕には多くの書類が残されており、その中から字内閣の土地台帳を見つけて写しを作成した。

1980年頃、土建業者によって道路に面した部分がえぐられ大きく開口し、現在は橋と入り口が設置されているが、ここは壕の最も奥の部分にあたる場所である。

1985年9月に西原町教育委員会が発掘調査を行い、人の頭蓋骨破片や砲弾の薬きょう、ジュラルミン製の水筒・飯ごう、鉄製のコップなどが出土している。

2000年、西原町が町制20周年記念に当壕の保存・公開事業を実施し、案内板が設置された。

（参考文獻）

西原町史編集委員会「西原町史 第三巻 資料編二 西原の戦時記録」西原町役場 1987年
 西原町史編集委員会「西原町史 第五巻 資料編四 西原の考古」西原町役場 1996年



橋や橋板の覆られた壕口付近



壕内部

第7節. 北谷町

a. ウカマジーの海軍砲台跡

かいくんほう だいあと

所在地：北谷町字浜川252(嘉手納空軍基地内)

立地(標高)：丘陵(約50m)

形態：構築物+人工塚

種別：砲台

現状：塚は崩落している部分がある

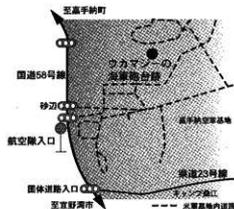
保存状況：基地内で説明版が設置されている

築造者：不明

築造年月日：1945年1月頃

戦時中の使用状況：海軍砲台として利用

主な遺構：砲台跡と付属の塚

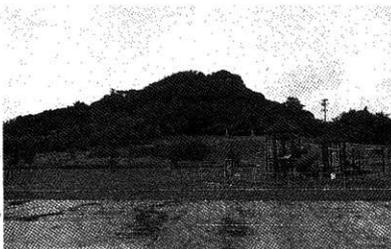


概要

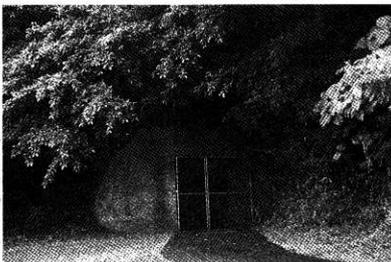
北谷町は、米軍の上陸地点と考えられ、日本軍が町のいたる所に陣地を構築していた。現在の嘉手納空軍基地第1ゲートを入ると左奥にゴルフ場があり、その中に小さな岩山が残っている。米軍が野戦病院跡の碑を建てているが、ここがウカマジーの丘である。

ウカマジーの海軍砲台跡には、砲座、陣地塚、観測所等の施設跡が現存している。砲座と陣地塚は丘の中腹に所在し繋がっている。観測所は丘の上に所在する。砲座及び観測所は、コンクリートで作られている。陣地塚は、崩落が激しいが、砲座跡は砲は撤去されているものの、砲と砲座を連結していたボルト等も残っており、残り具合は非常に良好である。

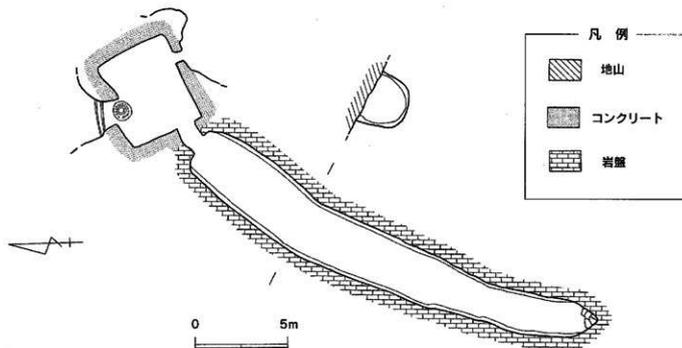
8月以降、第62師団(行部隊)独立歩兵第15大隊が移駐してきた。翌年、名所であった北谷トンネルも軍事車両の通行に差し障りとして破壊されてしまった。海岸沿いには丸太を組んだ戦車止めや戦車穴が掘られ、米軍の上陸に備えた。ウカマジーの丘には海軍第11砲台が設置されていた。海軍は、1945年1月頃、沖縄本島に15.5cm砲9基を設置した。ウカマジーの海軍砲台は、この時に整備されたものと思われる。また、丘の頂上には、砲の観測所と思われるコンクリ



砲台跡の残る丘

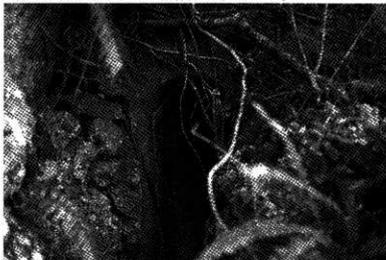


コンクリートで建造された砲台跡



第12図 海軍砲台跡平面遺構略図

ート製の構築物がある。海軍砲台には、喜友名小屋取から14名の女子青年が3月24・25日頃、海軍女子挺身隊として徴用された。また、下勢頭からも女子青年団57名が、砲彈運びに動員された。海軍砲台からは2発の砲彈発射があったが、かえって標的となり40名近い兵士のうち4から5名のみが生き残った。女子挺身隊として徴用されていた女子青年団などもウカマジーの塚などに避難していたが、逃避中途中銃撃され、最後には軍から支給されていた手榴弾を爆発させて「自決」した者も含め、17名が戦死した。現在でも、旧桃原3区公民館あとに「護国挺身隊の碑」として納骨堂が建っている。



観測所と思われるコンクリート製構築物入り口



砲座跡

(参考文献)

- 防衛庁防衛研修所図書室「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 防衛庁防衛研修所図書室「戦史叢書 沖縄方面海軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 北谷町史編纂事務局「北谷町民の戦時体験記録集」北谷町役場 1985年
- 北谷町役場企画課町史編纂室「戦時体験記録 北谷町」北谷町役場 1995年

c. 白比川沿いの特攻艇秘匿壕群

所在地：北谷町字大村374、363、357-1他
(キャンプ端置内)

立地(標高)：丘陵(約20m)

形態：人工壕

種別：秘匿壕

現状：壕は崩落している部分がある

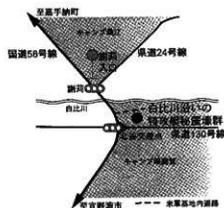
保存状況：原野に放置されている

築造者：海上挺進基地第29大隊

築造年月日：1944年12月以降

戦時中の使用状況：特攻艇秘匿壕

主な遺構：秘匿壕



概要

米軍の上陸が想定された地域には、陸軍の特攻艇部隊が配置された。沖縄には、慶良間に海上挺進第25戦隊、与那原に第27戦隊、港川に第28戦隊、そして北谷に第29戦隊が配備される予定だった。海上挺進第29戦隊は、1945年1月沖縄へ向かったが、輸送船団は敵の攻撃を受け戦隊主力は奄美大島で立ち往生した。第1中隊と第2中隊の一部が到着したが、保有する特攻艇は約20隻に過ぎなかったという。

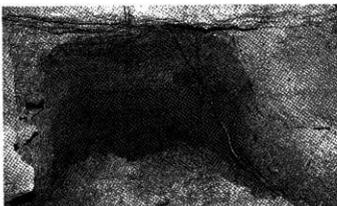
第29戦隊の配備に先だって、基地建设のための部隊が配置されることとなった。特攻艇①の基地建设部隊である海上挺進基地第29大隊は広島で創設され、1944年の12月5日に白比川沿いに進駐した。北玉国民学校や民家に分宿した部隊には応召兵が多かったため、住民からは「タンメー(おじさん)部隊」と呼ばれた。このとき、村内からも約200名あまりが防衛隊として編入され、壕掘りを行っている。壕は高さが約2m、幅は約3mで、奥行きは壕によって異なるが、艇を2隻横にならべて格納できるほどであった。現存する壕の中の1つは12mの奥行きがある。(①は全幅1.8m、全長5.6m)川までは、枕木に線路を敷いていたようである。白比川沿いには、7基の壕が残っており、その中の1基が現在、墓として転用されている。

1945年3月29日夜から30日朝にかけて中川中嶺以下17名が出撃し慶良間方面の米船団に向けて攻撃した。全艇未帰還となったが、1名だけは生還した。

(参考文献)
北谷町役場企画課町史編集室「戦時体験記録 北谷町」北谷町役場 1995年
若潮会・戦史編集委員会「①の戦史—陸軍水上特攻、船舶特攻の記録—」松坂弘 1971年



壕の残る丘



秘匿壕内部

d. 嘉手納監視哨跡

所在地：北谷町字浜川271(嘉手納空軍基地内)

立地(標高)：山頂付近(30~35m)

形態：構築物

種別：監視哨

現状：基礎部分のみ残っている

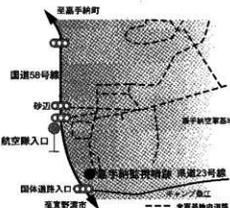
保存状況：岩山の山頂にあり、立入者は少ない

築造者：地元住民(北玉国民学校生徒を含む)

築造年月日：1943年までには築造

戦時中の使用状況：敵機の監視

主な遺構：監視哨基礎部、崩の一部



概要

嘉手納監視哨跡は、国道23号線から国道58号線に出る手前右側の標高30~35mの岩山(クシクニニー)の山頂部に位置する。監視哨には、高さ約150cm、厚さ約16cmの周りを取り囲んでいたと思われるコンクリート壁が一部残存する。この壁は「爆風返し」と呼ばれていた。壁の上を監視哨員が見回りのため歩くこともあったという。監視哨本体は基礎部分のみ残存し、約5cm程表土を除去すると底面が露出する。床面全体は依然不確認だが、一辺と一角を抜出することが出来た。一辺約270cm、内角が約125°であるため六角形であると思われる。元哨員も同様の証言をしている。

この監視哨は、民間防空監視哨であり、県警防諜管轄であった。1941年の「防空監視哨令」により、これらの監視哨は、立哨が臨時から常時へとかわり、設備・人員なども強化された。哨長・副哨長には村の在郷軍人が村(県の委任事務)の委嘱をうけて行っていた。哨員は役場職員が兼任していたが、後に青年学校生徒が動員された。定期的に本部に報告することが義務づけられており、その連絡には有線電話が使われていた。窓にはガラスが埋め込まれており、建物全体がアダン林で装束されていた。

1945年3月末、監視活動は下勢頭山の岩山(トクガワジー)に移り、4月1日の米軍上陸直前に監視哨員は自然解散した。

(参考文献)

沖縄県沖縄史料編集所「沖縄県史料 近代1 昭和十八年知事事務引継書」沖縄県教育委員会 1978年
北谷町役場企画課町史編集室「戦時体験記録北谷町」北谷町役場 1995年



監視哨基礎部分



『爆風返し』と呼ばれていた壁

第8節. 嘉手納町

a. 久得の陣地壕

所在地：嘉手納町字久得848（嘉手納弾薬庫地区内）

立地（標高）：丘陵（約100m）

形態：人工壕

種別：陣地

現状：3基中、1基確認できなかった

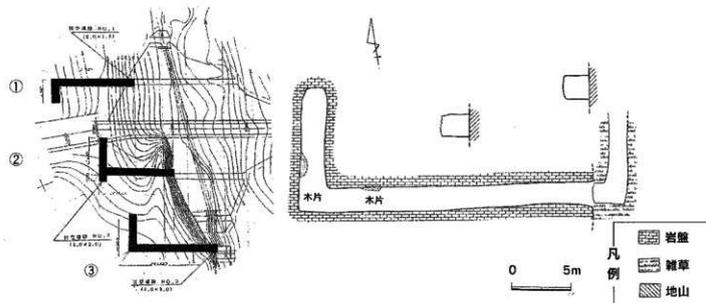
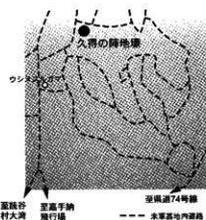
保存状況：嘉手納町教育委員会が標識を立てている

築造者：第24師団歩兵第22連隊第2大隊第5中隊

築造年月日：1944年8月～1944年12月

戦時中の使用状況：構築されたが米軍上陸前に放棄された

主な遺構：陣地壕2基



第14図 1997年当時の陣地壕
嘉手納町教育委員会提供

第15図 壕③平面遺構略図

概要

久得の陣地壕は、嘉手納弾薬庫内の久得地域に所在する。立ち入るには、米軍へ立入申請をし、許可が必要となる。

当遺跡は、谷の底部に構築されている。1997年に発見された時の新聞記事では、3基の壕が確認されていた。しかし、現在確認できるのは2基のみである。

壕口は約2m四方で、壕内には坑木の跡が残っている。各壕とも約20mほどまっすぐに掘られているが、その後はL字型とT字型に掘られている。各壕とも出入口が1ヵ所のみであることから、構築途中で放棄されたものと思われる。

壕内にはビール瓶や薬瓶などが残っていたが、その遺物の中に下敷きが残っていた。その下敷きに書かれていた名前から、この壕を構築していたのが歩兵第22連隊第2大隊第5中隊であると考えられている。

歩兵第22連隊は1944年8月沖縄本島へ上陸し配備についた。歩兵第22連隊は、中（嘉手納）飛行場を中心とした地域に配備されており、久得周辺には第2大隊が配備され陣地構築を行っていた。しかし、1944年12月10日に小禄地区への移動の



壕口付近



壕内に残された藍

命令が発せられ久得を出発している。
現在壕前には、嘉手納町が標識を立てている。



嘉手納町が立てた標識



壕口付近

（参考文献）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「沖縄戦二於る歩兵第二十二連隊史実資料」第三十二軍残務整理部 1947年
吉原利安「沖縄戦記 歩兵第二十二連隊の最後」当文献は、嘉陽安進氏が1962年6月より愛媛新聞に連載したものを
収集し編集したものである）

琉球新報社「旧日本軍の陣地壕か」琉球新報 1997年7月24日

嘉手納町教育委員会「嘉手納町の文化財」嘉手納町教育委員会 1999年

b. ウシヌスルガマ

所在地：嘉手納町字久得835（嘉手納弾薬庫地区内）

立地（標高）：丘陵（約80m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難

現状：崩落等もなく良好

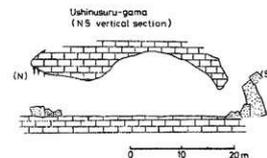
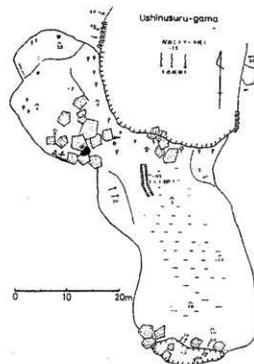
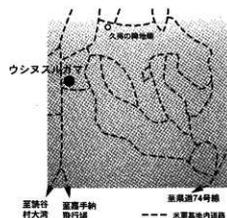
保存状況：軍用道路脇に放置されている

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：米軍上陸直後の住民避難壕

主な遺構：水路跡等



概要

ウシヌスルガマは、嘉手納弾薬庫地区内の久得地域に所在する。嘉手納弾薬庫地区内に所在するため立ち入るには、米軍への立入申請及び許可が必要となる。洞口は道路より15m下のドリネ底部に開口しており、幅30m、高さ8mの自然洞穴である。床面は人工的に平坦化されており、一部水路が形成されている。

ウシヌスルガマには、久得、屋良などの住民が、米軍上陸の数日前から避難し始めたようである。壕内には一時、300～400名の人々が避難していたとも言われる。また、日本軍も3月30日に壕内に入ってきたようだが、翌日には出ていっている。

米軍は、4月1日朝、沖縄本島への上陸を開始するが、ウシヌスルガマの住民が収容されたのも4月1日の比較的早い時間帯であったようである。米兵が10名ほどウシヌスルガマの壕口付近に立っていたため、移民婦りの人が通訳をして安全を確認してからウシヌスルガマの住民のほとんどが壕を出た。一部は、壕内の小さな穴へ入っており、外の状況を知らずに壕に残っていた者達もいた。壕を出た住民は院谷村周辺の収容所へ収容されたようである。

戦後、ウシヌスルガマは、米軍の弾



壕口付近



壕内に残る水路跡

第16図 ウシヌスルガマ平面図及び断面図 嘉手納町教育委員会提供

薬庫として周辺の土地が接取されたため原野に放置されたままとなっている。



壕口付近

（参考文献）

嘉手納町教育委員会「嘉手納町の文化財」嘉手納町教育委員会 1999年

嘉手納町史編纂審議会「嘉手納町史資料編5 戦時資料（上）」嘉手納町教育委員会 2000年

C. 栄橋

所在地：嘉手納町字屋良7001

立地（標高）：川縁り（約15m）

形態：構築物

種別：交通関係

現状：日本軍に破壊されたまま放置されている

保存状況：嘉手納町が説明版を設置

築造者：台南精糖株式会社

築造年月日：1930年頃

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：残った橋



概要

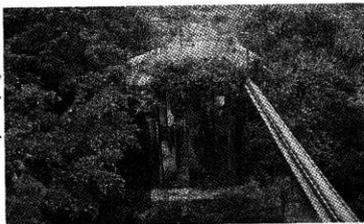
栄橋は、嘉手納高校の裏手、比謝川上に立地する。

栄橋は、台南精糖株式会社（後の沖縄精糖株式会社）により、1930年頃建造された。二重アーチ状の鉄筋コンクリート製の橋梁で、二重橋とも呼ばれていたようである。主な用途は台南精糖株式会社の嘉手納工場へ、牧原久持地区からのさとうきびを搬入するためのものであった。

1944年、第32軍が創設され、各部隊が沖縄本島へ移駐してきた。同年12月には、沖縄本島南部に配置されていた第9師団が台湾へ移動したことから、大幅な配置変換が行われる。それに伴い、1944年12月から2ヶ月、第24師団の穴を埋めるために、独立混成第44旅団が中部地域に配置された。その中の独立混成第15連隊の工兵隊が、「第一防脚線ハ工事ヲ最小限ニ止ムル如クスルモ構築徹底的ニ破壊ス」という計画を立てた。この目的は、米軍の進攻速度を遅らせることであった。栄橋はこの計画の中に含まれていたのである。

米軍上陸時、読谷・嘉手納周辺に配置されていた日本軍は、独立混成第15連隊が立てた計画を引き継いでいるかのように栄橋を爆破し、撤退している。

現在は、橋の約半分が残るのみとなり、比謝川上に使用されずに放置されている。



栄橋



川から見た栄橋

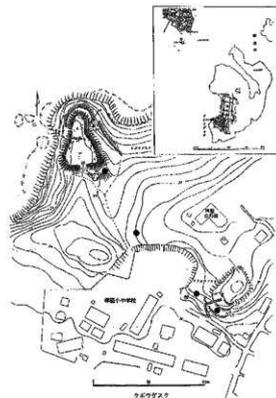
第9節. 勝連町

（参考文献）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「前地対戦車施設設置計画」上兵中隊（独立混成第44旅団独立混成第15連隊工兵中隊）1944年
読谷村役場『広報よみたん 第388号』読谷村役場 1991年

a. 津堅島クボウグスク周辺の陣地壕群

所在地：勝連町字津堅1393-3番地他
 立地（標高）：山林（20～40m）
 形態：人工壕＋自然洞穴
 種別：陣地
 現状：土砂の堆積等がある
 保存状況：植物群落内に放置されている
 築造者：中城湾要塞砲兵連隊第1中隊（重砲兵第7連隊）
 築造年月日：1941年以降
 戦時中の使用状況：陣地
 主な遺構：陣地壕



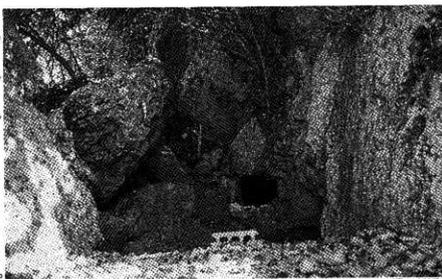
第17図 クボウグスク周辺の陣地壕位置図

概要

1922年、中城、符候、船浮への要塞建設の計画が作成された。1941年8月、中城湾要塞建設が着手され、9月編成下令が下る。津堅島へは、10月中城湾要塞の砲兵連隊第1中隊が派遣された。中城湾要塞砲兵連隊は、1944年5月15日、重砲兵第7連隊（第4152部隊）と改称し、独立混成第44旅団の指揮下へ入った。

同連隊津堅地区隊は津堅島の西南端に位置する新川グスクやクボウ御獄が立地する岩山を利用して、陣地壕群を構築した。なかでも、最高所の標高37.5mを計る新川グスクには2段になった自然の洞窟があり、この洞窟を中心として、新たな地下壕群を掘り加え、司令部とした。新川グスクの陣地壕群は3段構造で、内部は梯子で連結されており、この司令部を取り巻くように、野砲陣地や加農砲陣地、機関銃陣地、対戦車壕などが造られた。

1945年4月6日米軍斥候兵の上陸があり、10日、11日の両日、本格的な上陸攻撃が行われた。これにより司令部を除く日本軍陣地の大半が破壊され、玉碎

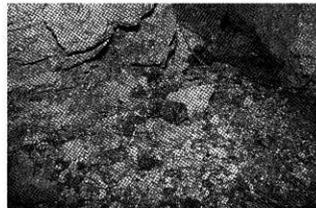


壕口付近



壕内部

を覚悟する事態に追い込まれた。しかし、翌12日米軍による攻撃は中止され、また津堅地区隊にも勝連半島への転進命令が出された。これを受け、地区隊ではクリ船による転進を試みたが、米軍による攻撃を受けたため、兵隊の一部は津堅島に戻り、司令部壕に残した負傷兵と合流した。4月23日、再び米軍は津堅島に上陸し、日本軍陣地の掃討を行った。司令部壕は爆弾と火炎放射器による攻撃で破壊されたが、補助防護壕の幾人かは最下層へ避難して奇跡的に救出されたという。



現在も残る遺物



コンクリート製遺構

（参考文献）

防衛庁防衛研究所国書館蔵「沖縄戦二於クル重砲兵第七連隊史実資料」第三十二軍残務整理部 1947年3月25日
 防衛庁防衛研究所国書室「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
 沖縄県教育委員会「沖縄県史 第10巻 各論編9 沖縄戦記録2」沖縄県教育委員会 1974年
 外間愛子「津堅島要塞調査ノート」『具志川市史だより 第14号』 1999年

（証言者）

玉城盛輝さん
 根沖よし子さん

b. へんな じゅうみん ひなんごう 平安名の住民避難壕

所在地：勝連町字平安名320他

立地（標高）：丘陵（約30m）

形態：人工壕

種別：住民避難

現状：数ヵ所落盤している箇所がみられるが

比較的良好

保存状況：丘陵中に放置されている

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：住民避難壕

主な遺構：手掘りの壕、圍



概要

当壕は、珊瑚石灰岩を堀込んだ避難壕で、平安名の拝所五穀の宮北側丘陵の麓に所在する。沖縄戦当時は入り口が7ヵ所あったと思われるが、現在は落盤で埋没したりブロックで塞ぐなどしているため、入壕可能な入り口は3ヵ所である。壕内に入るとまず、4～10m²ほどの部屋があり、それぞれの部屋は奥の通路でつながっている。通路の奥に、さらに小さな部屋が構築されている箇所もある。ロウソクや、物を置くための棚も作られており、他地域で構築された住民避難壕と構造的によく似ている。



建物の裏に壕がある

平安名では、十・十空襲後に住民避難壕が構築されたと思われるが、当壕がいつごろ、誰の手によって構築されたかは不明である。当壕は、全体で幅約25m、奥行き約7mの広さを持ち、入り口が数ヵ所設けられているので、複数の世帯が避難したのではないかと考えられる。

1945年4月、米軍は沖縄本島へ上陸すると、4月3日には平安名のある勝連半島へ進出してきた。平安名の住民のなかには岡頭村奥へ疎開した者もいたが、その数は少なく、ほとんどが平安名に留まって壕や墓などに避難していた。米兵が住民を殺さないことがわかるとそれぞれの避難場所から部落へ戻ってきたという。



壕内部

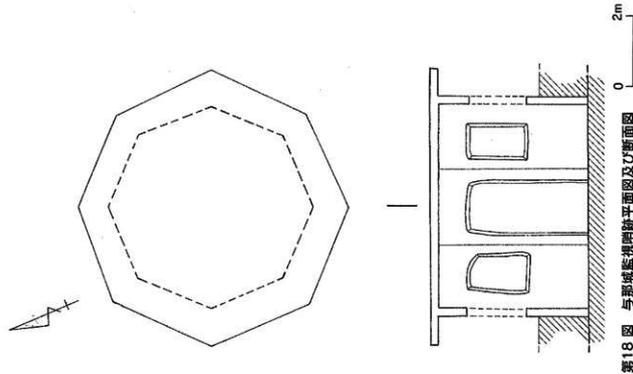
（参考文献）

沖縄県中頭郡勝連町字平安名字誌編纂委員会『平安名字誌』平安名区 1997年

第10節. 与那城町

a. 与那城監視哨跡

所在地：与那城町字屋敷名2683-1
 立地（標高）：丘陵頂上（約15m）
 形態：構築物
 種別：監視哨
 現状：多少損壊しているが、比較的良好な状態で残っている
 保存状況：原野に放置されている
 築造者：不明
 築造年月日：1943年頃
 戦時中の使用状況：不明
 主な遺構：監視哨1棟



概要

与那城監視哨は、与那城町屋敷名集落近くの丘陵頂上にある。正八角形のコンクリート製で、入り口がある壁以外の7つの壁面にはひとつずつ窓枠があり、360°を見渡せる構造になっている。外側は、窓枠から下の部分が土に埋もれている。また、壁面には沖縄戦当時銃撃を受けたときの弾痕が、今も残っている。



丘の頂上に監視哨がある

1943年当時、沖縄県内には11ヶ所の防空監視哨が設置されていた。（那覇、糸満、本部、金武、国頭、嘉手納、与那城、宮古、八重山、西表、久米島）与那城監視哨はこのうちの1つである。監視哨は航空機を早期に発見し、敵味方を区別して防空機関に知らせるための施設で、県警察部警防課の管轄下にあった。幹部には在郷軍人、監視隊員には青年学校生徒や泉の職員、会社員などがあてられ、1943年当時588人を数えた。

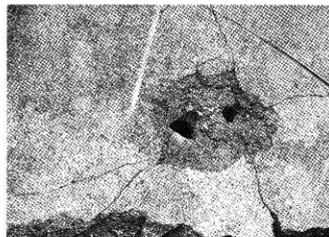
与那城監視哨で防空監視の任務に就いていた仲地和雄さんの証言によると、当監視哨が最初に出来たのは1938年頃で、その当時は雨戸を6枚立てただけの簡単な作りであったという。それが、1943年頃コンクリート製に立て替えられ、窓枠にはガラスがはめ込まれた。哨員は全部で31名であり、青年学校生徒を中心とした哨員が、6人1組で交代で監視した。1944年10月10日の空襲（十・十空襲）では、敵機米機を最初に発見したとして、当時の系沖縄県知事



与那城監視哨

から感謝状が贈られたそうである。当監視哨と監視隊本部との通信手段は通信電話で、壁面に今も残る穴は、このとき電話線を通したものだという。

現在、沖縄本島に残る監視哨で、ほぼ当時の形を残しているのは、この与那城監視哨と本部町谷茶の監視哨のみである。



監視哨に残る弾痕跡



監視哨から金武湾を望む

（参考文献）

沖縄県沖縄史料編纂所「沖縄県史料 近代1 昭和十八年知事事務引継書類」沖縄県教育委員会 1978年

（証言者）

仲地和雄さん

いげいじまたいほうじんちあと b. 伊計島大砲陣地跡

所在地：与那城町字伊計1035-1

立地（標高）：山林（約30m）

形態：構築物

種別：大砲陣地

現状：砲台は大半が土砂に埋没しているが、

現状は良いと思われる。交通壕等は、土砂に埋没しているため確認できない

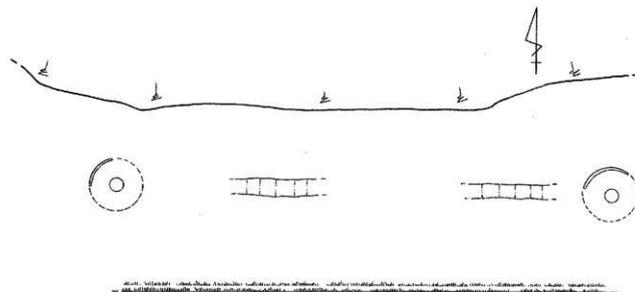
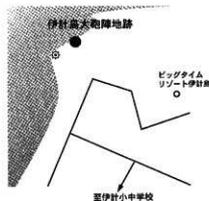
保存状況：灯台周辺の山林地域に放置されている

築造者：中城湾要塞砲兵連隊第1中隊（後の重砲兵第7連隊）

築造年月日：1941年

戦時中の使用状況：不明

主な遺構：砲座及び交通壕、弾薬置き場など
（交通壕、弾薬置き場は土砂の堆積により未確認）



第19図 伊計島大砲陣地跡平面遺構略図

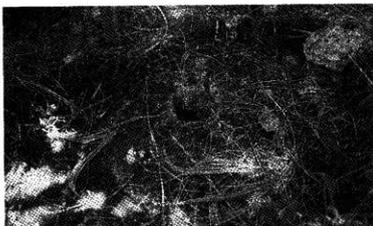
0 6m

概要

伊計島の大砲陣地は、与那城町字伊計地内のカラフバンタと呼ばれる崖の上に所在する。近海を眺望するのに適した場所である。現在では近傍に灯台が設置されている。

現在、当陣地跡には砲座が2基残存している。砲座は、コンクリート製で直径160cmの真円形をしており、中心には砲を据えるときに使用した直径10cmの穴が空いている。砲座の周りは、コンクリート製の外郭が取り囲んでいる。この外郭は、5mほど出上しているのみで、あとは地中に埋没している。出土している場所は、35～100cmほどの高さがあり、底の部分には排水口らしき穴が空いている。2基の砲座は60mほど離れており、その間には交通壕でつながっていたようである。交通壕の間には、一時弾薬を置いておくスペースなどがあったようである。しかし、交通壕や弾薬などを置いていたスペースなどは、現在、土砂が堆積しており確認できていない。

1922年、中城、符候、船浮への要塞建設の計画が作成される。1941年8月、中城臨時要塞建設が着工し、9月編成下令が行われた。1941年に伊計島に配備された部隊は、



砲座跡1



砲座跡2

約1ヵ月ほどで津堅島へ配備交換されている。このことから、伊計島に配備されていた部隊は、臨時要塞の重砲兵連隊第1中隊が津堅島へ派遣される前に配備され陣地構築を行っていたと思われる。重砲兵連隊第1中隊は、沖縄戦においては重砲兵第7連隊と改称し津堅島で戦闘を行っている。

当初は、伊計島の監視台を中心に数十名の日本兵がいたが、十・空襲前あたりからその大半が引き揚げた。伊計島へ米軍が上陸した時には、伊計島出身の防衛隊員しか残っていないようであった。

当陣地跡は、知念村のワロカー砲台跡などと、形態などが類似している。



砲座を取り囲む外郭



砲座とその回りの外郭

（参考文献）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「沖縄戦二ヶ於ル重砲兵第七連隊史実資料」第三十二軍残務整理部 1947年
防衛庁防衛研究所図書蔵「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
沖縄県教育委員会「沖縄県史 第10巻 各論編9 沖縄戦記録2」沖縄県教育委員会 1975年

（証言者）

伊礼栄三さん

第11節. 中城村

a. 161.8高地^{こうちしんち}障地

所在地：中城村字北上原195
 立地（標高）：山林（約156m）
 形態：構築物＋自然洞穴
 種別：トーチカ＋障地
 現状：機関銃障地と自然障の屋根部分が、風化により崩れかけている以外は概ね良好
 保存状況：山林内に放置されている
 築造者：不明
 築造年月日：1945年8月以降
 戦時中の使用状況：独立歩兵第14大隊の前哨障地
 主な遺構：トーチカ、障地障



概要

161.8高地障地は、字北上原の中央付近に位置する小高い琉球石灰岩丘陵の頂上部にあり、棚瀬・北谷・大城・相宇慶・南上原等の地域への見通しが良好である。アメリカ第10軍の諜報部（G-2）が作成した161.8高地障地の調査報告によると、4.5×4.5×2.4mの崩れた方形の空間に、幅約1mのコンクリート構造物で、銃眼を4つ備えた機関銃障地を構築していることが分かる。銃眼は、北東・北西・南東の3方に向けられ、出入口は南西側にある。北西部の銃眼は何らかの原因で屋根の一部と共に崩落して確認できない。



161.8高地のトーチカ

この障地は、石積みにコンクリートを塗り込む形で壁面を整形し、天井部分は鉄筋と材木で骨組みをなす造りになっている。さらに、この機関銃障地の直下にある自然障を利用した本部指揮所、周辺の障地障等から構成されている。

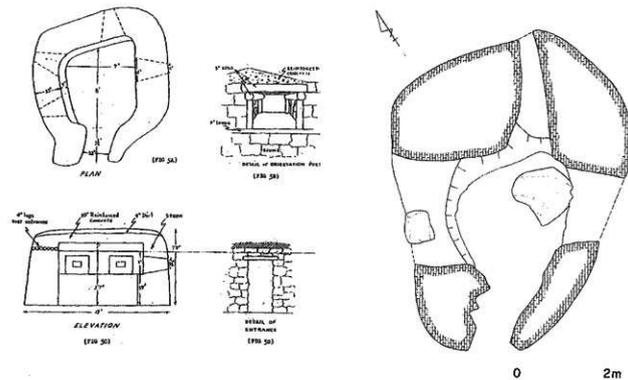
第62師団は、宇地泊一嘉敷一我如古一南上原一削宇慶を結ぶ線に軍司令部の障地を構築し、この一帯を米軍の南部進撃を防ぐ要衝にした。



トーチカ内部

この近郊に着任し、障地構築を行ったのは、第62師団独立歩兵第14大隊と思われるが、詳細は不明である。

1945年4月1日に北谷方面に米軍が上陸すると、北谷・読谷・胡屋・佐久川方面を守備していた賀谷支隊（独立歩兵第12大隊）は、4月2日から5日にかけて独立歩兵第14大隊の前哨障地であった161.8高地に後退してきた。そして5日には同地に進攻し



第20図 トーチカ平面図及び立面図
 [Intelligence Monograph, RESTRICTED RYUKYU CAMPAIGN G-2 TENTH ARMY, 15 JULY 1945] より

第21図 トーチカ平面遺構略図

できた米軍と激戦を展開し、6日に同支隊は幸地方面に撤退した。賀谷支隊の任務は、「中頭部内の警戒に任ずるとともに所在軍直部隊と協同し同方面の防備が厳重であるように敵を敗退させる」ことであった。このため、同支隊は中頭部の東部の最前線を転戦し、米軍の進撃の遅延に努めた。



トーチカ頂上から敵手納方向を望む



障地障

(参考文献)
 『Intelligence Monograph, RESTRICTED RYUKYU CAMPAIGN G-2 TENTH ARMY, 15 JULY 1945』
 『日本軍の戦術に関する論文II』（財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室蔵『日本軍の戦術に関する論文II』）所収

防衛庁防衛研究所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年
 中城村史編集委員会『中城村史 第4巻 戦争体験録』中城村役場 1990年

第12節. 北中城村

おおぐすく じゅうがん a. 大城の銃眼

所在地：北中城村字大城225
 立地（標高）：山林（約160m）
 形態：構築物
 種別：銃座
 現状：草木が生い茂っているが、残存状況は良好である
 保存状況：原野に放置されている
 築造者：不明
 築造年月日：不明
 戦争中の使用状況：不明
 主な遺構：銃眼



概要

県道146号線に沿って行き大城集落に入ると、左手に周辺地域の文化財案内板がある。ここより、給水タンクの見える丘へ登り、頂上より左手の大城御旗付近に大城の銃眼はある。この丘陵一帯は、大城グスクと呼ばれている。ここより、150mほど北西に国指定史跡の萩登貝塚、350mほど南東に国指定重要文化財の中村家住宅がある。

大城の銃眼は、石灰岩が突き出た2.5×3mの空間に3つの銃眼を配置している。方向はそれぞれほぼ北・東・西を向いている。東・西側の銃眼は、石灰岩を削り、コンクリートを用いて整形し、その周辺には石を積んでいる。北側の銃眼は、石灰岩を掘り込んでいる。北・西側の銃眼は、外側の口を20×40cmにし、内側の口は外側より広くとられている。一方、東側の銃眼は、内側が20×20cmに対し、外側は20×40cmに広がっている。また、この丘陵の裾には、陣地壕らしき遺構も確認できる。1944年8月、独立歩兵第23大隊が、「大隊ハ本部ヲ中頭部大城二位西シ普天岡北側高地東正面ニ對スル地区ノ防衛並ニ作戦ヲ準備ス」と記していることからみても、この丘陵を防衛陣地の一つとしたことが分かる。

1944年8月21日より独立歩兵第23大隊が駐留し、大城グスク周辺に機関銃陣地が構築された。同年12月6日に、独立歩兵第12大隊及び独立混成第44旅団にこの地区を移譲している。さらに、1945年1月に、独立混成第44旅団は知念半島へ移動した。この後は、中頭地域の広い範囲を独立歩兵第12大隊（賀谷支隊）と独立歩兵第14大隊が守備することとなった。

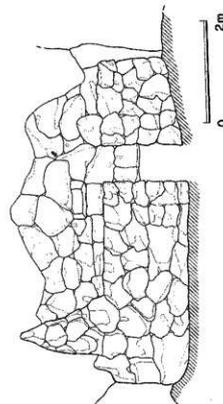
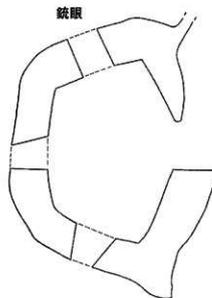
1945年4月1日に沖縄に上陸した米軍は、



大城の銃眼



北側、東側の銃眼



第22図 大城の銃眼平面図及び立面図



3日に島袋を制圧し、翌日には喜舎場・仲順を突破して東海岸に到達し、一隊は萩道から大城に転進してこの地に配備されていた独立歩兵第12大隊と対戦した。戦闘の状況についての詳細は不明である。



北側、西側の銃眼



T字形に整形された銃眼

（参考文献）

- 防衛庁防衛研究所図書館蔵「大陸歴史 独立歩兵第二十三大隊 独立歩兵第二十三大隊 1943～45年 防衛庁防衛研修所歴史室「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲新聞社 1968年
- 安里水太郎「北中城村史 北中城村役所 1970年
- 北中城村教育委員会社会教育課「北中城村文化財調査報告書 第1集 北中城村の文化財」北中城村教育委員会 1990年
- 沖縄国際大学文学部社会科学科石原研究室「近代～1991年度 北中城村戦災実態調査報告書」1992年

第13節. 読谷村

a. チビチリガマ

所在地：談谷村字波平1136-2他

立地（標高）：平地（約40m）

形態：自然洞穴

種別：住民避難

現状：土砂の流れ込みが多少あるが比較的良好

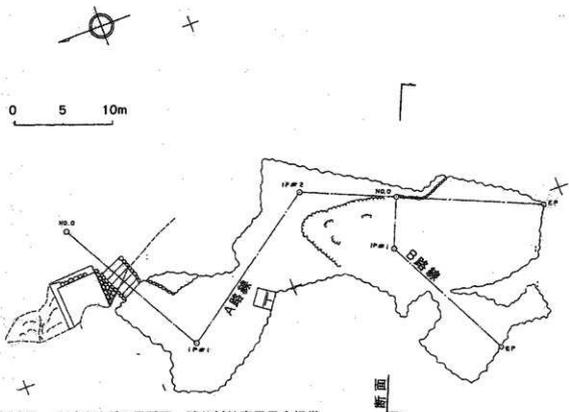
保存状況：「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」、石碑が設置してある。平和学習に利用されている

築造者：不明

築造年月日：不明

戦時中の使用状況：字波平住民の避難壕

主な遺構：煤の付着した壕内部の壁



第23図 チビチリガマ平面図 談谷村教育委員会提供

概要

嘉手納町方面から国道58号線を北上し、伊良智の交差点で県道6号線へ入る。県道6号線を進み、波平の信号機のある三叉路を左に入り、しばらく進むと右手にチビチリガマはある。

チビチリガマは、琉球石灰岩地層にある自然洞穴である。壕の全長は約50mあり、出入り可能な壕口は1ヵ所のみである。壕内は、3つの部屋を繋げたような形態をしている。チビチリガマは31所帯141名の字波平集落住民が、避難壕として利用していた。

波平住民は1944年の十・十空襲時に、このガマを避難壕として利用していた。米軍上陸前、チビチリガマに避難していた住民は、壕内で炊事をすると餓死になるため、家で炊事を行っていた。それ以後も、空襲の度にチビチリガマに避難するという生活を送っていた。避難していた住民は、1945年3月29日に日本兵によって壕を追い出されたが、その多くはまたこのガマに戻ってきている。

4月1日、チビチリガマにいた住民は、竹やりを持って米兵に攻撃を仕掛けた。しかし、米兵の反撃にあい、2名が重傷を負う事となる。その後住民は、壕の最奥部に隠れていた。2日、一度布団などに火をつ



壕口付近



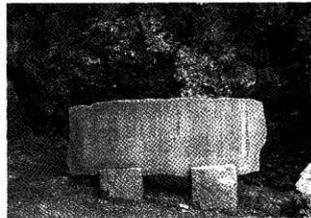
チビチリガマ世代を結ぶ平和の像

けて集団死を行おうとしたが、未遂に終わった。3日、再び米兵がチビチリガマへ入ってきたとき、一人の娘が母親の手により殺された。これを切っ掛けに、親戚に注射をして殺したり、布団に火をつけるなどした。壕内にいた住民の58名は外へ出て助かったが、83名が亡くなっている。

1947年に頭蓋骨が、その6、7年後に他の部分の遺骨が収集され、壕内に集められた。1987年、ガマの前に「チビチリガマ世代を結ぶ平和の像」と石碑が設置されたが、この時に現在壕内に設置されている納骨堂が造られた。現在、チビチリガマは平和学習に利用されている。



壕入り口



壕口付近に設置された石碑

(参考文献)

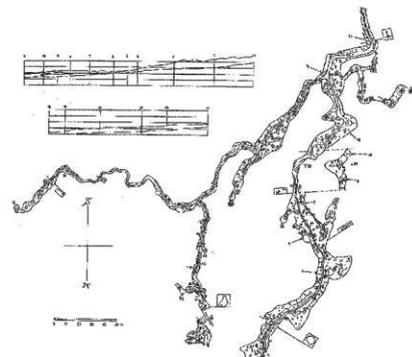
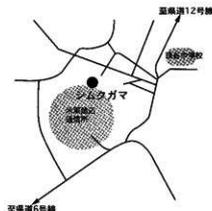
下嶋哲朗『南風の吹く日(沖縄談谷村集団自決)』竜心社 1984年

下嶋哲朗『チビチリガマの集団自決「神の国」の果てに』筑風社 2000年

談谷村史編集委員会『談谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録上巻』談谷村役場 2002年

b. シムクガマ

所在地：説谷村字波平655他
 立地（標高）：丘陵（約60m）
 形態：自然洞穴
 種別：住民避難
 現状：崩落等は少ない
 保存状況：記念碑を立てている。平和学習に
 利用されている
 築造者：不明
 築造年月日：不明
 戦時中の使用状況：住民避難壕
 主な遺構：埋土があるため詳細は不明



概要

国道58号線から国道12号線へ入り、そのまま進むと高志原の三叉路に出る。高志保三叉路の手前南側が波平の集落である。波平集落南側、米軍荒通通信所北側の畑の中にシムクガマの塚1がある。



塚入り口（内部から）

シムクガマは、琉球石灰岩層に形成された自然の洞穴である。洞穴内には水が流れ、洞まで続いているといわれるが確認できていない。洞穴はいくつかの支洞が1つになる形で南東方向に向かって続いている。現在確認されている範囲におけるシムクガマの総延長は2570mである。洞穴入り口には、波平公民館が主体となり「救命洞窟之碑」が設置されている。

説谷村は第50飛行場大隊が多くの住民を徴用し、沖縄北（説谷）飛行場を設営していた。1944年10月10日、十・十空襲において説谷村も米軍の空襲を受けることとなる。このときからシムクガマは字波平を中心とする住民の避難壕として利用されることとなった。10月10日の空襲において近傍の稲精工場に集積してあった日本軍の米が焼失した。シムクガマに隠れていた住民は、焼け残りの米を食料の一部として使用した。



塚内部（入り口付近）

米軍の沖縄本島上陸時、シムクガマには1200名の人が避難していたといわれており、塚口は木などを使い偽装していた。また、いざというときのために、一部の青年達が竹やりなどを準備していた。

4月1日、塚の入り口付近に砲弾が落ち、3名が亡くなった。同日午後4時頃、米兵が塚1付近に来たため、青年たちが竹やりを持って外に出ようとした。しかし、移民帰りの住民2人が、塚内の住民を説得し投降させた。

第24図 シムクガマ平面図 【沖縄県洞穴実態調査報告II】沖縄県教育委員会 1979年より

一部の住民はさらに奥に逃げたようであるが、死傷者を出すことはなかった。シムクガマにいた住民はその後、部屋に収容されている。



塚内部に残る遺物



塚内部につづく川

参考文献

説谷村波平公民館「救命洞窟之碑」建立記念」説谷村波平公民館 1995年
 沖縄タイムス社「シムクガマに救命洞窟之碑」沖縄タイムス1995年6月8日
 説谷村史編纂委員会「説谷村史 第5巻 資料編4 戦時記録上巻」説谷村役場 2002年

C. 座喜味の掩体壕群

所在地：読谷村字座喜味2943、2948（読谷補助飛行場内）

立地（標高）：畑（約70m）

形態：構築物

種別：掩体壕

現状：現在は3基残っている

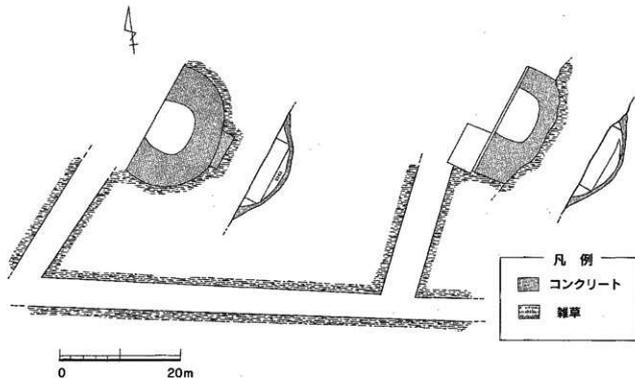
保存状況：1999年に1基破壊された。現存する掩体壕は、農機具置き場などとして利用されている。

築造者：第50飛行場大隊

築造年月日：1944年6月29日から掩体壕築造に力を入れ始めている

戦時中の使用状況：北（読谷）飛行場掩体壕

主な遺構：掩体壕



第25図 座喜味の掩体壕群平面図及び立面図

縄本島から築められた住民が担っていた。掩体壕の築造は、土を団子状に積みその上からコンクリートを流し、固まった段階で土を掘り出すという簡易な方法で行われていた。そのため現在でも掩体壕内壁には土と接していた面の形が模様のように残っている。また、掩体壕建設に必要な石や砂などは、読谷海岸などから築められ、その労働には国民学校の生徒も動員された。

1999年、民家の増築により1基壊され、現在残る掩体壕は3基となっている。現存する掩体壕は、農機具を入れる倉庫として利用されている。

概要

座喜味の掩体壕群は、読谷村役場北側、読谷補助飛行場周辺の畑の中に残っている。掩体壕は、正面から見ると高さ約4.6m、幅約20mの蹄蹄型をしている。掩体壕は現在、3基残っており、いずれも良好な状態である。

沖縄北（読谷）飛行場の建設工事は、1943年7月から陸軍航空本部経理部が主体となり、国場組が請け負い始められた。第32軍が創設された1944年3月段階での工事の進捗状況は、滑走路1本のみという状況であった。第32軍は4月25日から飛行場設置を第19航空地区司令部管轄に移し、航空本部管轄との2本立てで工事を進めた。

第32軍は、米軍のサイパンにおける飛行場攻撃の結果を教訓に、6月29日から誘導路、掩体、弾薬及び燃料集積所等の施設の設定に全力を傾ける方針を打ち出した。座喜味の掩体壕は、この時期から築造されたと考えられる。1945年1月3日の米軍の撮影した航空写真では現存する掩体壕を確認できる。北飛行場には、天井のない露露掩体と天井をつけ航空機を完全に蔽う特殊掩体があった。座喜味に残っている掩体壕は、特殊掩体の部類である。

掩体壕を含む飛行場設置の労働は、沖



掩体壕付近



掩体壕



掩体壕内壁



後方から見た掩体壕

（参考文献）

防衛庁防衛研究所図書館蔵「第50飛行場大隊陣中日誌」1944年6月1日～1944年6月30日

財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編纂室『沖縄戦研究II』沖縄県教育委員会 1999年

財団法人沖縄県文化振興会公文書管理部史料編纂室『沖縄県史ビジュアル版5 空から見た沖縄戦 沖縄戦前後の飛行場』沖縄県教育委員会 2000年

（証言者）

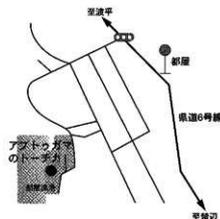
波平正康さん

曾根誠一

d. とや そべかいがんと 都屋・楚辺海岸沿いのトーチカ

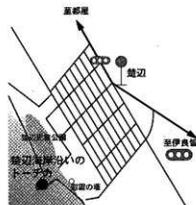
アプトウガマのトーチカ

所在地：読谷村字都屋463-1
 立地（標高）：海岸（約3m）
 形態：人工塚
 種類：トーチカ
 現状：坑道が道路造成により削り取られている
 保存状況：漁港内に放置されている
 築造者：不明
 築造年月日：不明
 戦時中の使用状況：読谷からの上陸に備える陣地
 主な遺構：銃眼



楚辺海岸沿いのトーチカ

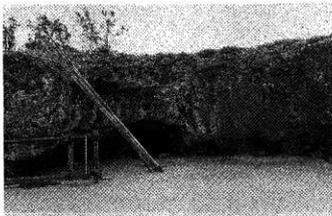
所在地：読谷村字楚辺1925-2
 立地（標高）：海岸（約5m）
 形態：自然洞穴及び人工塚
 種類：トーチカ
 現状：崩落もなく良好
 保存状況：海岸線に放置されている
 築造者：不明
 築造年月日：不明
 戦時中の使用状況：読谷からの上陸に備える陣地
 主な遺構：銃眼



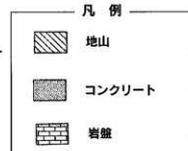
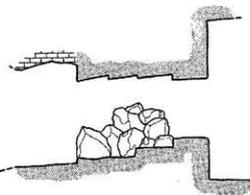
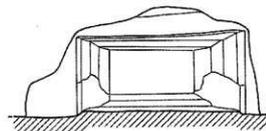
概要

アプトウガマのトーチカは、とよ そべかいがんと 都屋 漁港南端に所在する。このトーチカはアプトウガマとノッチガマを繋いで造られていた。現在のトーチカ跡は、道路の造成によりアプトウガマと切り離された形となっている。トーチカからは北西と南東の方向を見ることが出来る。

楚辺海岸沿いのトーチカは、楚辺の慰霊の塔から海岸に降り、北側の岸壁にある。このトーチカはノッチ状になった地形にコンクリートで壁を設け、中に空間を作っている。トーチカ内は、他のトーチカ等と異なり砲を置けるほどのスペースがある。



都屋漁港に残るトーチカ



第26図 アプトウガマのトーチカの鉄眼立面図及び見通し断面図

1944年8月以降、第24師団歩兵第22連隊は、沖繩中（嘉手納）飛行場を中心とする本島中部地区に陣地を構築していた。同年12月、歩兵第22連隊の一部が南部へ移動する前までは、都屋の海岸沿いに連隊砲陣地を構築している。アプトウガマのトーチカと楚辺海岸沿いのトーチカがこれにあたるかは不明であるが、日本軍は米軍の上陸地点の一つとしてこの海岸を想定し、米軍の行動を監視する陣地として構築したものと考えられる。

なお、1944年1月22日段階で、米軍は、都屋と楚辺にトーチカがあることを把握していた。



楚辺海岸沿いのトーチカ



楚辺海岸沿いのトーチカ内部

（参考文献）

古原利安『沖縄戦記 歩兵第二十...連隊の最後』（当文献は、嘉陽安雄氏が1962年6月より愛媛新聞に連載したものを収集し編集したものである）

防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦』朝雲新聞社 1968年

読谷村立歴史民俗資料館『読谷村立歴史民俗資料館紀要 第6号』読谷村教育委員会 1982年

読谷村役場総務部企画課『平和の炎 VOL.8 第8回読谷村平和創造展』読谷村役場 1995年

e. 比謝川沿いの特攻艇秘匿壕群

所在地：談谷村字渡具知、2、101-1、185、

字大湾498-1

立地（標高）：河岸（1～15m）

形態：人工壕

種別：秘匿壕

現状：上流部の壕は、崩落や埋土がある

保存状況：河川沿いに放置されている

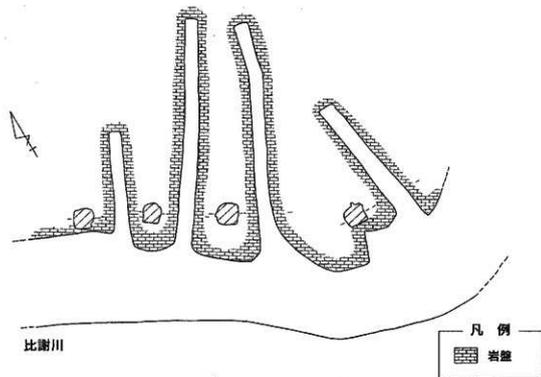
築造者：海上挺進基地第29大隊

築造年月日：1944年12月中旬から

戦時中の使用状況：海上挺進第29戦隊特攻

艇秘匿壕

主な遺構：特攻艇秘匿壕



第27図 渡具知の特攻艇秘匿壕群平面図

ある。また、朝鮮人軍夫が集落内で寝泊まりをしており、この軍夫たちは、秘匿壕への食料運搬などを行っていたようである。

海上挺進基地第29大隊は、1945年2月14日、第24師団と独立混成第44旅団の陸戦部隊へと改編された。また、海上挺進第29戦隊も、陸上部隊と行動を共にすることとなる。

概要

特攻艇秘匿壕は、比謝川河口部北側河岸と、比謝川と長田川との合流地点である長田川側河岸地域に所在する。比謝川河口部に所在する6つの壕は、岩盤を掘りこんであり比較的残りが良い。

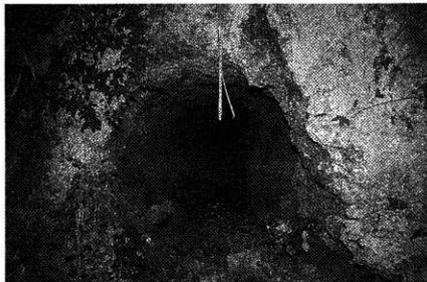
渡具知には、北谷一談谷海岸への米軍の上陸に対応するために、海上挺進基地第29大隊と海上挺進第29戦隊が配備されていたと思われる。海上挺進基地大隊が主に秘匿壕構築等を担当し、海上挺進戦隊が戦闘を担い、お互いは併置されていた。

まず、海上挺進基地第29大隊が、1944年12月中旬沖縄本島へ上陸する。比謝川沿いの秘匿壕もこの頃から構築され始めたと思われる。1945年2月上旬、海上挺進第29戦隊の一部が到着する。しかし、その他の部隊は、米軍の空爆により沖縄本島へ到達できず、奄美大島の阿蘇に駐屯することとなる。

特攻艇基地内には、地域住民は立ち入ることができなかったため、内部の詳細は分かっていない。しかし、渡具知の海岸線沿いにあった4、5軒の家が、秘匿壕構築のために立ち退きさせられたよう



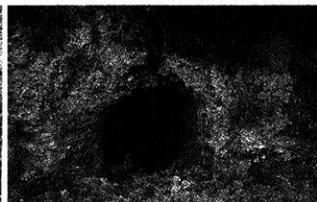
秘匿壕の残る丘



壕内部



掘られた堀入り口



堀口付近

参考文献

防衛庁防衛研究所図書室蔵「独立第二十九大隊陣中日誌」独立第二十九大隊 1945年
防衛庁防衛研究所図書室蔵「沖縄作戦二於ケル海上挺進第二十九戦隊史実資料」第三十二軍残務整理部 1947年
若潮会・戦史編集委員会『②の戦史—陸軍水上特攻—船舶特攻の記録—』紙坂弘 1971年

証言者

比嘉正夫さん
大湾利隆さん

第V章 調査の成果

第1節. 遺跡の分布状況と調査の問題点

2000年度～2001年度にかけて実施した、沖縄本島中部地区戦争遺跡詳細分布調査において確認した戦争遺跡は、181ヵ所であった。今回確認した戦争遺跡の大半が陣地及び避難用の壕であった。遺跡の市町村別の内訳は以下のとおりである。

市町村	遺跡数	市町村	遺跡数	市町村	遺跡数
石川市	4ヵ所	具志川市	13ヵ所	宜野湾市	55ヵ所
浦添市	32ヵ所	沖縄市	9ヵ所	与那城町	11ヵ所
勝連町	11ヵ所	西原町	9ヵ所	嘉手納町	7ヵ所
北谷町	8ヵ所	読谷村	11ヵ所	北中城村	7ヵ所
中城村	4ヵ所				

今回の調査で確認した遺跡数も南部地区同様、市町村においてかなりの差異がみられる結果となった。各市町村間の遺跡数の差異は分布地図（附図）をみることにより、明確に認められる。このような差が生じたことは、各市町村により遺跡数の差があることを示しているわけではあるが、更に戦争遺跡詳細分布調査の今日的な課題点としてあげられる問題である。

今回の調査においては、1999年度実施された各市町村史における沖縄戦編等の取り組みに関するアンケート結果をもとに、沖縄戦関係文庫の中にもみられる陣地や住民避難壕等に関する記述を抽出し、それを基礎資料とした。また、現地調査に際しては各市町村教育委員会文化財担当者をはじめとする多くの方々に協力を依頼した。

2000年度に行われた「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査（1）－南部編－」にもみられる結果であるが、今回の調査でも、市町村における遺跡の把握状況に大きく左右されることになった。つまり、調査人基礎資料としたデータ自体が、市町村史における沖縄戦編の刊行状況や、その中で戦争遺跡をどのように扱っていたかというところに大きな影響を受けたといえる。

今後、本島北部地区や周辺離島等へと進捗する本調査事業においても、基礎データの収集は大きな課題であり、調査計画の中で基礎データ収集は本島中南部地区以上に重点的に対応しなければならないと考ええる。

また、全面積の25.5%が米軍基地である中部地区において、基地内に所在する戦争遺跡を悉く調査することは、広大な調査地域、調査期間の制限、申請手続きの煩雑さ等により不可能であった。よって、当該市町村に所在する基地の中で、分布調査前に戦争遺跡が所在することが明らかであった嘉手納弾薬庫、嘉手納空軍基地についてのみ、戦争遺跡が所在する地区を中心に立ち入り調査を行った。今回調査した戦争遺跡については原野・雑草地等に所在しており、比較的良好な状況で保存されていたが、一般的に基地内の地表面の多くは、戦後撤入された造成より形成されており、大型重機を利用した基地建設のため、戦争遺跡が当時の状況のまま、残されているものはごく僅かである。

第2節. 地理、種別ごとにみる戦争遺跡の特徴

本島中部地区の西海岸沿いは、1944年9月以降、第32軍によって米軍上陸地点の1つと想定されていたため、米軍上陸を阻止するための陣地構築作業が行われた。読谷村教育委員会が全訳した、「沖縄群島－米太平洋艦隊・太平洋地区総司令部告知第53-45号」の日本陣地配置図によると北谷・読谷海岸沿いは小型トーチカや機関銃陣地のプロットにより、海岸線が覆われているように確認できる。特に読谷村渡見知北部から免迎にかけての海岸沿いは「ビーチ沿いの小銃砲台と機関銃陣地群」と米軍が記載するほど多く陣地が存在したことがわかっている。

しかし、この海岸沿いは現在、護岸工事や海浜埋立事業等で沖縄戦当時の海岸線が残る場所は少ない。今回の調査においても、読谷村・免迎海岸沿いのトーチカ（94頁）、「比謝川沿いの特攻艇秘蔵群」（96頁）、北谷町の「白比川沿いの特攻艇秘蔵群」（60頁）など数ヵ所しか確認できなかった。

同じ海岸沿いでも太平洋側である中城湾沿岸については、昨年度既刊した「－南部編－」の中の「吉岡陣地群」（－南部編－118頁）があるが、これが中城湾南端の戦争遺跡だとすると、北端であるのが、「伊計の大砲陣地群」（76頁）である。勝連半島の付け根にあたる具志川市の「川田の銃陣地群」（附図参照）も中城湾沿岸の防衛施設として戦争遺跡に引きあはれる。

また、分布調査後に所在が確認されたため、本報告書第IV章において掲載できなかった戦争遺跡として勝連町の「平屋屋の砲台群」があるが、砲座の規模や、立地条件が上述の「伊計の大砲陣地群」と類似しており、関連遺跡の可能性を有する。陸上自衛隊管轄の熟稔耕作地内にあるため立ち入りが少なく、知られざる戦争遺跡として今後の調査に期待と課題が残るものである。

沖縄本島において、米軍は1945年4月1日、北谷・読谷海岸に上陸した。それゆえ中部地区は、沿里に所在する第32軍司令部を目標す米軍と、それを阻止しようとする日本軍との間で激しい接近戦が展開された、いわゆる激戦地となった。

宜野湾市、浦添市、西原町、北中城村、中城村にみられる陣地の多くが、激しい戦闘が展開された地域に所在する。この地に構築された陣地壕の一般的特徴として、壕1附近には火炎放射の跡とみられる煤が多く付着していることがあげられる。また、壕坑道及び壕口前面部の地表面に砲弾の破片、及び構築に利用されたと思われる鏝・釘等の金属製品が確認できる。

この地域は琉球石灰岩の下に第3紀泥岩層（クチャ）が発達しているため、壕の構築が比較的容易であったと思われる。陣地壕の多くは落盤等を防止するための坑があったが、戦後の遺構もなく木や薪として利用されたため、木製品で地表面に存在するものはほとんど無い。よって、現在の遺構として坑や壕は確認できるが、壕内部を支える坑木自体が無いため、陣地壕を支える当時の状態では保存していく環境としては、良好であるといえます。壕が埋没する内因の大きな要素と思われる。

また、中部地区は、第32軍管下の陸軍飛行場が4ヵ所建設された地域である。その中で、陸軍北（読谷）飛行場と陸軍中（嘉手納）飛行場に附設した構造物として、それぞれ、読谷村の「喜座木の掩体壕群」（92頁）、沖縄市の「桜花の掩体壕群」（34頁）が所在する。沖縄本島において旧日本軍の掩体壕が残存するのは、これ以外に那覇市の航空自衛隊那覇基地内に確認されているのみであり、稀少な戦争遺跡といえるだろう。

住民避難壕に目を向けると、具志川市、石川市、読谷村及び中部西海岸地域はそれぞれ、琉球石灰岩層に属しているため、鍾乳洞が発達し、自然洞（ガマ）に多くの住民が避難していたことがわかる。具志川市の「喜神のマヤガマ」（附図参照）、石川市の「ヌチヌジガマ」（46頁）、読谷村の「チビチリガマ」（88頁）、「シムクガマ」（90頁）等があげられる。

これらの壕は、避難体験者に対してすでに市町村教育委員会等が開き取り調査を実施しており、当時の壕内部の利用状況は、陣地壕やトーチカ等の軍事関連施設と比べると明確であるといえる。いずれも歴史学習・平和教育等により「戦跡」として活用されている代表的な戦争遺跡である。しかし、その他の多くの住民避難壕は、文化財としての調査がなされないまま、放置されている現状であるということを併記したい。

第3節. おわりに

本島中部地区に限らず、全ての戦争遺跡に言えることであるが、文献資料や聞き取り調査のみならず、今後は分布調査で所在が判明した遺跡に対して、考古学的手法を用いた本調査によって遺跡の性格を把握し、より明らかにしていくことが必要になると思われる。そのためには、戦争遺跡を埋蔵文化財として取り扱うことができる基準がなくてはならず、地域の歴史を知りて欠くことの出来ない戦争遺跡については、発掘調査の対象とすることが可能となる基準が沖縄県として定められている。

埋蔵文化財発掘調査の取扱い基準については、戦争遺跡のみならず、例えば、当センター事業として実施されている「基地内埋蔵文化財分布調査」等にもみられる基地内の文化財をどこまで捉えるのかという新

しい課題でもある。

本報告書は、調査諸準備から報告書刊行までの期間が2ヵ年と短く、その期間の中で戦争遺跡の分布状況の成果を報告したため、諸開発事業により新たに発見された戦争遺跡や、逆に崩壊していった戦争遺跡についての補足が不十分であることを認識している。

しかし、本報告書の刊行により今まで顧みられなかった、文化財として重要な資料になりうる戦争遺跡が、多数身近に存在することを示すことができたと思う。

(参考文献)

防衛庁防衛研究所戦史室「戦史叢書 沖縄方面陸軍作戦」朝雲出版社 1968年

読谷村総務部企画課「平和の泉 Vol.8 読谷村平和創造展」読谷村 1995年

(財)沖縄県文化振興会公文書管理部史料編集室「概説 沖縄の歴史と文化」沖縄県教育委員会 2000年

沖縄県立埋蔵文化財センター「沖縄県戦争遺跡詳細分布調査—南部編—」沖縄県立埋蔵文化財センター 2001年

附編

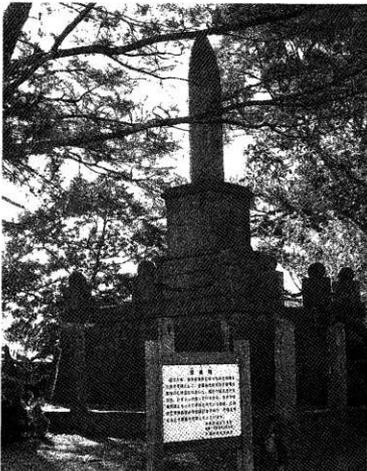
I. 記念碑

戦争記念碑とは、戦争に関連する事を記念し、後世に伝えるために建てた碑である。戦争記念碑には、戦後建立された「慰霊の塔」も含まれるが、ここでは戦前に建立された忠魂碑、征露記念碑、御大典記念碑（1915年の大正天皇即位と1928年の昭和天皇即位の2回ある）、皇太后御誕生記念碑、皇族米沖記念碑、皇紀二千六百年記念碑などをあげる。これらの記念碑は全国的に建立されていて、沖縄も例外ではなかった。

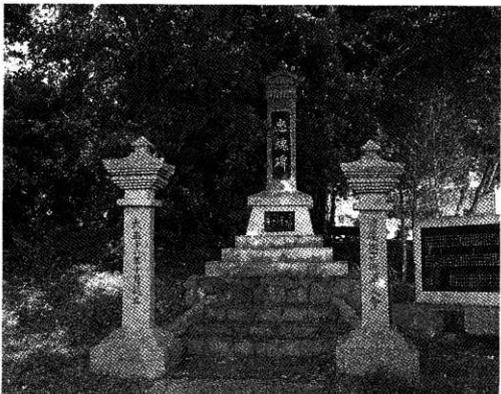
なかでも忠魂碑は、戦前、1市町村に1基建立されたが、そのほとんどが戦後すぐに破壊された。沖縄の忠魂碑も破壊や改修を免れなかったが、現存するものも少なくない。本島には大宜味村（改修）・羽地村・本部村・金武村・具志川村・読谷山村・美里村・中城村・首里市・佐敷村、離島には渡嘉敷村・座間味村、宮古には平良町・城辺村・下地村・伊良部村、八重山には石垣村・大浜村・竹富村が建立した計19基の忠魂碑が現存している。市町村とは別に字で建立した忠魂碑も国頭村奥・読谷山村渡慶次・勝運村平安座に現存している。

忠魂碑の建立は日露戦争後にはじまった。沖縄では大正～昭和期に集中している。もっとも古いのが佐敷村の1913年（大正2）、新しいのが座間味村1941年（昭和16）である。

本島中部の忠魂碑を古い順に並べると、読谷山村渡慶次（1913年）、中城村（1915年）、具志川村（1917年）、美里村（1937年）、勝運村平安座（1937年）となっている。建立が早い忠魂碑は自然石の碑石に「忠魂碑」と刻まれた素朴なものが多いが、新しくなると砲弾形のコンクリート製碑石、階段付き基壇、☆印と規模も大きくなり荘重なつくりとなっている。



美里の忠魂碑



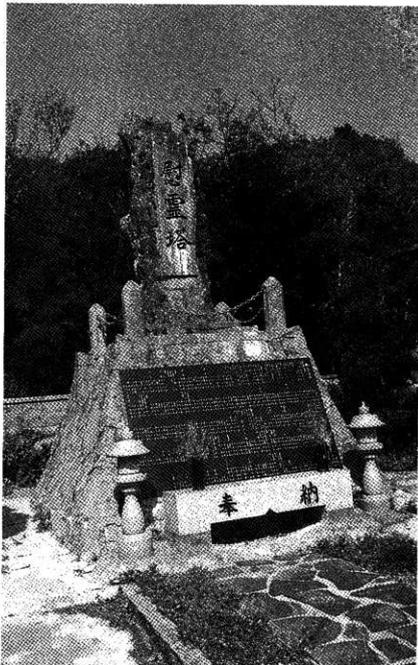
渡慶次の忠魂碑（改修されている）

また、揮毫者も陸軍大將鈴木莊六や陸軍大將井上幾太郎（いずれも帝国在郷軍人会会長）となっており、建立者が村の在郷軍人会であることから、建立に際しては組織的な取り組みをしたにちがいない。

忠魂碑は、学校や役場の敷地内、公共の場所に建立され、陸軍記念日など地域住民を募集させ、国威発揚・忠君愛国思想を鼓吹する役割を担わされた。

注①：読谷山村の忠魂碑は建立年不明であるが、陸軍大將鈴木莊六が揮毫者であることから、1932年～1936年に建立されたと推定する。

注②：市町村名は戦前のものを用い、字名は現在のものを使用した。



平安座の忠魂碑（慰霊塔として再利用されている）

II. 米軍基地立ち入り調査の手續き

沖縄本島中部地区を調査対象とする、2000年度・2001年度の戦争遺跡詳細分布調査において、米軍基地内の調査は、嘉手納弾薬庫、嘉手納空軍基地と順次行ってきた。

一般的に基地内の戦争遺跡は、原野・雑草地等においては手がつけられていないため、比較的良好な状態で残っている場合が多い。しかし、軍事基地ゆえに容易に立ち入り調査出来ないということも現実である。

基地内の文化財調査では立ち入り申請が必要であるが、その際の申請手続きは、不慣れな英文様式のため、煩雑な事務処理を要するものと考えられている。

よって本編では、申請経過及び申請に必要な事項を掲載することとする。各項目の日本語の下段に英文を付した。英文は実際の立ち入り申請書を参考に執筆者が記した。なお、各基地により申請形態に多少の相違があることを申し添える。

申請経過

右記①「立ち入り申請依頼」から④「立ち入り申請許可」まで、事務処理に約2週間を要した。文書を基地内に郵送すると1度米本国まで渡るため多大な時間を要する。よって、基地内渉外担当部に連絡をとり、直接文書を手渡すのが最も早い方法である。

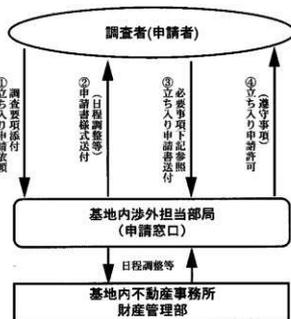


図 立ち入り申請経過

申請に必要な事項

1. 立ち入り施設区域名

Name of facilities and areas to be visited ;

2. 立ち入り日付と時間

Date and anticipated duration of the proposed visit(s) ;

3. 立ち入りの目的

Purpose of the visit ;

4. 立ち入り者

Visitor(s) ;

5. 報道関係者

※報道関係者の有無

Media representative(s) ;

6. 立ち入り先に於いて、写真、ビデオ撮影、測量、検査、採集、記録等を行いますか。

※この事項の申請を未記入のまま、上記に記載の行為があった場合、取捨した記録、機具等は没収の対象になる。(英文省略)

7. 立ち入り先の場所の地図を申請書に添付して下さい。立ち入り場所が特定出来るような地図を作成して下さい。又、立ち入り先への道順、および停止する場所も記入して下さい。(英文省略)

8. 申請者側の連絡調整者

Point of contact for the visit :

氏名 Name	職業 Occupation	電話番号 Phone Number
------------	------------------	----------------------

上記の事項と重複するものがあるが、申請書の他に下記に記した資料及び書類を提出することを求められる。

- ①. Name List
名簿
- ②. Survey Sights Map
分布地図
- ③. Driving License
運転免許証
- ④. Automobile Insurance Certificate
自動車保険証明書
- ⑤. Automobile Inspection Certificate
自動車検査証

尚、本編は1日限りの表面踏査を主体とする分布調査に係る申請について記述した。基地内担当職員のエスコート(立会)が必要なため、立会者の多大な協力をもって成立するものである。又、20名以上の立ち入り者は認められていない。

発掘調査に係る文化財の取り扱い及び立ち入り申請については、「基地内文化財—宜野湾市所在米軍基地内埋蔵文化財分布調査概要—」(沖縄県教育委員会 1998年)を参照されたい。

索引

あ
青柳中佐 30, 34
安瀬川 12, 19
奄美大島 (阿鉄) 60, 96
新川グスク 70
い
伊計島 40, 41, 76, 77
石垣村 102
石川学園 47
泉沖繩県知事 74
157高地 20
142高地 51
井上幾太郎 32, 102
伊波 46
伊良部村 102
伊良皆 88
う
ウカマジー 56, 57
宇地泊 11, 80
内間 (浦添市) 54
内間 (西原町) 12, 19
浦添城跡 5, 18, 20, 121
運玉養 11, 12, 18
え
栄野比 48
掩体壕 32, 34, 92, 93
お
桜花 34
大宜味村 102
大城 80, 84, 85
大田 38, 40, 41
大浜村 102
萩堂 84
沖縄北 (読谷) 飛行場 10, 30, 90, 92
沖縄中 (嘉手納) 飛行場 10, 11
沖縄方面根拠地隊 38
翁長国民学校 50
小祿 11, 12, 26, 65
か
海軍女子挺身隊 57
海軍砲台 56, 57
海上挺進基地第29大隊 60, 96, 97
海上挺進第25戦隊 60
海上挺進第27戦隊 60
海上挺進第28戦隊 60

海上挺進第29戦隊 60, 96
火炎放射器 42, 71
嘉数 (嘉数高地、嘉数高台も含む) 11, 12, 20, 24, 25, 26, 80
勝山 19
勝連半島 11, 40, 71, 72
嘉手納 46, 47
嘉手納空軍基地 (嘉手納基地、嘉手納飛行場も含む) 7, 8, 34, 35, 56, 104
嘉手納弾薬庫 7, 30, 64, 66, 104
我如古 11, 26, 80
加農砲陣地 70
カラフバンタ 76
狩俣 70, 76
監視隊 40, 41, 61, 75
観測所 (観測所壕) 26, 50, 56
カンバン塚 18
き
機関銃陣地 70, 80, 84
喜舎場 85
北上原 11, 80
北玉国民学校 60, 61
キャンプズケラン 8
キャンプヘーグ 32
喜友名 56
経塚 19
金武 10, 74
金武村 102
金武湾 30, 38, 40, 41
く
具志川 4, 10, 12, 38, 39, 40, 41, 42
具志川運動公園 38
具志川城址 42
具志川村 7, 102
グタクンニー 61
城辺村 102
久得 11, 64, 65, 66, 68
国頭村奥 72, 102
クホウグスク 70
公方倉敷の拝所 30
倉敷 30
け
警防河 (警防团长 警防団員) 42
慶良間 60

県警防課 (県警察本部防課) 61, 74
こ
皇紀二千六百年記念碑 102
皇族来沖記念碑 102
皇太子御誕生記念碑 102
幸地 11, 12, 18, 80
交通壕 30, 76
国民学校 60, 61, 93
御真影 (御真影開扉) 32
御大典記念碑 102
国歌奉唱 32
小波津 11, 12, 52, 53
胡屋 80
さ
在郷軍人 (在郷軍人会) 32, 61, 74, 103
座喜味 5, 34, 92
佐久川 80
佐敷村 102
座間味村 102
珊瑚石灰岩 72
山砲 26
し
指揮所 40, 80
島袋 11, 85
下地村 102
下勢頭 57, 61
銃眼 24, 40, 80, 84, 94
15cm海軍砲 38, 40, 41
15.5cm砲 38, 56
十・十空襲 10, 30, 52, 72, 74, 88, 90
重砲兵第7連隊 70, 76, 77
重砲兵連隊第1中隊 10, 77
首里市 102
首里城 6
首里戦線 11
手榴弾 42, 57
首里 6, 11, 12, 13
女子青年団 57
白比川 60
シリ山 (五穀の首) 72
す
鈴木荘六 102
せ
青年学校生徒 61, 74
征露記念碑 102
斥候兵 70
戦車穴 56
戦車止め 56

そ
速射砲 26
楚南 48
楚辺 13, 66, 94, 95
楚辺通信所 90
た
第9師団 10, 11, 26, 30, 39, 48, 68
第50飛行場大隊 90, 92
第32軍 10, 13, 18, 20, 68, 92
第19航空地区司令部 30, 34, 92
対戦車壕 70
台南精糖株式会社 68
第24師団 10, 11, 12, 18, 20, 21, 30, 39, 42, 48, 51, 68, 95, 97
第44飛行場大隊 34
第62師団 10, 11, 12, 18, 20, 21, 24, 25, 39, 50, 56, 80
高志保 90
沢紙 12, 19, 20
竹富村 102
蛸壺 30
棚原 11, 20, 50, 51, 80
棚原グスク 50
谷茶 75
弾薬庫 38
ち
知念 7, 12
知念半島 11, 41, 84
知念岬 11
知花 4, 32
北谷 6, 8, 11, 12, 56, 60, 80
北谷村 7, 8
忠魂碑 31, 102
仲順 85
勅語奉読 32
つ
通信所 48
津堅島 11, 41, 70, 71, 77
津堅地区隊 70
て
天願 4, 43
天願川 43
と
トゥクガワジー 61
桃原 5, 8, 11, 13, 18, 57
トーチカ 24, 40, 80, 94, 95
渡嘉敷村 102
特設第1連隊 11, 30

遊貝知 96
独立混成第15連隊 12、68
独立混成第44旅団 10、11、12、68、70、
84、97
独立混成第63旅団 18、20
独立重砲兵第100大隊 53
独立速射砲第22大隊 26
独立迫撃第9中隊 26
渡康次 102
特攻艇 60、96
特攻艇秘匿壕 60、96
都屋 91、94、95

な
中城 6、70、76、85
中城城跡 5
中城村 7、13、102
中城湾 4、11、40、41
中城湾要塞 10、70、76
長田川 96
仲間 11、12、20、25
那覇港 6、11、12、43、48、74、93
波平 5、88、90

に
西原 6、10、11、20、25、27
西原国民学校 52
西原村 7、11、50、54

は
拝賀 32
迫撃砲 26
白兵戦 51
羽地村 102
浜川 56、61
ひ
東恩納 46、48
比謝川 68、96
比良川 26
平良町 102

ふ
普天間基地 24
船浮 10、70、76

へ
兵員壕 18
米第96師団第382連隊 26
米第10軍 35、38、40、80
米第12海兵連隊 32
米第7步兵師団 34
平安座 7、102
平安名 72

ほ
奉安殿 32、33
防衛隊 (防衛隊員) 60、77
砲座 38、39、56、76
砲台 11、38、40、41、56、57、76
歩兵第32連隊 18、21、51
歩兵第22連隊 11、25、48、51、52、64、95

ま
前出高地 12、20
前田 11、12、18、19、20、25
牧原 68、96
み
美里 6、32
美里国民学校 (美里尋常小学校) 32
美里村 7、32、102
みどり町 38
港川 60
雨上原 11、80
民間防空監視哨 (防空監視哨) 61、74
も
本部村 102

や
役場壕 54
屋敷名 74
野戦重砲陣地 52、53
野砲陣地 70
山城 46、47
屋良 66、68
よ
読谷山村 7、102
与那原 6、60
読谷 6、5、10、11、12、30、46、66、
68、80、93、94、95、96
読谷海岸 93
読谷飛行場 (読谷補助飛行場) 9、10

り
陸軍航空本部 10、92
琉球石灰岩 4、46、50、80、88、90
糧食壕 18
輪番制 25
れ
連隊砲陣地 95

わ
和字慶 11、80



沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書第12集

沖縄県戦争遺跡詳細分布調査 (II)

— 中部編 —

平成14年3月29日

発行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編集 沖縄県立埋蔵文化財センター

〒903-0125 中頭郡西原町字上原193-7

TEL098 (835) 8751~8752

印刷 株式会社 城野印刷所 沖縄営業所

〒900-0034 那覇市東町24-7

ライオンズマンション東町205号

TEL098 (868) 3023

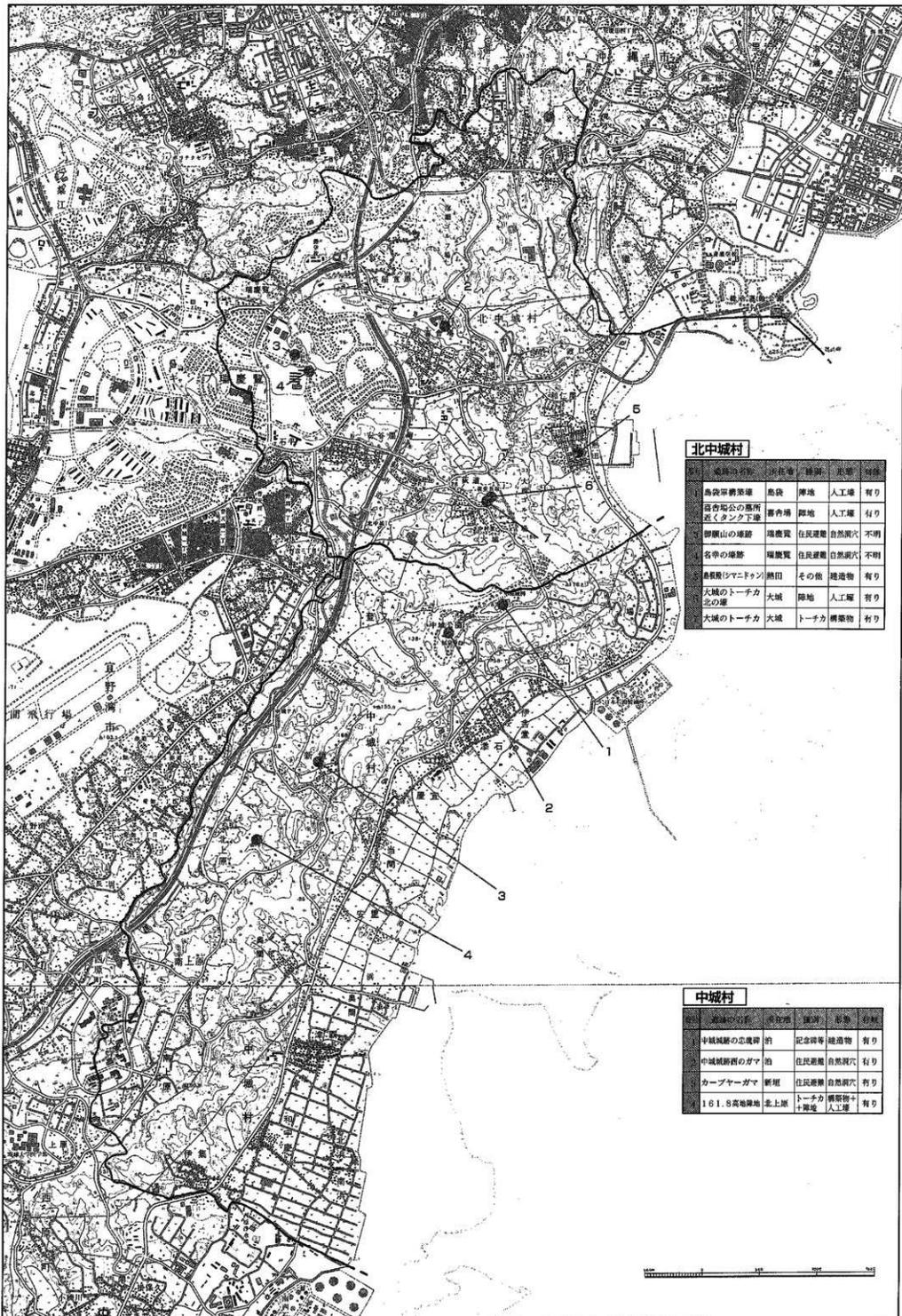
浦添市地形図

浦添市

遺跡の名称	所在地	種別	文化	状況
牧港ナラブのガマ	牧港	住居遺跡	自然洞穴	有り
チチアチャーガマ	牧港	住居遺跡	自然洞穴	有り
ウマツガマ	港川	住居遺跡	自然洞穴	不明
城間遺跡	城間	住居遺跡	自然洞穴	不明
城間の塚	城間	不明	人工塚	不明
21大隊第3中隊の塚	伊祖	陣地	人工塚	有り
伊祖公園の陣地跡	伊祖	陣地	人工塚	有り
伊祖のトーチカ遺跡	伊祖	トーチカ	構築物	有り
轟毅の病院跡	当山	陣地	人工(一部自然)	有り
浦添元公園内の陣地跡	仲間	陣地	人工(一部自然)	有り
ナカマンデイル	仲間	不明	人工(一部自然)	不明
仲間の塚	仲間	不明	人工塚	不明
神員の住居遺跡(堀ノマノクサト、656の塚)	仲間	住居遺跡	人工(一部自然)	有り
デークガマ	仲間	住居遺跡	人工(一部自然)	有り
仲間の住居遺跡	仲間	住居遺跡	人工(一部自然)	不明
仲間地区の陣地跡	仲間	陣地	人工塚	有り
新川崎地蔵群	前田	陣地	人工塚	有り
浦添市立南浦添南小学校跡(花ノ塚)	前田	陣地	人工塚	有り
浦添市立南浦添南小学校跡群(鹿ノ島、長島)	前田	陣地	人工塚	有り
前田の陣地跡	前田	陣地	人工塚	不明
真知堂塚	前田	陣地	人工塚	不明
経塚の陣地跡	経塚	不明	人工塚	不明
経塚の塚	経塚	陣地	人工塚	有り
津マタ原の塚群	安波茶	住居遺跡	人工塚	有り
安波茶塚群	安波茶	陣地	人工塚	有り
安波茶塚群(十四大塚、本郷跡地区)の塚	安波茶	陣地	人工塚	有り
浦添市立南浦添南小学校跡群(鹿ノ島、長島)の塚	その他	構築物	有り	有り
沢城の陣地跡	沢城	陣地	人工塚	不明
クビリ川の塚	沢城	陣地	人工塚	有り
宮崎のナイフタガマ	宮崎	陣地	人工(一部自然)	有り
勢理客の塚	勢理客	不明	人工塚	不明
カンジャーガマ	内間	不明	人工(一部自然)	有り



北中城村・中城村地形図

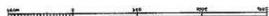


北中城村

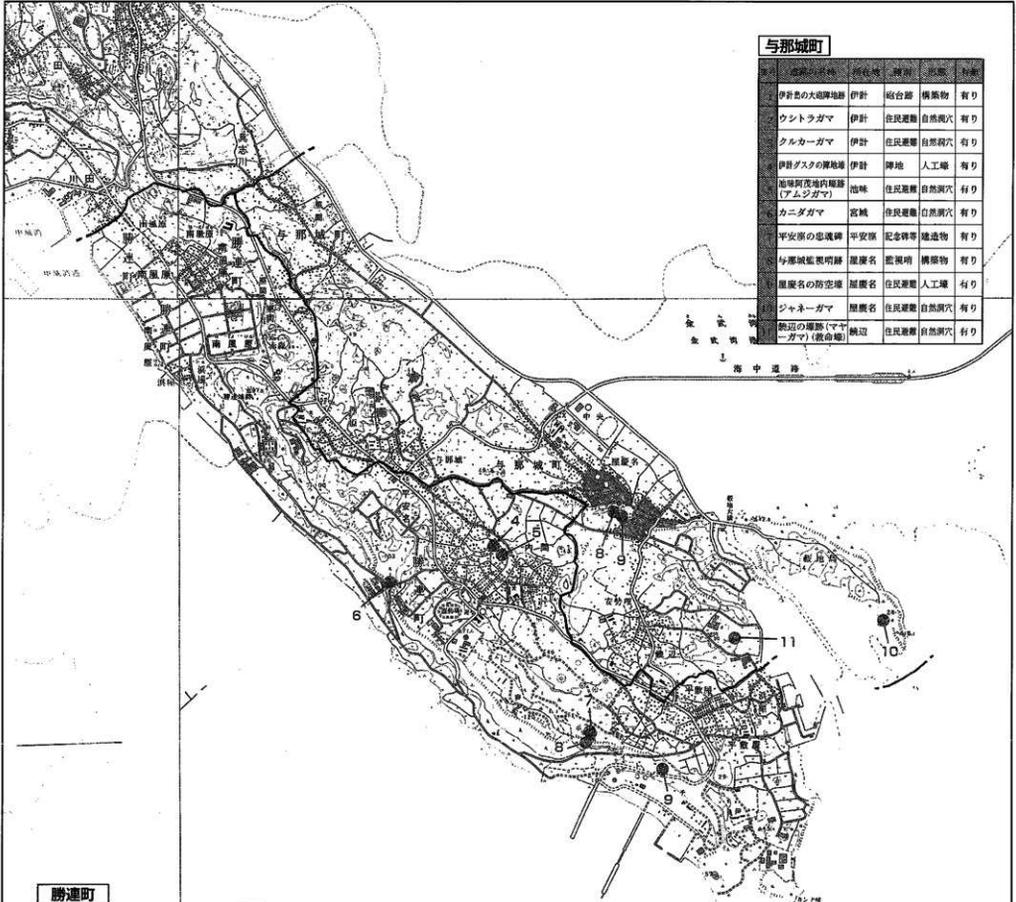
名称	所在地	種類	形状	特徴
高森中城築城	高森	陣地	人工	有り
高森砲台の墓所 高森タンク下庫	高森	陣地	人工	有り
御旗山の陣跡	陣跡	住民遺構	自然	不明
名幸の陣跡	陣跡	住民遺構	自然	不明
高森陣跡(ヤニドク)	陣跡	その他	建造物	有り
大城のトーチカ 北の壁	大城	陣地	人工	有り
大城のトーチカ	大城	トーチカ	構築物	有り

中城村

名称	所在地	種類	形状	特徴
中城陣跡の忠魂碑	陣跡	記念碑等	建造物	有り
中城陣跡西のガヤ	陣跡	住民遺構	自然	有り
カーブヤーマ	陣跡	住民遺構	自然	有り
161.8高地陣跡	北土原	トーチカ 構築物+ 陣地	人工	有り

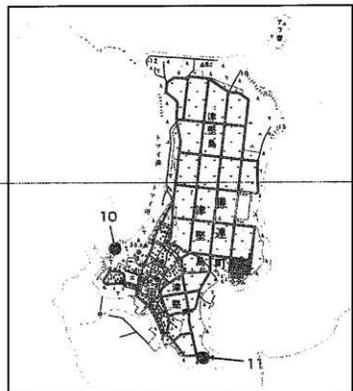


与那城町・勝連町地形図



名称	中心名	種別	状況
伊計色の大迫跡	伊計	砲台跡	構築物 有り
ウントラガマ	伊計	住民避難	自然洞穴 有り
クルカーガマ	伊計	住民避難	自然洞穴 有り
伊計グスタの跡	伊計	陣地	人工堀 有り
池津尻茂地内堀跡 (アマジガマ)	池津	住民避難	自然洞穴 有り
カニダガマ	宮城	住民避難	自然洞穴 有り
平安原の忠魂碑	平安原	記念碑等	建造物 有り
与那城城裏明跡	与那城	遺跡	構築物 有り
与那城の防空壕	与那城	住民避難	人工堀 有り
ジャネーガマ	与那城	住民避難	自然洞穴 有り
勝連の堀跡 (アマガマ)	勝連	住民避難	自然洞穴 有り

名称	中心名	種別	状況
前比嘉ウシトラガマ	比嘉	住民避難	自然洞穴 有り
ミーハンチーガマ	比嘉	住民避難	自然洞穴 有り
吉本家の跡	比嘉	その他	建造物 有り
勝連役場の跡	平安原	建物・行政関係	人工堀 不明
平安原の住民避難壕	平安原	住民避難	人工堀 有り
比嘉ワイトイの跡	平安原	住民避難	人工堀 有り
ヒージャーガマ	平安原	住民避難	自然洞穴 有り
平安原の砲台跡	平安原	砲台跡	構築物 有り
平安原の製糖工場跡	平安原	その他	建造物 有り
勝連島のオウラスチーの跡	津堅	陣地	人工堀・自然堀 有り
勝連町津堅の砲台跡	津堅	交通関係	建造物 有り



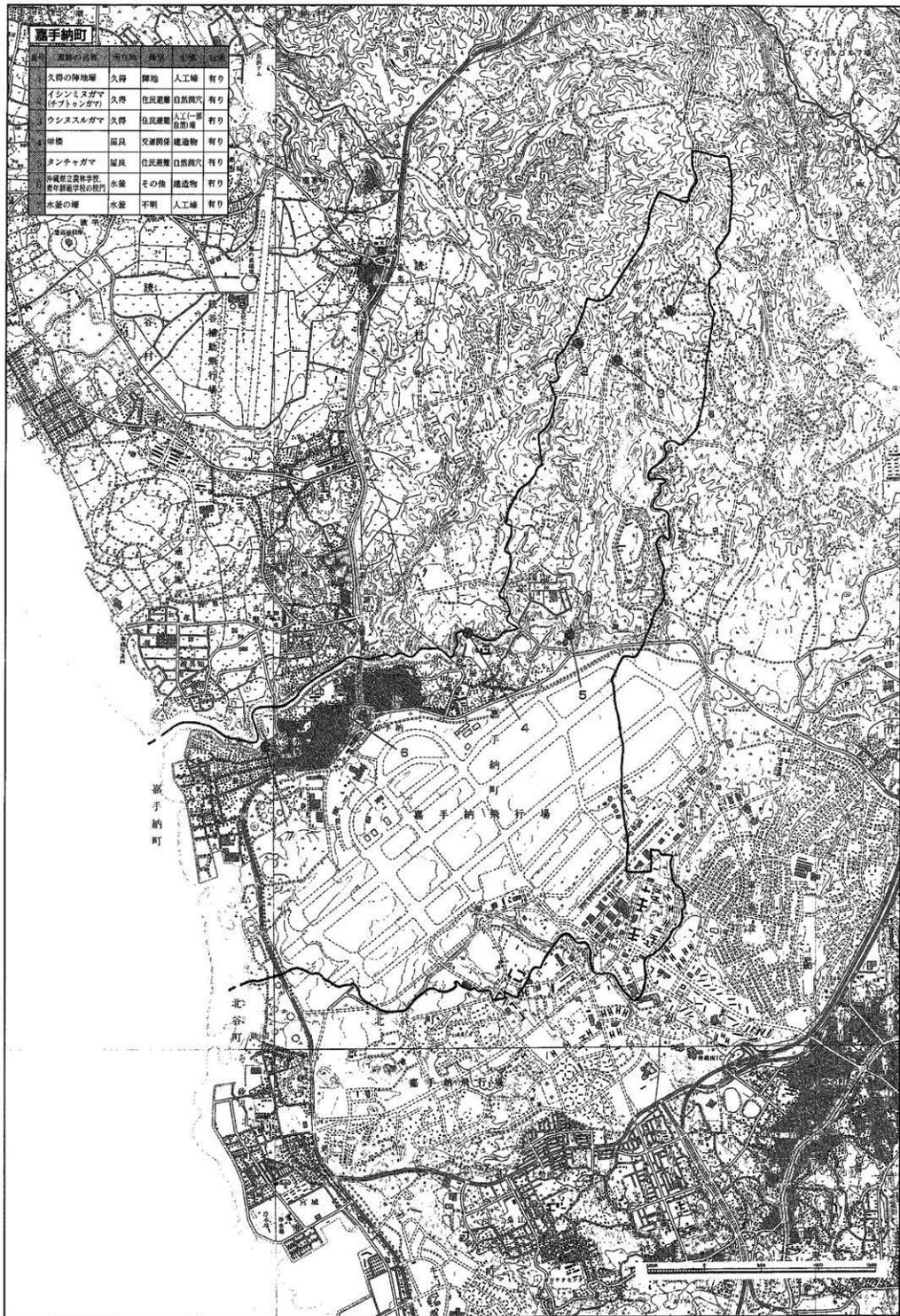
中
城
海
道



与那城町・勝連町地形図



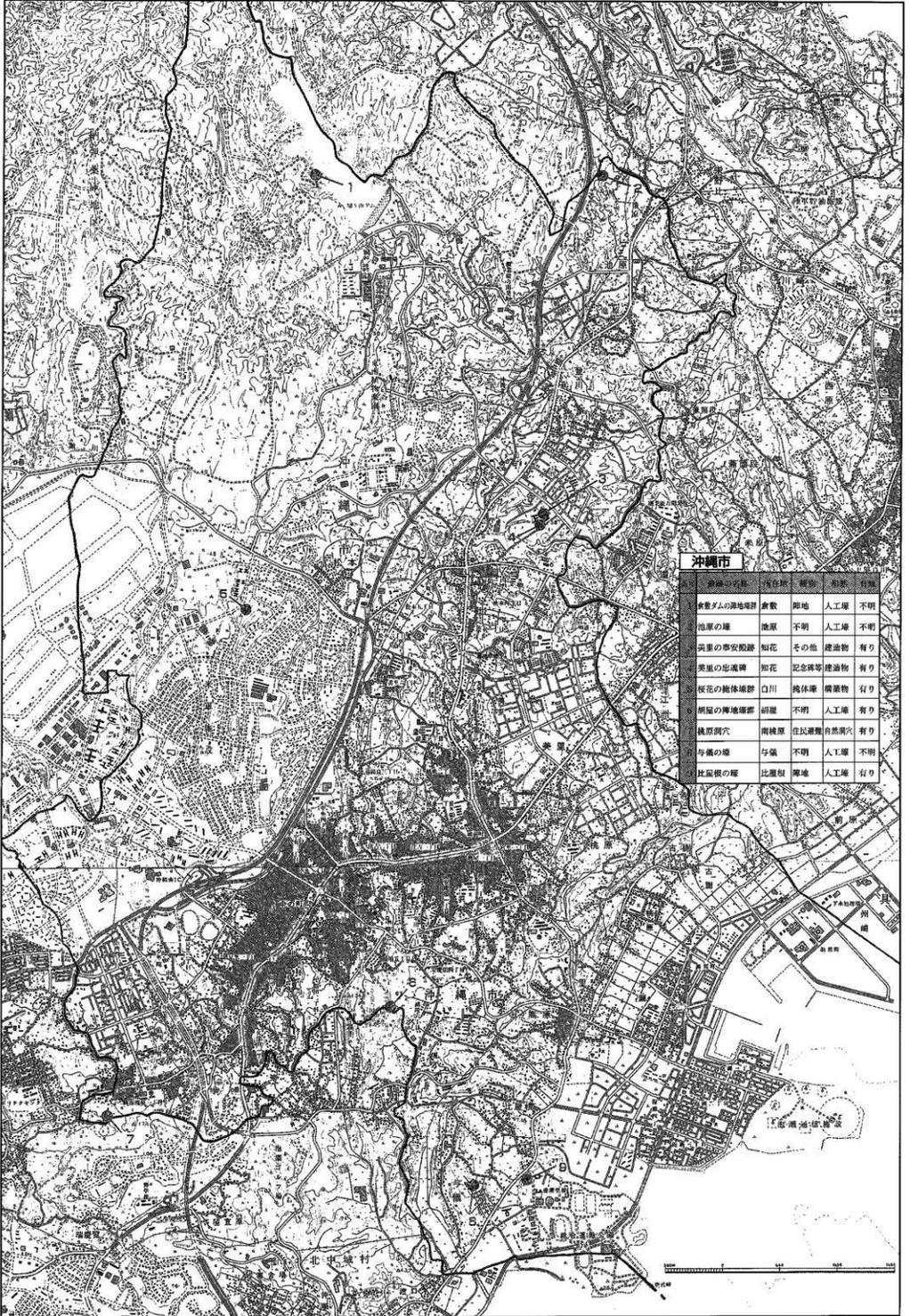
嘉手納町地形図



北谷町・宜野湾市地形図

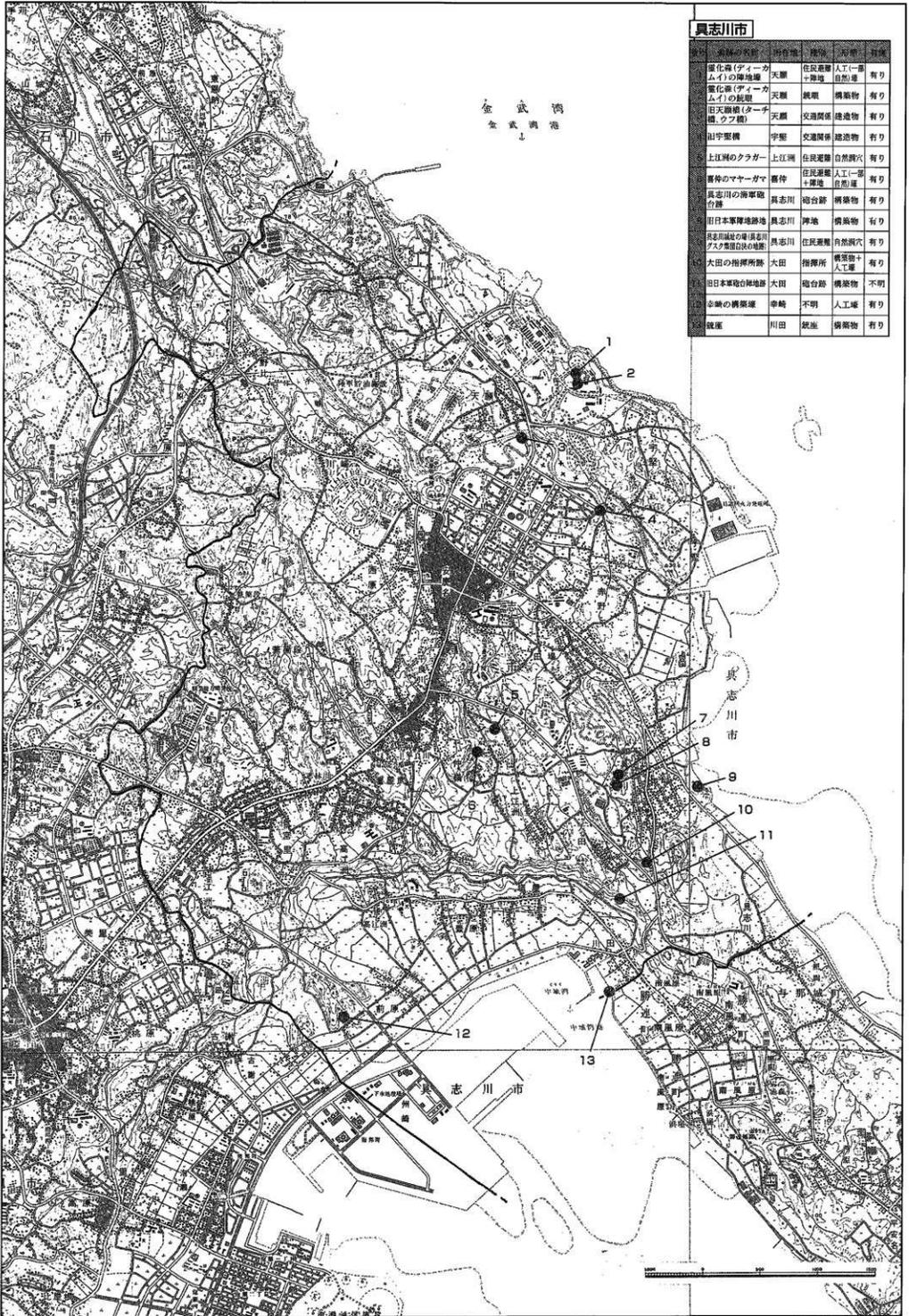


沖縄市地形図



沖縄市					
名称	所在地	種別	由来	有無	備考
新里の跡	新里	跡地	人工	不明	
池原の跡	池原	不明	人工	不明	
共里の帯安殿跡	知花	その他	建造物	有り	
美里の忠誠碑	知花	記念碑等	建造物	有り	
桜花の胸体塚跡	白川	胸体塚	構築物	有り	
朝霞の胸体塚跡	朝霞	不明	人工	有り	
鏡原洞穴	鏡原	自然	洞穴	有り	
与儀の跡	与儀	不明	人工	不明	
辻原の跡	辻原	築城	人工	有り	

具志川市地形図



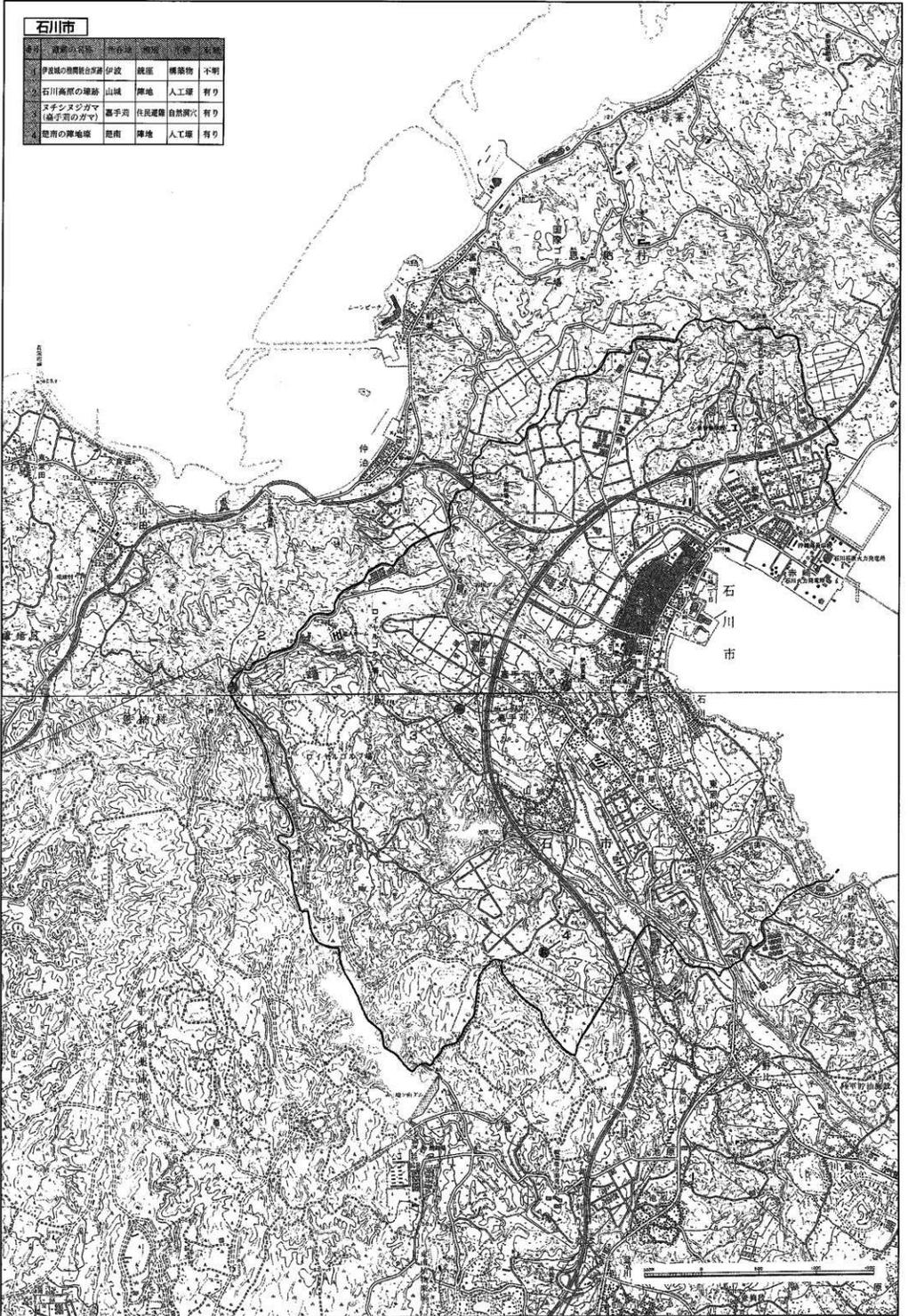
具志川市

名称の名称	所在地	地物	内容	特徴
美化碑(ディーカ ム)の碑	大田	記念物	人工(一部 +海産)	有り
美化碑(ディーカ ム)の彫刻	大田	記念物	機械物	有り
旧天願館(イ ン、ク、ク)	大田	交通関係	建造物	有り
山字型橋	宇野	交通関係	建造物	有り
上江洲のクラガ	上江洲	住民遊樂	自然洞穴	有り
養神のマヤカサ	養神	住民遊樂	人工(一部 +海産)	有り
具志川の御軍砲 台跡	具志川	砲台跡	構築物	有り
旧日本軍陣地跡地	具志川	陣地	構築物	有り
具志川砲台の遺跡 (大田)	具志川	住民遊樂	自然洞穴	有り
大田の指揮所跡	大田	指揮所	構築物+ 人工	有り
旧日本軍砲台跡地	大田	砲台跡	構築物	不明
金崎の砲臺跡	金崎	不明	人工	有り
砲臺	川田	砲臺	構築物	有り

石川市地形図

石川市

場所	遺跡の名称	所在	種類	年代
伊豆川の河川敷台地跡	伊波	陸地	構築物	不明
石川高原の遺跡	山城	陸地	人工跡	有り
ヌチヌチガマ (命子頭の方)	墓手跡	住居遺跡	自然跡	有り
池田の陣地跡	池田	陸地	人工跡	有り



読谷村地形図



読谷村

番号	場所の名称	所在地	種類	備考
1	読谷村の礎	宇原	住民集落	自然開穴 有り
2	稲藁次の忠魂碑	西原次	記念碑等	建造物 有り
3	稲藁味の防空壕跡	稲藁味	住民集落 +防空壕	人工一層 自然崖 有り
4	稲藁味の魔体遺跡	稲藁味	魔体塚	建造物 有り
5	鹿野味の忠魂碑	鹿野味	記念碑等	建造物 有り
6	チビチリガマ	波平	住民集落	自然開穴 有り
7	シムクガマ	波平	住民集落	自然開穴 有り
8	稲藁のテラスガマ	稲藁	住民集落	自然開穴 有り
9	アブツガマの トーチカ	稲藁	トーチカ +砲臺	人工築 有り
10	鹿野海岸沿いの トーチカ	鹿野	トーチカ	建造物 有り
11	北原川沿いの 特攻艇庫遺跡	北原川	艇庫跡	人工築 有り

宜野湾市

番号	遺跡の名称	所在地	種別	形態	有無	番号	遺跡の名称	所在地	種別	形態	有無
1	普天間宮洞	普天間	住民避難	自然洞穴	有り	39	ミーガ	愛知	住民避難	自然洞穴	不明
2	普天間第1洞	普天間	住民避難	自然洞穴	有り	40	ムーティ	愛知	住民避難	自然洞穴	不明
3	ウシガマ	普天間	住民避難	自然洞穴	不明	41	ムーティ	愛知	住民避難	自然洞穴	不明
4	普天間第2洞	普天間	住民避難	自然洞穴	不明	42	ムーティ	愛知	住民避難	自然洞穴	不明
5	タキジョウガマ	野嵩	住民避難	自然洞穴	不明	43	アング	宜野湾	住民避難	自然洞穴	不明
6	ターバルガマ	野嵩	住民避難	自然洞穴	有り	44	ムーセンサクガマ	宜野湾	住民避難	自然洞穴	不明
7	新城ガ	上原	住民避難	人工(一部自然)	有り	45	クームヤ	宜野湾	住民避難	自然洞穴	不明
8	フトク	喜友名	住民避難	自然洞穴	不明	46	クマイ	宜野湾	住民避難	自然洞穴	有り
9	クチグ	喜友名	住民避難	自然洞穴	不明	47	クニ	宜野湾	住民避難	自然洞穴	不明
10	ジ	喜友名	住民避難	自然洞穴	不明	48	オ	宜野湾	住民避難	自然洞穴	不明
11	ア	上原	住民避難	自然洞穴	不明	49	マ	真志喜	住民避難	人工(一部自然)	有り
12	エ	上原	住民避難	自然洞穴	不明	50	ナ	真栄原	住民避難	自然洞穴	不明
13	アカ	伊佐	住民避難	自然洞穴	不明	51	ア	宇地泊	障地	有り	有り
14	キ	伊佐	住民避難	自然洞穴	有り	52	メ	宇地泊	住民避難	自然洞穴	不明
15	岳	大山	住民避難	自然洞穴	不明	53	ナ	真栄原	住民避難	自然洞穴	不明
16	岳	大山	住民避難	自然洞穴	不明	54	ア	真栄原	住民避難	自然洞穴	不明
17	ア	大山	住民避難	自然洞穴	不明	55	ド	大謝名	住民避難	自然洞穴	不明
18	大	大山	住民避難	自然洞穴	有り	56	お	嘉数	障地	人工	有り
19	大	大山	住民避難	自然洞穴	有り	57	嘉	嘉数	障地+トーチカ	構築物+人工	有り
20	大	大山	住民避難	自然洞穴	有り	58	ア	嘉数	住民避難	自然洞穴	不明
21	マ	大山	住民避難	自然洞穴	有り	59	タ	嘉数	住民避難	自然洞穴	有り
22	マ	大山	住民避難	自然洞穴	有り	60	我	志真志	住民避難	人工	不明
23	ミ	大山	住民避難	自然洞穴	不明	61	ヒ	我如古	住民避難	自然洞穴	有り
24	ホ	赤道	住民避難	自然洞穴	不明	62	チ	我如古	住民避難	自然洞穴	有り
25	マ	赤道	住民避難	自然洞穴	不明	63	我	我如古	住民避難	自然洞穴	不明
26	ア	赤道	住民避難	自然洞穴	不明	64	我	我如古	住民避難	人工(一部自然)	有り
27	ガ	愛知	住民避難	自然洞穴	不明	65	我	我如古	障地	人工	有り
28	ティ	愛知	住民避難	自然洞穴	有り						

北谷町

番号	遺跡の名称	所在地	種別	形態	有無
	ワ	浜川	砲台跡	構築物	有り
2	嘉	浜川	監視哨	構築物	有り
3	ク	砂辺	住民避難	自然洞穴	有り
4	(平)	下勢頭	その他	その他	不明
5	ク	桑江	住民避難	自然洞穴	不明
6	吉	吉原	障地	人工	有り
	又	玉上	住民避難	自然洞穴	不明
	白	大村	砲台跡	人工	有り

戦争遺跡分布図凡例

- 1 使用した地形図は国土地理院(平成6年12月1日)発行の25,000分の1を複製、転用した。
- 2 遺跡一覧表の番号は、各市町村とも概ね北の字から南の字へと番号を並べており、分布図と一覧表の番号は対応している。
- 3 遺跡所在地について、本文表記の番地は遺跡の中心部と思われる位置を示しているもので、所在地を限定したもではない。分布地図上に示した範囲についても同様の意図である。
- 4 遺跡の名称については、各市町村において差異があるので、ここでは、地元住民の呼称や、使用していた部隊名が判るものはそれを使用した。
- 5 一覧表の名称は方言名が多いためカタカナ表記が多い。そのため地元の発音と異なるものも多々あると思われる。
- 6 一覧表中の「有」は、遺跡の全部及び一部が現存することを確認できたもので、「不明」は、存在が明確にできなかった遺跡である。
- 7 一覧表中の各遺跡の種別と形態は次のとおりである。
種別:住民避難、障地、政治・行政、記念碑等、砲台、トーチカ、交通関係、秘匿壕、監視哨、銃座、掩体壕、指揮所、不明、その他形態:自然洞穴、人工壕、建造物、構築物、不明
※本附図では、主として軍事目的に建築または土木工事を行った建造物を構築物とし、軍事目的以外のものを建造物とした。
- 8 遺跡のほとんどが、試験調査、発掘調査によって範囲等が変わる場合があるので、近辺での開発工事については当該市町村教育委員会との連絡調整が必要である。